第四節　10 号竪穴

1　竪穴埋土の様相と層序

10 号竪穴は、昭和 38 年度の調査の際にオホーツク地点で確認された凹みのうち、最も南側に位置している。この凹みも発掘を計画した際にはすでに耕作等によって平坦化され、その痕跡は全くわからなくなっていたが、昭和 38 年度の測量図から位置を推定して調査区を設定して調査を進めたところ、測量図に記された凹みとほぼ一致する位置に竪穴住居が確認された。

10 号竪穴のセクションベルトはグリッドの南北（44 ライン）方向と東西（ＸＸⅦライン）方向に沿って設定した[1)]。竪穴の埋土(現地表面から住居床面までの覆土)の厚さは、住居の中央部で約 60cm であった。竪穴埋土の土層堆積は以下のとおりである（竪穴埋土の基本層序であるⅠ～Ⅳ層については第一章第一節参照)。

Fig.130：a−b ライン（1 ～ 14 が 10c 号、15 ～ 17 が 10b 号、18 ～ 42 が 10a 号の埋土、43 ～ 47 は竪穴外の土層）

1：黒色土。植物の根と腐葉を多く含み、土のしまりが悪い（Ⅰ層)。

2：黒褐色土。植物の根と腐葉、砂を含み、土のしまりがやや悪い（Ⅱ層)。

3：暗褐色土。砂と炭化物を含む（Ⅲ層)。

4：暗褐色土。3 よりやや色調が明るい。砂、炭化物、黄褐色粘土粒、焼土粒、骨片を含む（Ⅳ層)。

5：焼土。

6：暗褐色土。

7：褐色土。粘土粒、焼土粒を少量含む。

8：褐色土。やや黄色みを帯びた色調。粘性が高く、砂を多く含む。

9：黒褐色土。土のしまりがよく、粘性が高い。

10：褐色土。8 とほぼ同じ。

11：暗褐色土。焼土粒、ローム粒を少量含む。

12：暗褐色土。11 とほぼ同じ。

13：暗褐色土。焼土粒を僅かに含む。

14：褐色土。ローム質で、焼土粒は含まない。

15：暗褐色土。焼土粒を多量に含む。

16：焼土。赤みを帯びる。

17：褐色土。焼土粒、ローム粒を多量に含む。

18：暗褐色土。4 とほぼ同じだが、炭化物が 4 より多い。

19：褐色土。やや赤みを帯びる。18 と 20 の漸移層。

20：灰白色の灰。

21：灰白色の灰。20 とほぼ同じ。

22：焼土。赤みを帯びる。

23：灰白色の灰。20 とほぼ同じ。

24：黄褐色土。ローム質で、焼土粒を少量含む。

25：明褐色土。粘土質で、直下に位置する貼床 b に似る。

26：黄褐色土。24 とほぼ同じ。

27：褐色土。灰を含む。

28：黄褐色粘土。

29：暗褐色土。

30：褐色土。焼土のブロックを含む。

31：黒褐色土。

32：暗褐色土。焼土ブロックとロームブロックを含む。

33：灰褐色土。ローム質で粘性が高く、粘土ブロックを含む。

34：焼土。

35：暗褐色土。32 より粘性がやや低い。

36：褐色土。ローム粒を多量に含む。焼土粒を少量含む。

37：褐色土。36 とほぼ同じだが、粘性がより低く、土のしまりがよい。

38：褐色土。やや青みを帯びた色調。

39：暗褐色土。焼土粒を多量に含む。

40：暗褐色土。焼土粒とローム粒を含む。

41：灰褐色土。

42：灰褐色土。41 より色調がやや明るい。

43：黒褐色土。2 とほぼ同じ。

44：暗褐色土。4 とほぼ同じ。

45：明褐色土。ローム粒・焼土粒を多量に含む。

46：暗褐色土。35 より粘性が高い。

47：灰褐色土。

Fig.130：c−d ライン（1 ～ 13 が 10c 号、14 ～ 16 が 10b 号、17 ～ 22 が 10a 号の埋土、23 ～ 24 は竪穴外の土層）

1：黒色土。植物の根と腐葉を多く含み、土のしまりが悪い（Ⅰ層）。

2：黒褐色土。植物の根と腐葉、砂を含み、土のしまりがやや悪い（Ⅱ層）。

3：暗褐色土。砂と炭化物を含む（Ⅲ層）。

4：暗褐色土。3 よりやや色調が明るい。砂、炭化物、黄褐色粘土粒、焼土粒、骨片を含む（Ⅳ層）。

5：暗褐色土。白色の火山灰が混じる。

6：暗褐色土。粘土質で土のしまりが強く、焼土粒を含む。

7：黄褐色粘土。土のしまりが強く、粘性が高い。層の上部に礫を含む。

8：暗褐色土。

9：明褐色土。ローム粒と焼土粒を多量に含む。

10：明褐色土。9 とほぼ同じ。

11：明褐色土。10 とほぼ同じ。

12：明褐色土。ローム粒と焼土粒を僅かに含む。

13：暗褐色土。ローム粒と焼土粒を少量含む。

14：黒褐色土。1 とほぼ同じ。

15：暗褐色土。ローム粒を少量含み、土のしまりが悪い。

16：明褐色土。ローム粒を少量、焼土粒を僅かに含む。

17：暗褐色土。ロームブロックを含む。

18：暗褐色土。礫と炭化材を含む。

19：暗褐色土。ローム粒を多量に、焼土粒を少量含む。

20：褐色土。灰を少量含む。

21：褐色土。ローム粒を多量に、焼土粒を僅かに含む。

22：焼土。

23：黒褐色土。焼土ブロックを含む。

24：暗褐色土。19 より黄色みを帯びた色調。焼土粒を含む。

c−d ラインの、Ⅱ層とⅢ層の層界面の一部において、白色火山灰が薄くまばらに堆積している様子が確認された（Fig.130：c−d ラインの 5）。この火山灰は樽前 a 降下火山灰（Ta−a：1739 年降下）と考えられる。

10 号竪穴も全面にわたって火を受けており、特に開口部側の壁際近くでは焼土がやや厚く堆積していた（Fig.130：a−b ラインの 22、Fig.129 の開口部西側の貼床 c の外側に位置する「焼土」など）。住居の壁を構成していた樹皮や板材については、炭化した材の列が南西側と東側の壁ではそれぞれ 3 列ずつ、奥壁西側の壁では 1 列確認されるなど、遺存状況が良好な部分も見られたが、全体としてあまり遺存状態はよくなかった。粘土の貼床についても遺存状況が悪く、開口部側と奥壁側で焼けた状態の貼床が部分的に確認されたのみで、住居の中央部分では粘土が貼られている状況は明瞭には確認できなかった。

2　竪穴住居

2−1　建て替えの概要

10 号竪穴（Fig.129、PL.46−2）は、第一章第二節の 2005 年度調査概要で述べたとおり、基本的に 3

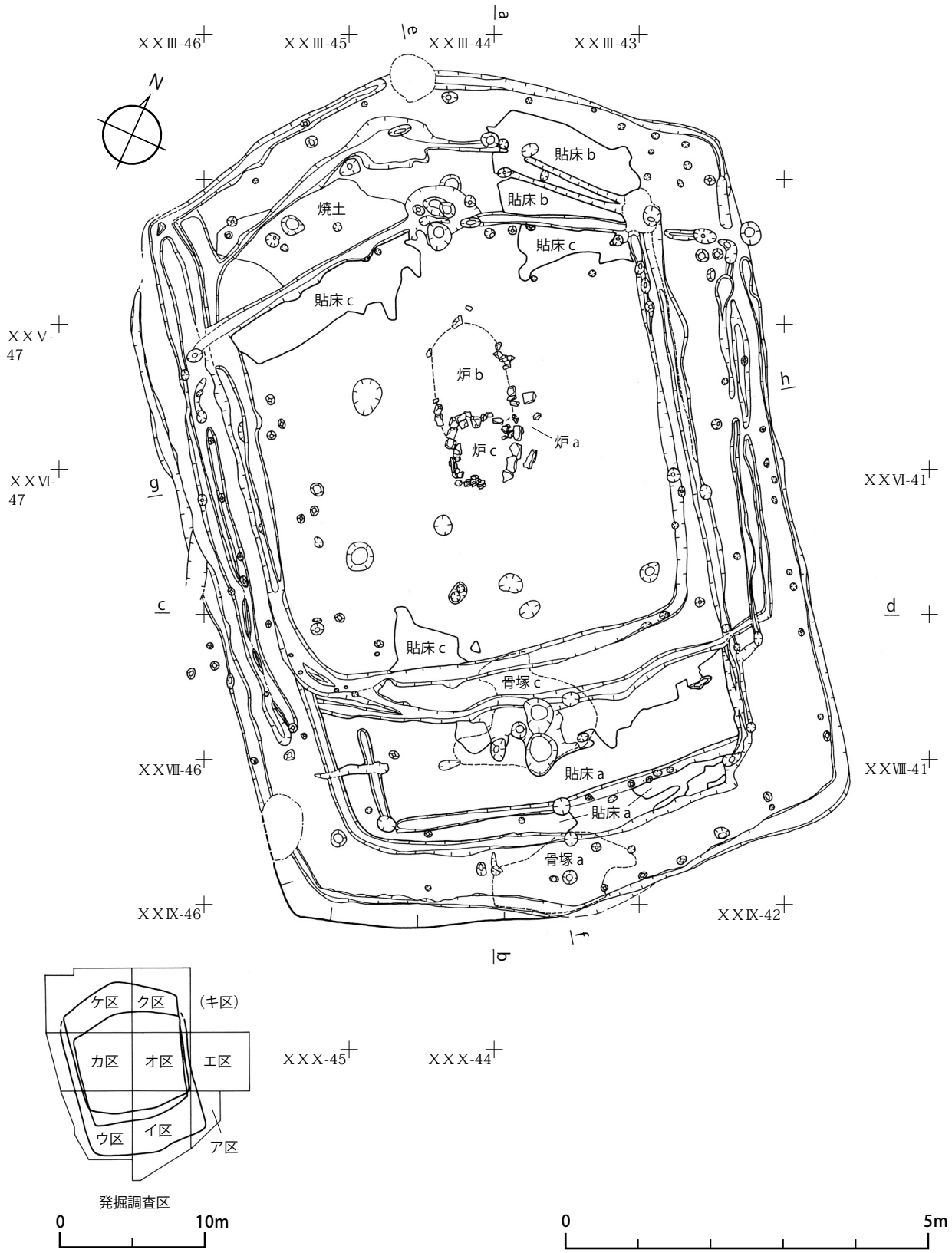


Fig. 129　10 号竪穴平面図

Fig. 130　10 号竪穴土層図・エレベーション図

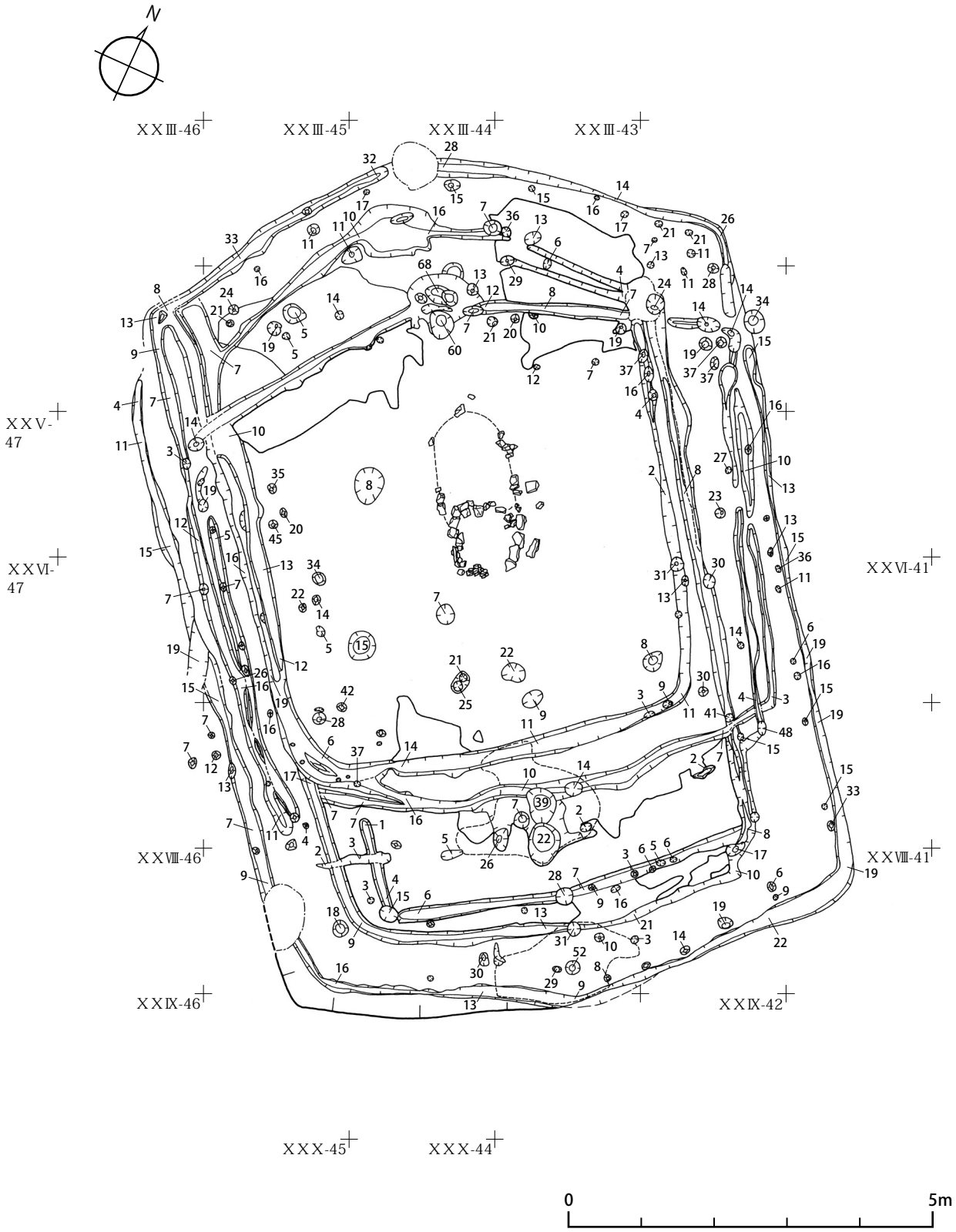
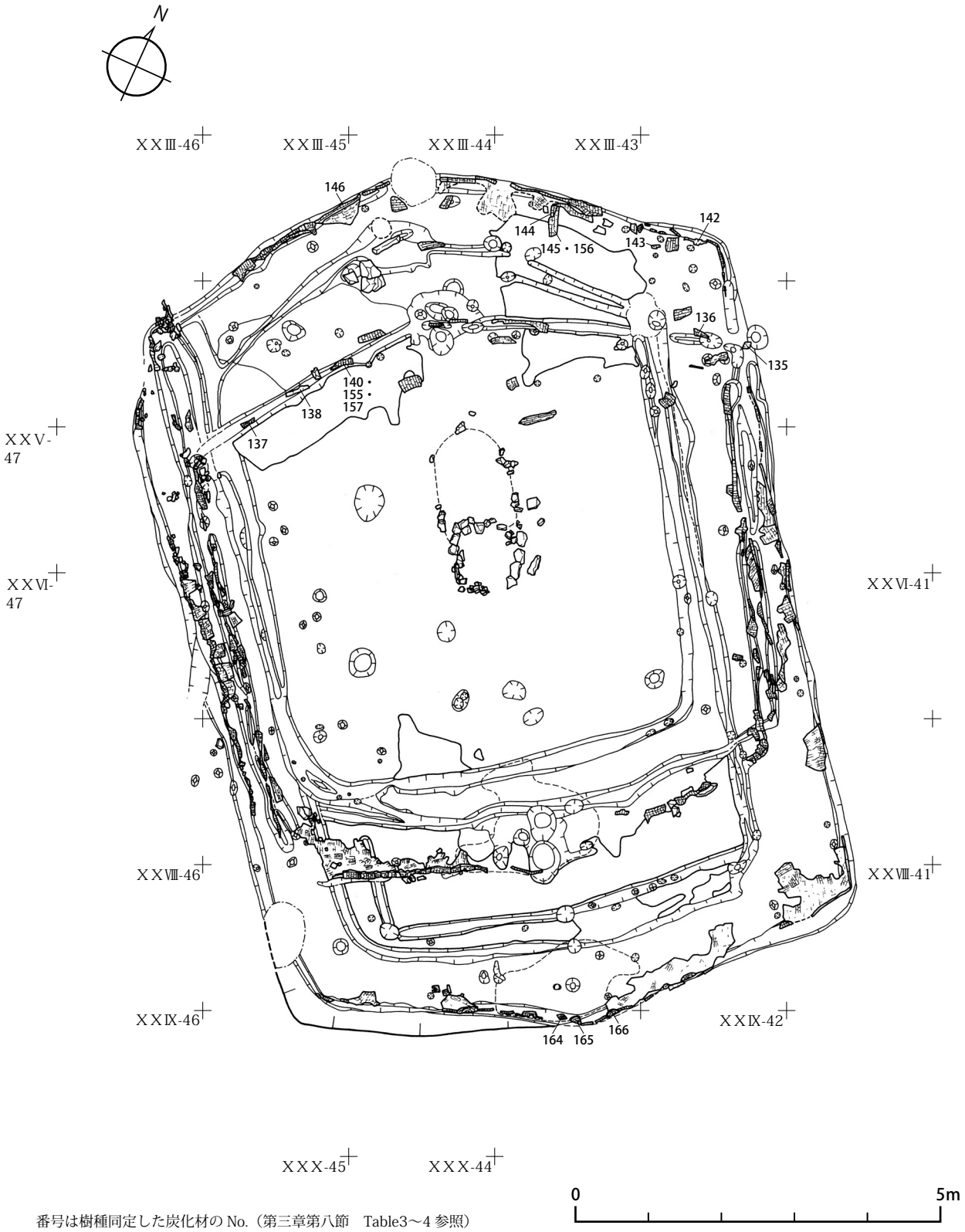


Fig. 131　10 号竪穴柱穴の深さ（床面から−cm）



番号は樹種同定した炭化材の No.（第三章第八節　Table3～4 参照）

Fig. 132　10 号竪穴床面の炭化材出土状況

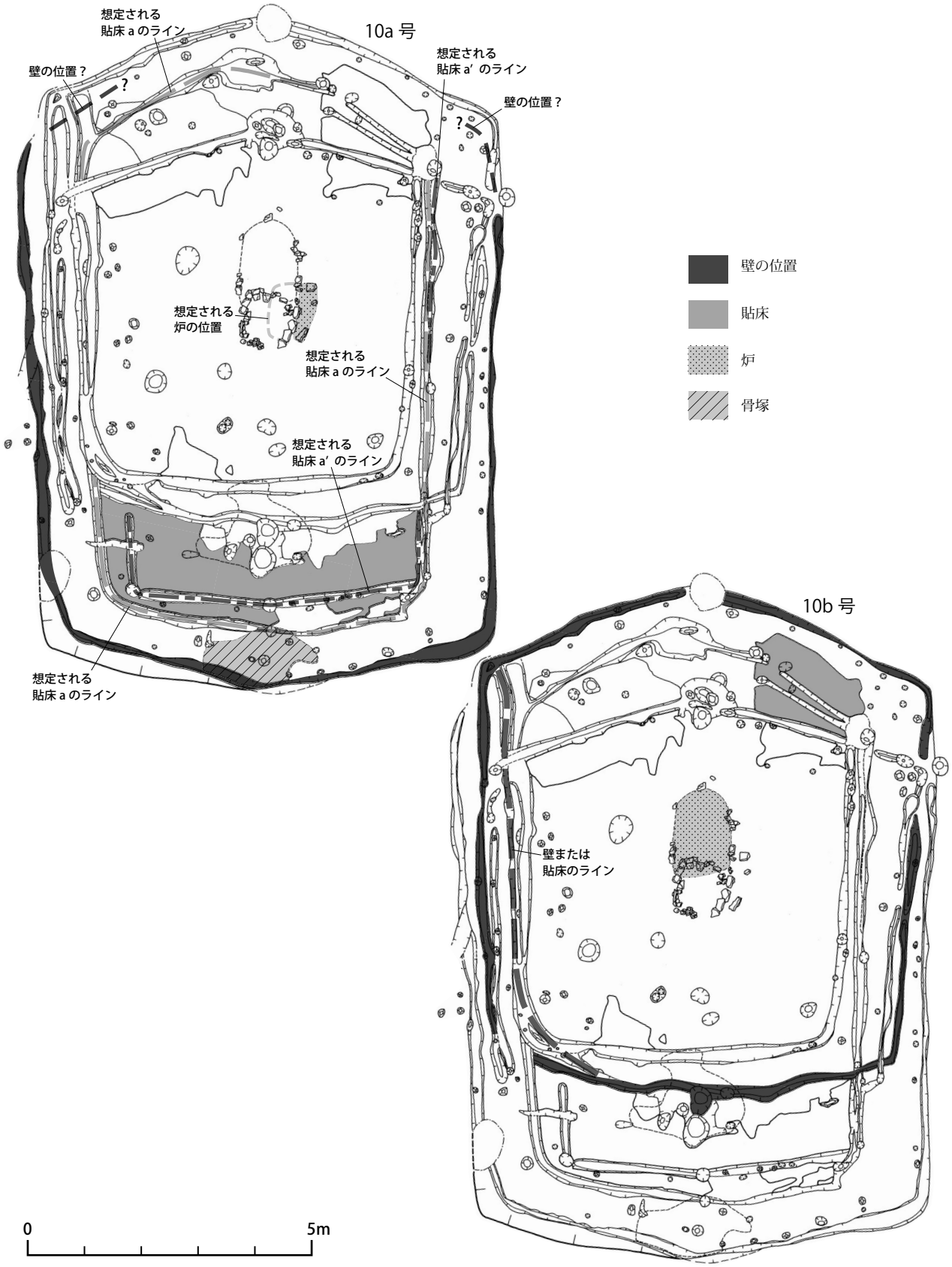


Fig. 133　10 号竪穴の変遷過程 1

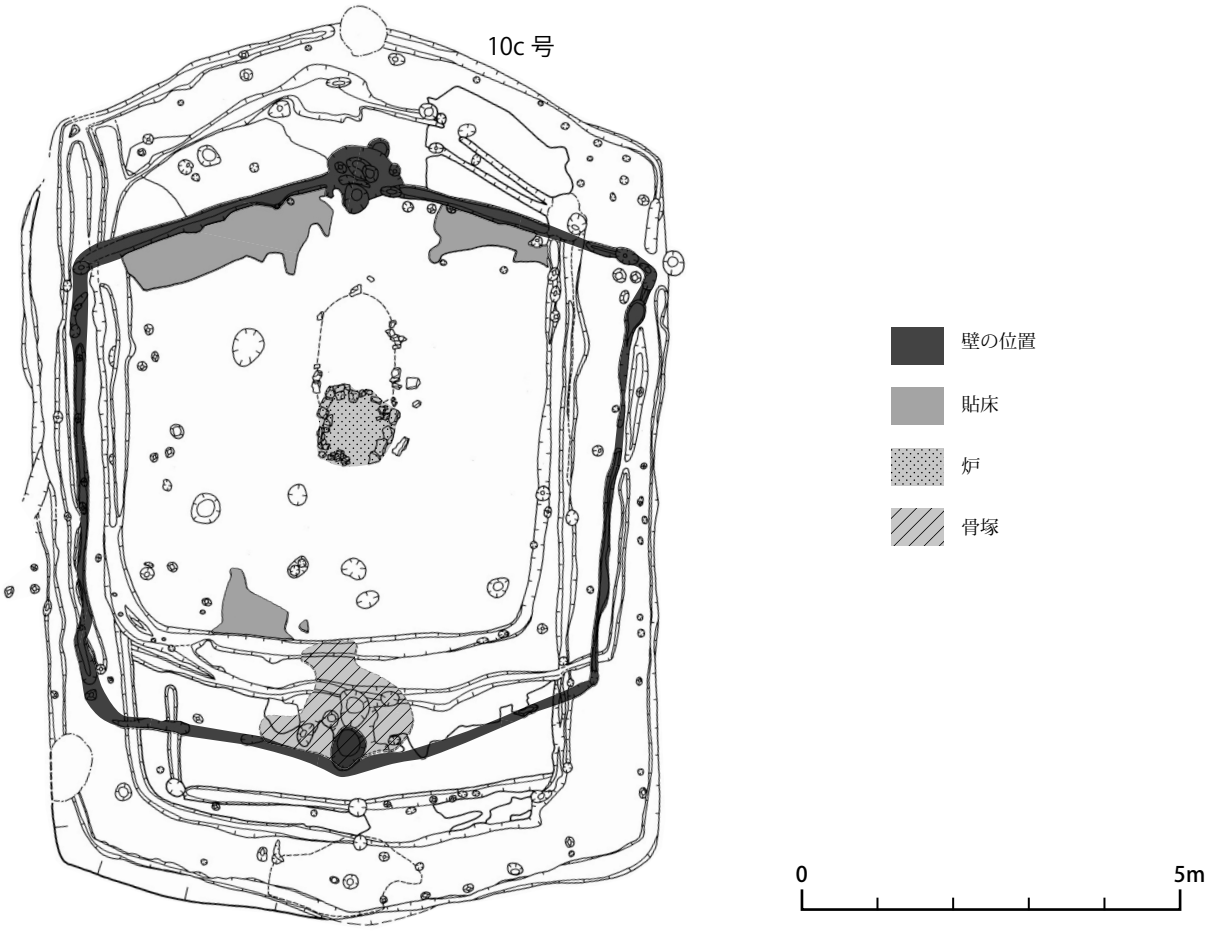


Fig. 134　10 号竪穴の変遷過程 2

回の建て替えが行われていたと判断された。そこでも述べたように、建て替え順序と各段階の住居の壁の位置を認定する際に手がかりとしたのは、竪穴の南西側と東側でそれぞれ 3 列ずつ検出された炭化材列である。すなわち、この 3 列が 3 回の建て替えを示すものと考えて各列の延長を追いかけるとともに、炭化材（住居の壁）を収めていた周溝の延長と切り合い関係を確認することにより、壁の位置の変遷、すなわち建て替えの過程を復元した。その結果、建て替えは住居の面積を順次縮小しつつ、全体を長軸方向に大きく前後移動させるかたちでおこなわれていたことが判明した（Fig.133 ～ Fig.134）。建て替えはやや複雑な過程を経ており復元には困難も伴ったが、以下のような調査所見と論理に基づいて考察した [2)]。やや煩雑になるが、判断の過程について具体的に述べておく。

最も古い段階となる 10a 号竪穴（Fig.133 上）は、南西側に 3 列確認された炭化材列のうちの最も外側の列と、それを収めた周溝を基点として、その延長を追いかけるかたちで壁の位置を復元した。基点となる南西壁の一番外側の周溝は、一部で断絶するものの南側の一番外側の周溝に連続し、東側でも一

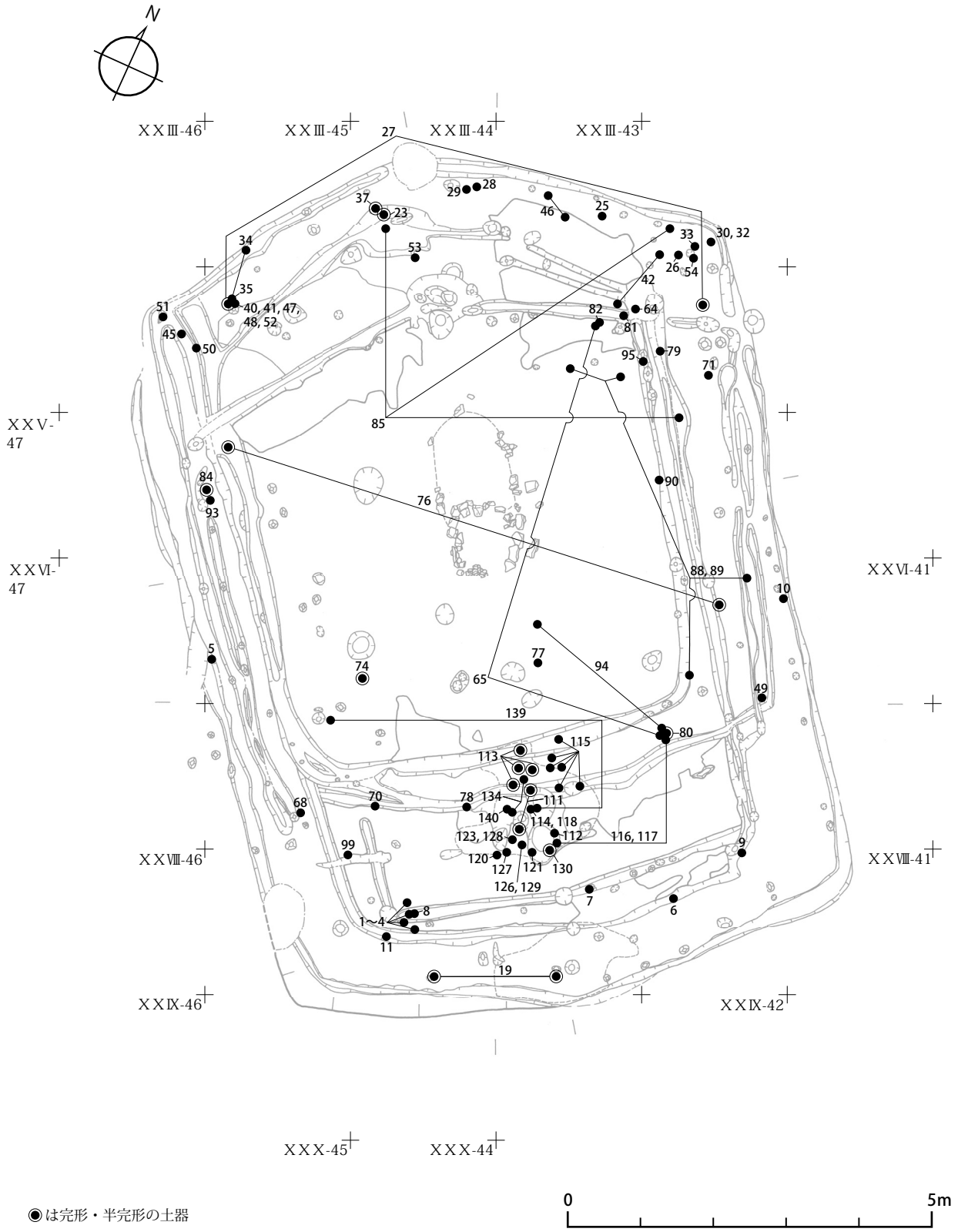


Fig. 135　10 号竪穴床面出土土器分布図

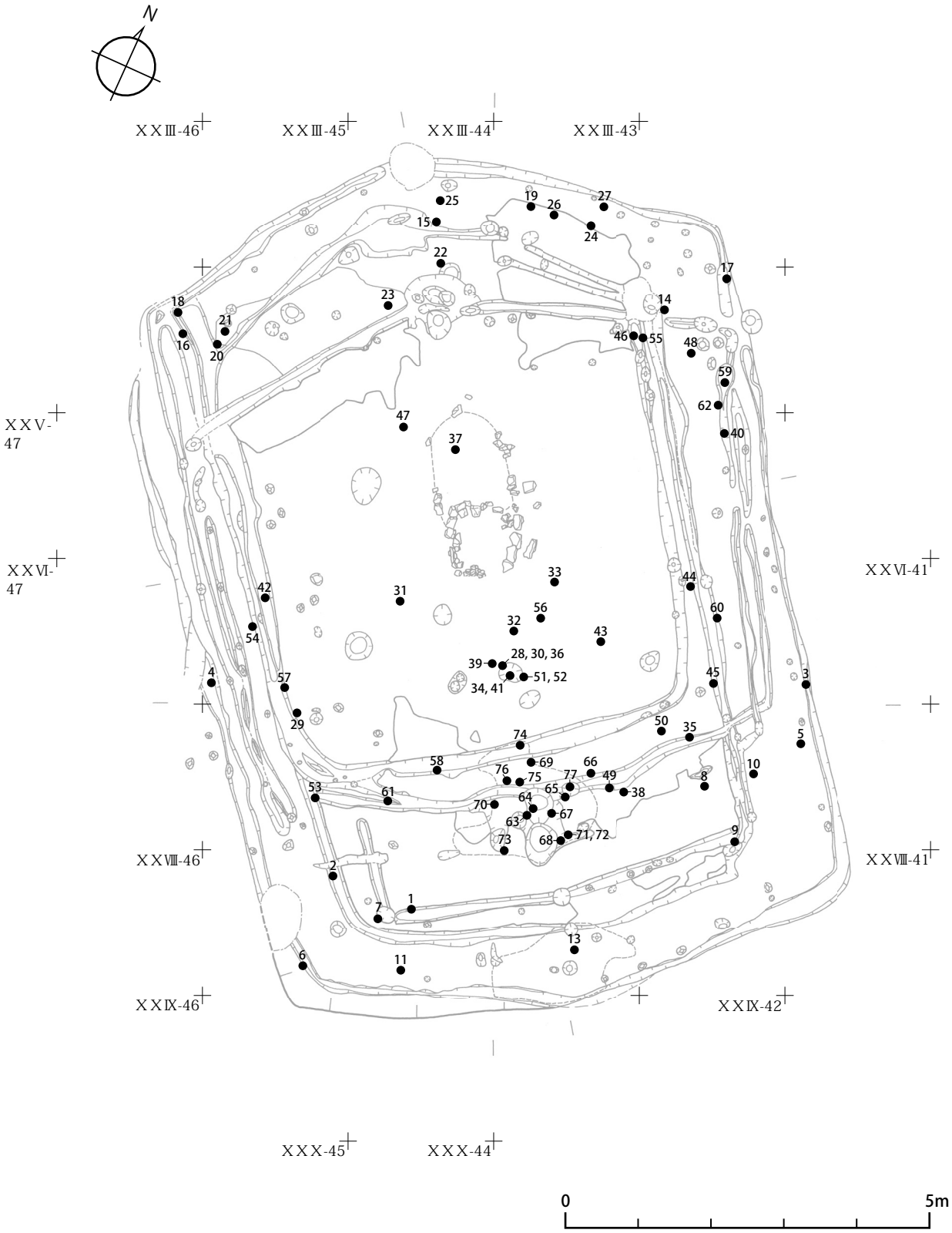


Fig. 136　10 号竪穴床面出土石器分布図

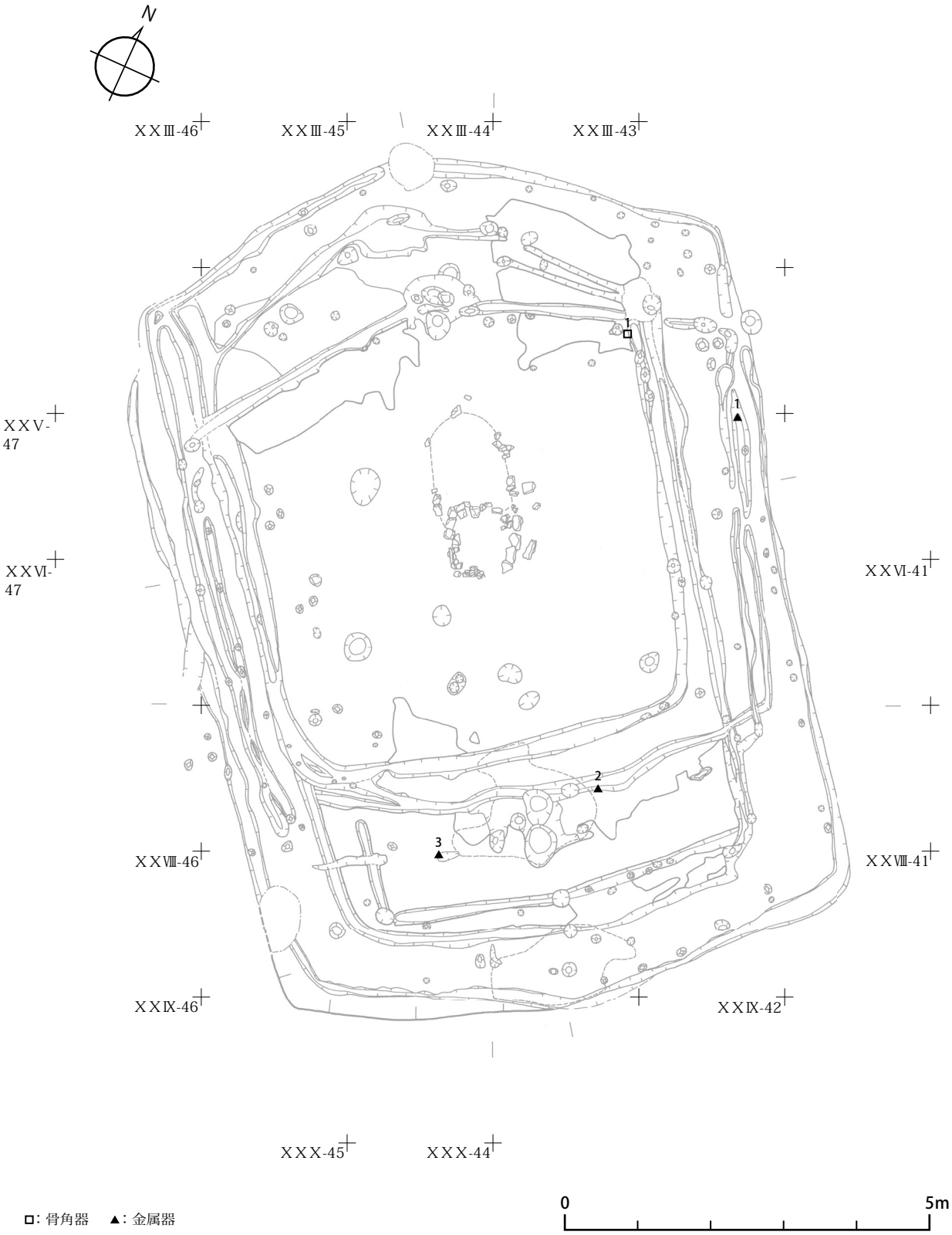


Fig. 137　10 号竪穴床面出土遺物分布図（土器・石器以外）

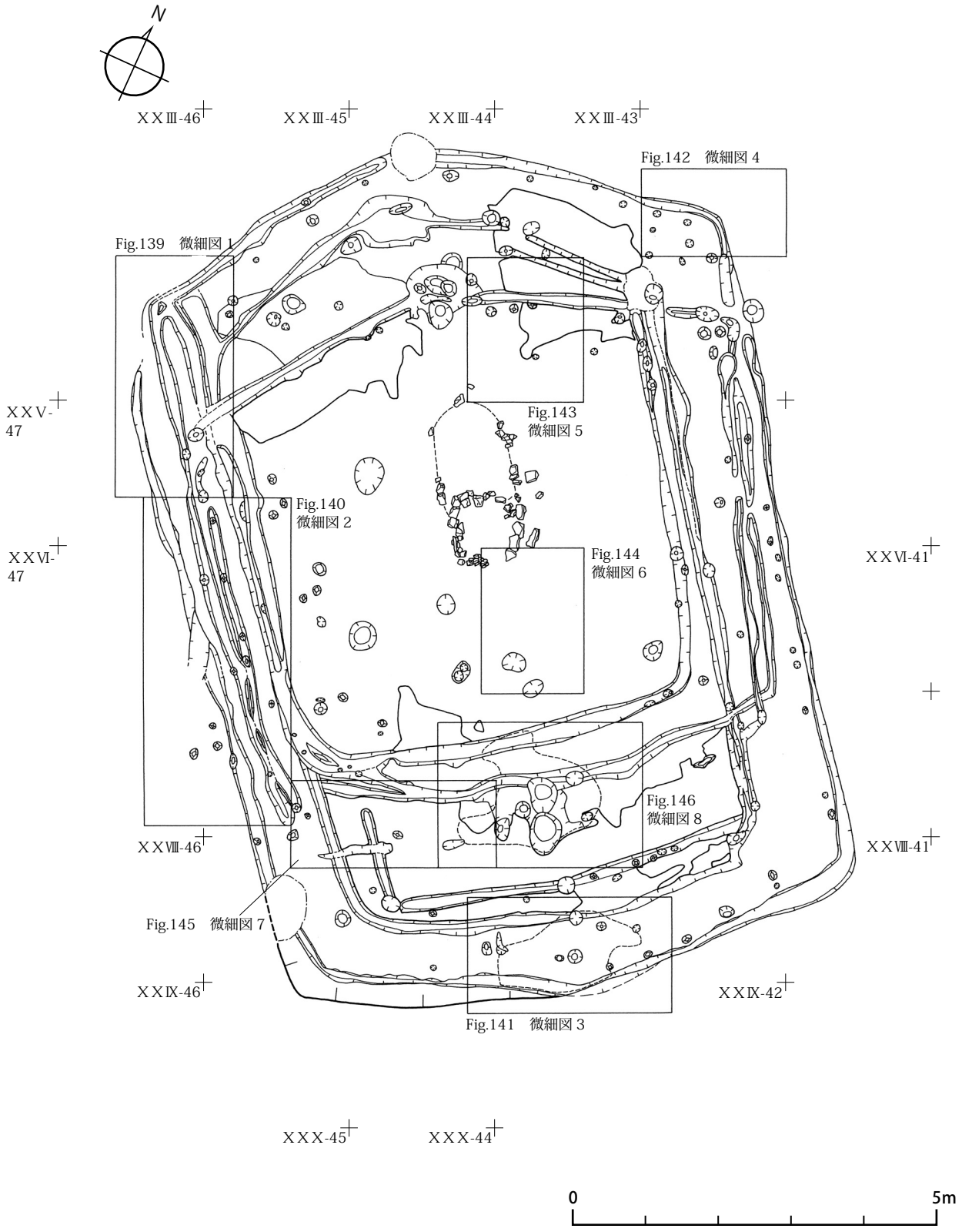


Fig. 138　10 号竪穴床面の遺物集中箇所

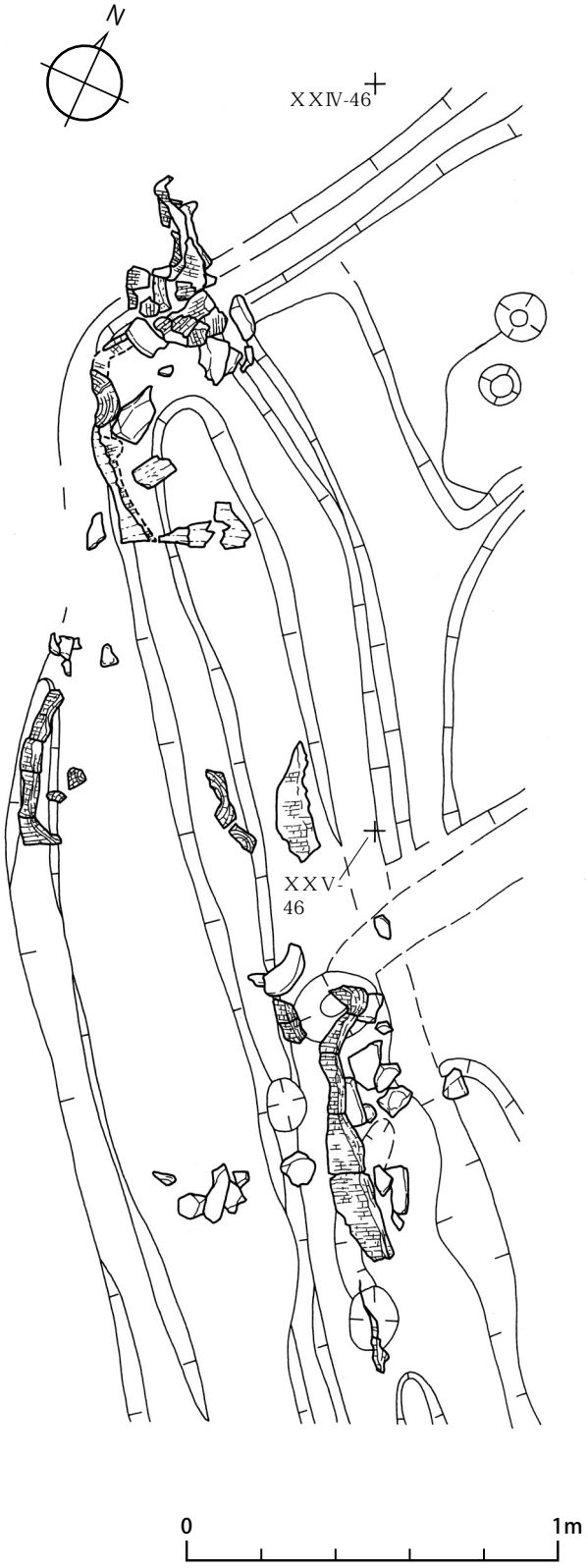


Fig. 139　10 号竪穴床面の微細図 1（10a 号・10b 号・10c 号の北西隅）

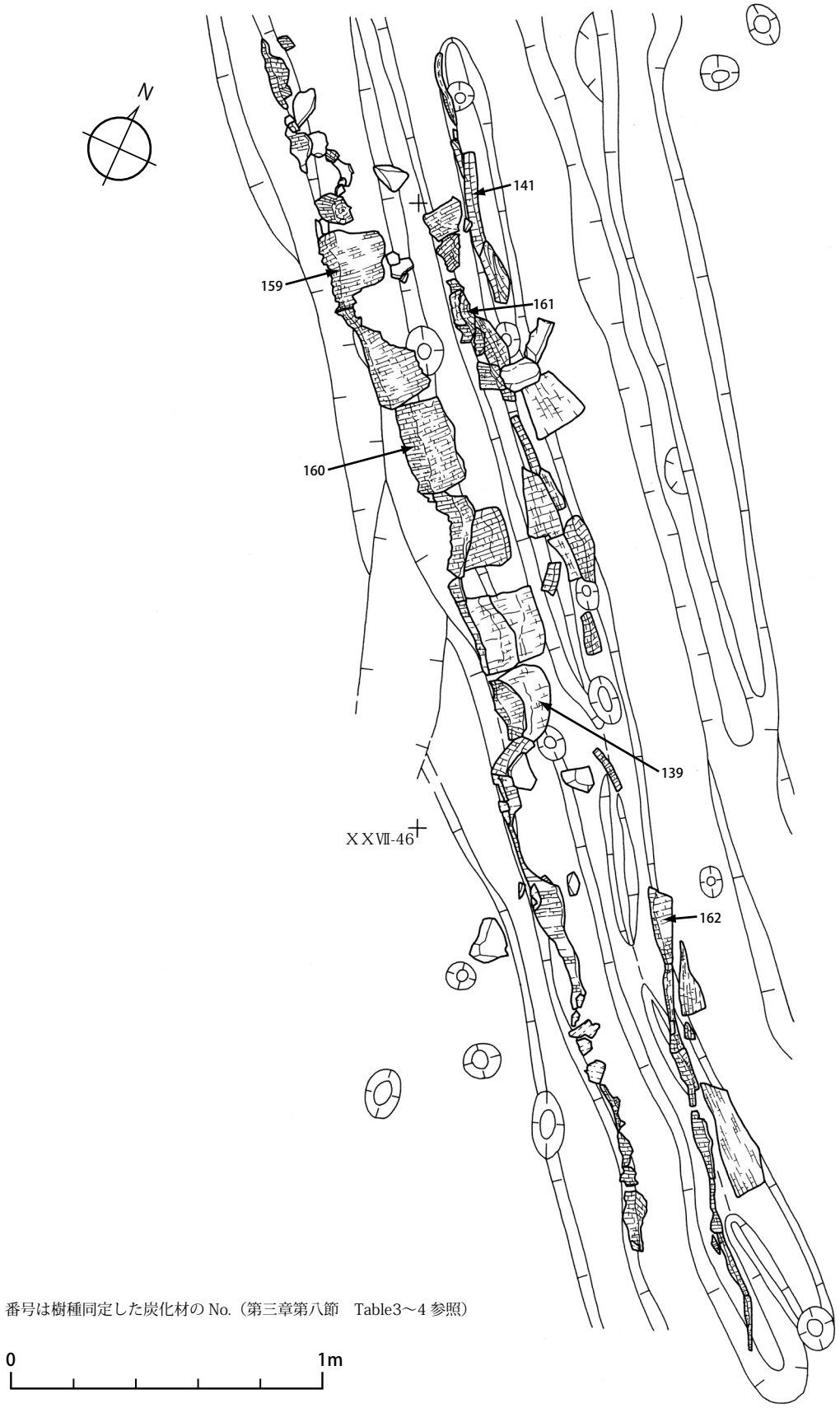


Fig. 140　10 号竪穴床面の微細図 2（10a 号・10b 号・10c 号の西壁際）

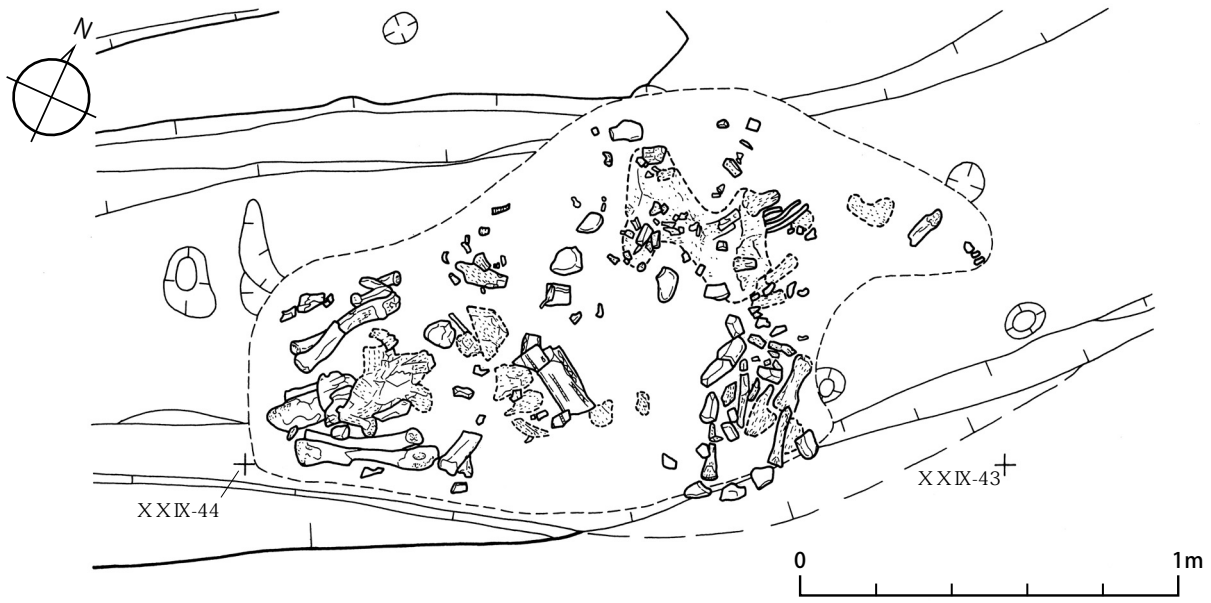
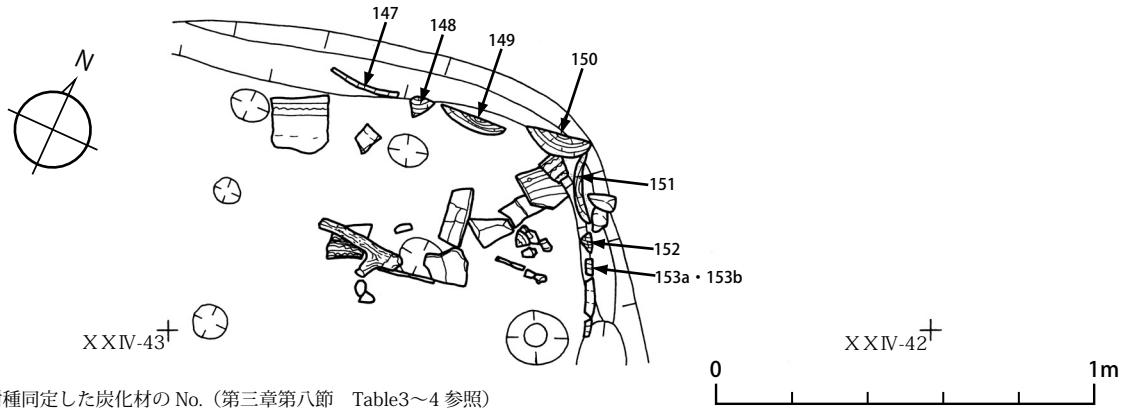


Fig. 141　10 号竪穴床面の微細図 3（10a 号骨塚 a）



番号は樹種同定した炭化材の No.（第三章第八節　Table3～4 参照）

Fig. 142　10 号竪穴床面の微細図 4（10b 号北東隅）

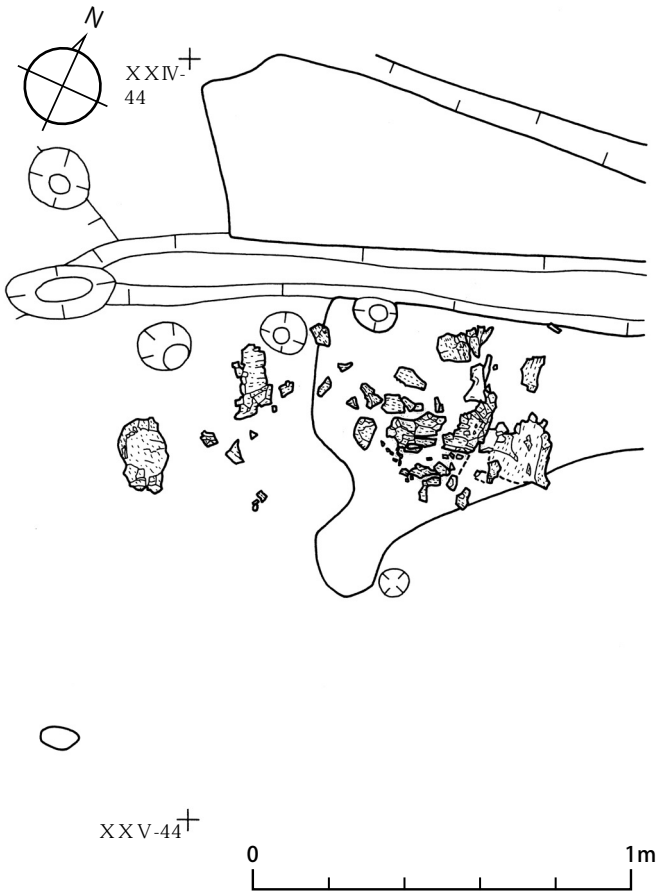


Fig. 143　10 号竪穴床面の微細図 5（10c 号開口部壁際東部）

番外側の周溝に連続していた。その一方で、10 号の開口部側の最も外側（北側）で確認された周溝は、後述のとおり前述の 10a 号の周溝とは連続していなかった。そのため 10a 号竪穴の北壁の位置は何処になるのか、北側の竪穴外も含めて探索したが、それに該当するような痕跡は確認できなかった。おそらく 10a 号の北壁は、確認された最も北側の周溝（後述の 10b 号の開口部側の壁）よりも内側に存在していたものの（Fig.133 上の「壁の位置？」の鎖線）、後の建て替えの際により深く掘り込まれた 10b 号に北壁部分を破壊されてしまったと考えられる。この推測の根拠となったのは、10a 号竪穴の炭化材列と周溝が、特に西側と東側においては最も標高の高い（浅い）位置に残されていた点である（Fig.130：g–h ラインエレベーション図を参照）。すなわちこの標高差は、もともと 10a 号の床が特に長辺の壁際付近では 10b 号よりも高い位置にあって、後に破壊されてしまったことを示唆している。ただしこれ以外の部分では 10a 号の床面と 10b 号・10c 号のそれとの間に明確な標高差は確認されていないため（Fig.130 の e–f ラインエレベーション図を参照）、このような想定には疑問の余地もある。なお後述の

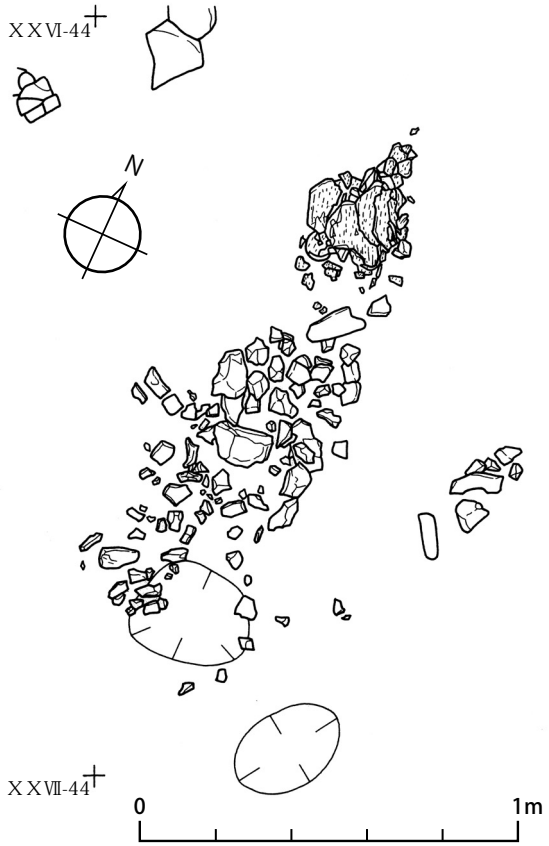


Fig. 144　10 号竪穴床面の微細図 6（10c 号炉 c の南東側）

ように、10a 号の段階では貼床の形を 1 回整形し直していることが確認されている（Fig.133 上の「貼床 a のライン」が古く「貼床 a' のライン」が新しい）が、貼床の整形に対応する壁の改築は認められなかった。

続く段階が 10b 号竪穴である（Fig.133 下）。南西側と東側に 3 列ずつ残されていた炭化材列の、中央の列とそれを収めた周溝を基点としてその延長を追いかけたが、その確認は困難を極めた。北壁部分とのつながりを見ると、西壁・東壁ともに断絶があるため疑問の余地はあるが、北西隅において南西壁の 3 列の中央のラインから伸びた炭化材が最も外側の北壁と繋がる点（Fig.139）や、南東隅において東壁の 3 列の中央のラインから伸びた周溝が、後述の 10c 号の周溝に切られながら 10c 号の奥壁の位置より手前で奥壁へと屈曲していく点などから、Fig.133 下に示したような壁の位置を復元した。10a 号からの変遷を見ると、壁を長軸方向に強く、短軸方向にもわずかに縮小しつつ、全体を開口部側に移動させて建て替えている。この 10b 号の段階でも貼床の一部を整形し直しているが、やはりこの整形に関しても対応する壁の改築は認められなかった。

次の最も新しい段階が 10c 号竪穴である（Fig.134）。東西南北とも全て最も内側に残された、遺存状

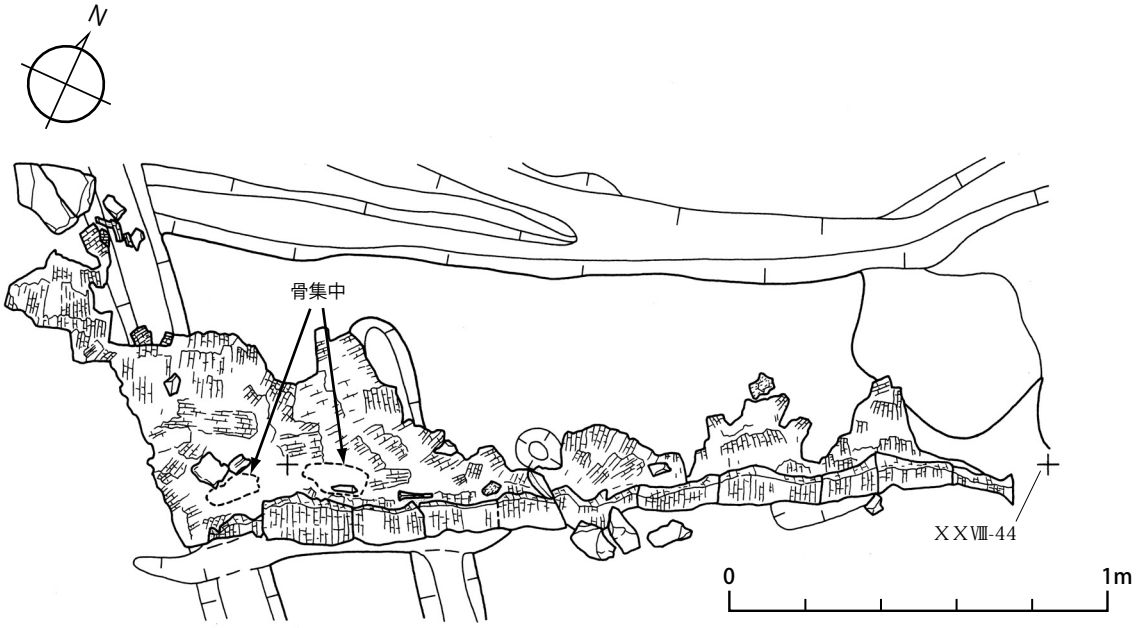


Fig. 145　10 号竪穴床面の微細図 7（10c 号の南西隅）

態の良い炭化材列（とその下部の周溝）の延長をつないだラインを、最も新しい 10c 号竪穴の壁と判断した。なお､10c 号の奥壁の炭化材列は遺存状態が良好で壁がこの位置に存在していたことは明確であったが（Fig.132・Fig.145）、この場所では炭化材列の下面に周溝が確認できたのはごく一部で、床面を掘り込まずに壁が構築されていた。周溝がない理由としては、この位置には古い 10a 号の焼けた貼床が硬化して遺存していたため、これを掘り抜くのが困難であったことが考えられる。なお、周溝がないことを補完するように、この 10c 号奥壁の炭化材の内側及び外側には黄褐色の粘土や礫が壁の延長に沿って検出されており、10c 号の奥壁はこれらの構造物によって支えられていたと推測された。10b 号から 10c 号への変遷を見ると、壁を長軸方向にやや強く、短軸方向にもわずかに縮小しつつ、全体を奥壁側に移動させて建て替えている。

以下、10a 号・10b 号・10c 号の各竪穴について述べる。

2−2　10a 号竪穴

10a 号竪穴（Fig.129・Fig.133 上）は、北側（開口部側）の壁の位置が不明であるが平面形はおそらく縦長の六角形を呈すると考えられ、壁の長辺はほぼ平行している。長軸の方向は北西－南東で、長軸の長さは竪穴の下端で 11.2m 以上、短軸は 8.3m である。北側の壁については、前述のように 10b 号の北壁と 10c 号の北壁との間に位置していたと推測される。

Fig. 146　10 号竪穴床面の微細図 8（10c 号骨塚 c）

柱穴は、壁際を中心に多数確認された。長軸上の奥壁付近、骨塚の下部で検出された柱穴（Fig.131 で深さ 52cm となっているもの）が主柱穴に相当すると見られるが、主柱穴としてはやや径が小さいようである。そのすぐ手前の長軸上、貼床 a および貼床 a' の外周の周溝にあるピット（Fig.131 で深さ 31cm および 28cm となっているもの）とあわせて、数本の細い柱で支える構造だったのかもしれない。開口部側は長軸上、貼床 a の外周の周溝の屈曲点にピットが崩れたような痕跡があり、ここに主柱穴が設けられていた可能性が考えられるが、大きく崩れていたため確定はできなかった。

北壁を除く壁際では壁材を収めていたと見られる周溝が検出され、そのうち、特に南西壁の周溝には壁材と見られる炭化材列が良好な状態で遺存していた（Fig.140）。炭化材列、すなわち住居の壁の構造に関しては 7 号～ 9 号竪穴と同様の様相が確認されている。具体的には、外側の壁に接する部分に樹皮を当て、その内側に板材ないし丸太の 1 ／ 4 程度の割材（平坦面を外側に向ける）を縦方向に立てて並べて壁の構造としている状況が確認された。

10a 号に伴う貼床は、10b 号の南壁より外側の部分のみで遺存しており（Fig.129 の貼床 a、Fig.133 上の薄い網掛け部分）、この部分の貼床は火を受けて硬化していた。貼床 a の外周には周溝が 2 本掘り込

まれているが、北壁付近では外側（Fig.133 上の「想定される貼床 a のライン」）が古く、10a 号に伴う骨塚 a が上に被っている。内側の周溝（Fig.133 上の「想定される貼床 a' のライン」）は後から掘り直されたもので、骨塚 a はこの「貼床 a' の周溝」上までは拡がっていない。「貼床 a の周溝」は深く掘り込まれているのが特徴で、住居の西壁と東壁に並行するラインにおいても痕跡が確認できる。すなわち西側では 10c 号の貼床外周の周溝がおそらく上から重複して掘り直されており、東側では 10c 号の貼床外周よりも外側に位置している。この、貼床 a の東縁のラインでは、奥壁側とは異なり「貼床 a' の周溝」の方が「貼床 a の周溝」よりも外側に浅く確認されている。他に住居の北側では、10b 号の壁の内側、反時計回りにやや振れた方向で 10b 号の壁と入れ子状の深い周溝が確認されているが、これは方向のずれ方や掘り込みの深さから推測して 10a 号の貼床 a の外周の周溝の延長であると考えられる [3)]。以上の点から明らかなように、10a 号では貼床 a が最初につくられ、後に貼床の奥壁側が切り直され、やや縮小された貼床 a' へと改変されたようである。ただし、この貼床の切り直しには壁の位置の改変は伴っていなかったようで、対応する壁の改築は確認されていない。

炉は、竪穴の中央部で切り合ったような状況で検出された。炉の外周をめぐる石組みの様相や焼土の遺存状況を検討した結果、これは 3 基の石組み炉が住居の建て替えにあわせて位置を移動したものと判断された。このうち 10a 号に伴うと見られる炉は、長軸のやや東側に検出されたものと推定された（Fig.129 の炉 a、Fig.133 上）。これは後述する炉 b と炉 c に大部分が切られて破壊されており、石組みと焼土の痕跡が一部のみ残っているような状況であった。

骨塚は 10a 号に伴うものと 10c 号に伴うものが検出された。10a 号の骨塚 a（Fig.129、Fig.141、PL.41−1・2）は長軸上の奥壁際に位置しており、東西 2m・南北 1m の範囲に拡がる比較的小規模なものであった。骨塚 a の西端にはヒグマの四肢骨が集積されており（Fig.141、PL.41−1）、また骨塚 a の下面には粘土が敷かれていた。骨塚 a から出土した動物遺存体の詳細については第三章第九節に掲載しているが、ヒグマの四肢骨や体幹骨が大半を占めている一方で、ヒグマの頭骨は全く検出されなかった。以上の動物遺存体の他に、骨塚 a からは土器（Fig.149）、石器（Fig.159）が出土している。

骨塚 a 以外の 10a 号竪穴床面出土遺物としては、土器（Fig.147・Fig.148）、石器（Fig.158）が出土している。土器は骨塚 a 出土のものを含め、オホーツク文化貼付文期が主となる。

2−3　10b 号竪穴

10a 号の奥壁側を大きく縮小するとともに両側の壁もわずかに縮小し、長軸をわずかに時計回り方向に振りつつ、全体を北側に移動して建て替えたのが 10b 号竪穴である（Fig.129・Fig.133 下）。平面形は縦にやや長い六角形で、開口部側の頂点が強く張り出し、横方向（短軸方向）の幅は開口部側が広く奥壁側が狭い。竪穴の下端での長軸の長さはで 9.0m、短軸は 8.0m ～ 7.1m である。

柱穴は、長軸上の奥壁側、壁より僅かに外側に主柱穴と見られるピットが確認できた。開口部側の主柱穴については、長軸上の頂点に攪乱坑が掘り込まれており詳細不明であった。これらの主柱穴以外にも、壁際を中心に多数の柱穴が確認されている。

壁際では壁材を収めていたと見られる周溝が検出された。周溝内には、奥壁を除く三方の壁や住居の北西隅、北東隅で断続的に炭化材が遺存しており（Fig.139、Fig.140、Fig.142）、それらの部分でも 10a 号の項で述べたような樹皮と板材を利用した壁の構造が観察された。住居の南東隅部分では、10b 号の周溝が 10c 号の周溝およびその内部に収められた炭化材に切られている状況が確認されている。

10b 号に伴う貼床は、開口部の東側、10c 号の北壁より外側の部分で、熱を受けて硬化した状態で検出された（Fig.129 の貼床 b、Fig.133 下の薄い網掛け部分）。この部分の形状から判断すると貼床はやはり「コ」の字形の形状をしていたと見られるが、この「貼床 b」以外の部分では貼床は検出されなかった。その一方で、本来、貼床が存在するはずの開口部の西側では床面上に焼土があたかも貼床に対応するような形状で検出されている（Fig.129 の「焼土」）。

開口部東側で検出された貼床 b では、硬化した貼床を切って 2 本の周溝が掘られており（Fig.133 下）、周溝中には（Fig.132 等では図示していないが）炭化材の痕跡が残っていた。この周溝は 10a 号の時期に切られたものである可能性も考えられたが、この貼床の西側で確認された 10a 号の貼床外周の周溝（Fig.133 上の北壁側の「想定される貼床 a のライン」）はこの貼床 b の下部に潜り込んでいくようなかたちで途切れていたことから、貼床 b は 10a 号の廃絶後に 10b 号に伴うものとして作られ、それが（10b 号の存続中に）成形し直されたものと判断した。ほかに貼床 b の外周をめぐる周溝としては、長軸を挟んで反対側（西側）の壁近くに延びている周溝（Fig.133 下の「壁または貼床のライン」）がその可能性があるが、この周溝は 10b 号の北壁と接続しており、やや不自然な部分もある。10b 号の古い段階の壁とも考えられたが、どちらとすべきか結論は出なかった。いずれにしても、貼床 b を縁取るように周溝が確認されたのは上記の部分のみで、他の位置ではそれに該当する周溝は検出されなかった。これらの周溝は貼床 b の外周をめぐる「木枠」の存在を示唆するが、前述の「10b 号の北壁と接続する周溝」には炭化材が検出されなかったこととあわせて考えると、貼床 b の外周の木枠は存在したとしても部分的なものであったと考えられる。また、貼床 b は貼床 a と同様に、構築後に縮小して切り直されているとみられるが、切り直しが確認できたのは上記の部分のみであり、全体としてどのような改変がなされたのかは不明であった。

10b 号に伴う炉は、壁の位置との対応関係から推測して前述の 3 基の石組み炉のうちの炉跡 b としたもの（Fig.129、Fig.133 下）であると考えられる。縦にやや長く、石組みが一部残っているが、10c 号の時期に炉 c に破壊されたと見られ、遺存状態はあまり良くなかった。

10b 号の骨塚については、この段階に伴うものは確認されていない。位置的には 10c 号の骨塚 c の北側の位置に存在していた可能性が考えられるが、この位置で骨の堆積は認められなかった。10b 号から 10c 号にかけて継続的に骨塚 c が形成され続けた可能性を考えておく必要はあるが、骨塚 c の調査所見では、内部で時期差が判別できるような状況は特に存在しなかった。

10b 号竪穴の床面からは、土器（Fig.150 ～ Fig.152）、石器（Fig.160・Fig.161）、鉄製の刀子（Fig.169−1）が出土している。土器はオホーツク文化貼付文期が主となる。

2−4　10c 号竪穴

10c 号は、10b 号の開口部側の壁を大きく縮小するとともに両側の壁もわずかに縮小し、10b 号とほぼ同じ長軸上で全体をやや南側に移動して建て替えている。平面形は六角形で、横方向の幅は開口部側が広い。竪穴の下端での長軸の長さは 7.9m、短軸は 7.8m ～ 6.9m である。

柱穴は、長軸上の両端で主柱穴と見られるピットが検出されている。北側の主柱穴においては、細い柱穴が 3 本以上集中している状況が認められたが、各々が切り合っている状態で検出されており、何本かの柱を束ねて同時に立てたものではないようである。他にも壁際を中心に多数の柱穴が確認されている。

10c 号では、東西南北全ての壁で部分的ながら壁材が炭化材列として遺存しており（Fig.139、Fig.140、Fig.145）、そのうち奥壁以外では炭化材の下部に壁材を収めた周溝が検出された。前述のとおり奥壁の炭化材列の下部では周溝が一部しか検出されなかったが、その代わりに壁の内外から粘土と礫で壁を固定している様子が確認されている。壁の構造については、10a 号の項で述べたような、樹皮と板材を利用した壁の構造が観察された。

10c 号の内部で検出された床面及び貼床は、基本的に全て 10c 号の時期と判断した。そのように考えると、10c 号に伴う貼床は開口部側の壁際の 2 箇所と骨塚 c の北東部で検出された、合計 3 箇所の貼床 c（Fig.129、Fig.134）となろう。このうち壁際の 2 箇所は熱を受けて硬化していたが、奥壁側の方は遺存状態が悪く形状は不明瞭であった。また、これらの貼床の外周をめぐるように「コ」の字状の周溝が検出された。この周溝は 10c 号の北壁に接する位置まで延びているが、これは開口部側の貼床 c がその位置まで貼られていることと整合する。この周溝の存在から考えると、粘土の遺存状況は悪かったものの、10c 号竪穴にも貼床に相当する「コ」の字状の空間が設定されていたことは確実といえよう。なお、この「コ」の字状の周溝の内部からは炭化材は検出されなかった一方で、奥壁側では周溝内に骨塚 c の一部（動物骨等）が落ち込んでいる様子が確認された。すなわち、貼床 c の外周には「木枠」は存在していなかった可能性が高い。

10c 号の炉は、他の炉との位置関係や遺存状態からすると、Fig.129 の炉 c がこの住居に伴うものと考えられる（Fig.134、PL.44−1）。この炉 c の周囲には約 1m 四方の方形の石組みが遺存していた。

10c 号に伴う骨塚 c は住居の長軸上に位置し、東西 2m、南北 1.5m の範囲に拡がっていた（Fig.146、口絵 Front2−2）。骨塚の上面は住居内側から奥壁側に向かってわずかにせり上がっており、奥に向かって骨がうずたかく集積されていた。骨塚の上部、奥壁に近い位置からほぼ完形の北筒式トコロ 5 類土器（Fig.157−144）が出土している。出土状況からみて、この土器は偶然混入したのではなく意図的に骨塚の上に置かれていたものと考えられる。

骨塚 c 出土の動物遺存体はタヌキとヒグマを主体としており、他に陸獣、海獣、鳥類、魚類の遺体が確認された。頭骨については、タヌキの頭骨が完形に近い形で検出されたが、ヒグマなどその他の大型獣の頭骨は、完形の形では確認されなかった。動物遺存体の詳細な内容については第三章第九節を参照されたい。他に骨塚 c からは前述の北筒式土器のほか、オホーツク貼付文系を主体とする土器（Fig.156・

Fig.157)、石器（Fig.165)、金属器（Fig.169−2）が出土している。

ほかに 10c 号の床面で確認された遺物集中として、開口部東側の壁際近くで検出されたクジラ骨とみられる骨の集中（Fig.143）と、炉 c の南東部で検出された同じくクジラ骨とみられる骨と礫の集中（Fig.144、PL.43−2）がある。いずれも 10c 号に伴うものとみられる。後者の骨と礫の集中には、土器（Fig.153−77）と多数の石器（Fig.162−28・30・32・34・36・39・41・51・52、Fig.163−56）が伴っていた。さらにこれら以外の 10c 号床面出土遺物としては、土器（Fig.153 ～ Fig.155)、石器（Fig.162 ～ Fig.164)、骨角器（Fig.167−1･2）鉄器（Fig.169−3）がある。土器はオホーツク文化貼付文期が主となる。

（熊木俊朗）

3　遺物

3−1　土器

文様を有するオホーツク土器については第二章第五節に属性表を掲載したので、文様の詳細ならびに破片同士の接合関係についてはそちらを参照されたい。

① 10a 号床面出土（Fig.147・Fig.148）

1 ～ 12 はオホーツク土器。1 ～ 7・9・12 は貼付文系の文様を有する土器。8 は例外的な文様を有する土器で、指による押圧文が施されている。10・11 は底部破片。

1 ～ 5 は文様に 3 本以上を 1 単位とする貼付文を含む土器で、1 ～ 4 は同一個体である。6 は文様に 2 本 1 単位の貼付文を含む口縁部破片で、7 は文様が 1 本単独の貼付文で構成される口縁部破片である。8 は口縁部の肥厚帯上に指による押圧文が施された土器。9・12 は胴部破片で、9 は口縁部の肥厚帯上に太い貼付文を施し、その上にさらに 2 本 1 単位の貼付文を施している。12 は 4 本 1 単位とみられる貼付文が施されているようだが、剥落部分が多く詳細不明である。

13 ～ 17 は続縄文土器。13 ～ 16 は後北 C_2・D 式土器で、16 は注口土器の注口部である。17 の底部破片も器形から判断すると後北 C_2・D 式土器とみられるが、確言はできない。

18 は縄文土器。原体 RLR の地文が施された土器で、北筒式土器とみられる。

② 10a 号骨塚 a 出土（Fig.149）

19 はオホーツク貼付文系土器。文様に 3 本 1 単位の貼付文を含む完形土器で、胴部の下半が熱を受けて変形（一部は発泡）している。

20 ～ 21 は続縄文土器で、後北 C_2・D 式である。

22 は縄文土器。網走式土器で、胎土に繊維は含まれておらず、口縁部に隆帯が施されている以外は無文である。

③ 10b 号床面出土（Fig.150 ～ Fig.152）

23 ～ 54 はオホーツク土器。23 ～ 37・40 ～ 47 は貼付文系の文様を有する。38 は無文の土器である。48 ～ 54 は底部破片。

Fig. 147　10a 号竪穴床面出土の土器 1

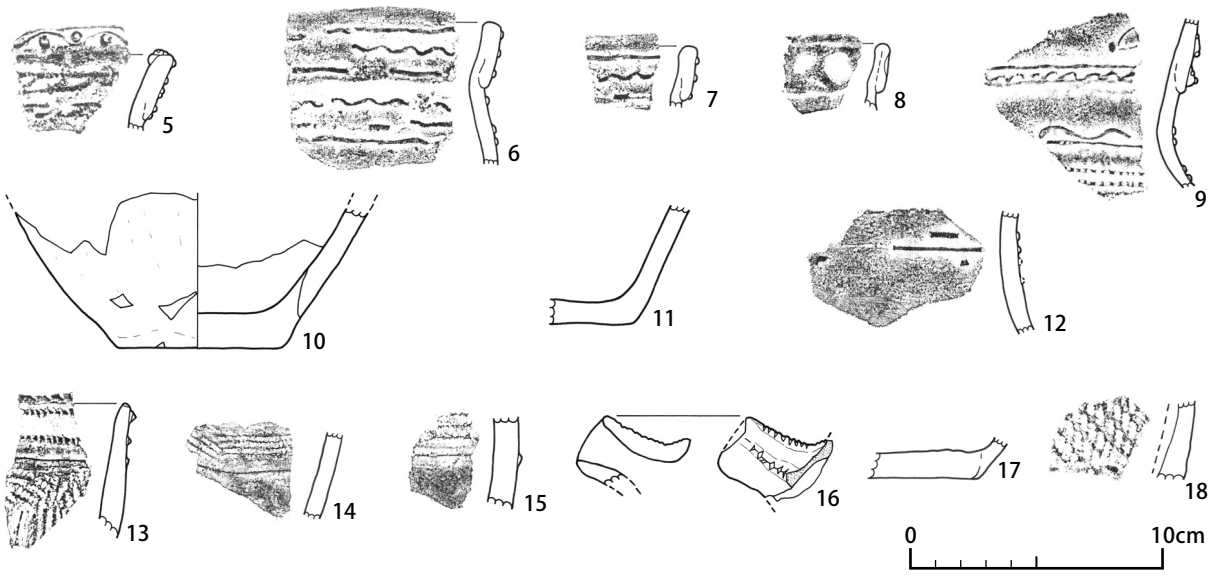


Fig. 148　10a 号竪穴床面出土の土器 2

23 ～ 26 は文様に 3 本以上を 1 単位とする貼付文、27 ～ 37・46 は 2 本 1 単位の貼付文を含む完形土器ないし口縁部破片。41 は文様が 1 本単独の貼付文で構成されている口縁部破片。38 は無文の土器である。胎土や焼成の特徴からオホーツク土器と判断したが器形がやや特異であり、他の型式の可能性もある。39・40・42 ～ 45・47 は胴部を含む破片で、39・40・42 は文様に 3 本以上を 1 単位とする貼付文、43・45・47 は 2 本 1 単位の貼付文を含み、44 は文様が 1 本単独の貼付文で構成されている。49 の底部破片は攪乱層出土の破片を含んでいる。

55 ～ 59 は続縄文土器。55・56 は後北 C_2・D 式土器。57 は IO の突瘤文と、突瘤文間及び口唇上に原体 RL の縄端による刺突が施されており、元町 2 式土器とみられる。58・59 は地文に原体 RL の縄文が施された胴部破片で、縄文晩期末～続縄文前半期とみられる。

60 ～ 63 は縄文土器。60 は胎土に繊維をわずかに含み、地文に原体 LR の斜行縄文が施された土器で、北筒式土器とみられる。61･62 は胎土に繊維を含まない厚手の土器である。61 には隆帯が付されており、62 は無文である。どちらも網走式土器であろう。63 は胎土に繊維を含まないやや厚手の土器で、無文である。網走式土器の可能性もあるがそれほど厚手でもないため、型式不明としておく。

④ 10c 号床面出土（Fig.153 ～ Fig.155）

64 ～ 98 はオホーツク土器。64 ～ 92 は全て貼付文系の文様を有する。93 ～ 98 は底部破片。

64 ～ 68 は文様に 3 本以上を 1 単位とする貼付文を含む口縁部破片である。66 には口縁部に吊耳のような粘土帯ないし文様を付加した痕跡があるが、剥落しており詳細は不明である。69 ～ 80 は文様に 2 本 1 単位の貼付文を含む完形土器ないし口縁部破片。74 と 75 は同一個体とみられる。81 ～ 85 は文様

Fig. 149　10a 号竪穴骨塚 a 出土の土器

が 1 本単独の貼付文で構成されている完形土器ないし口縁部破片。84 の肥厚帯下縁に施された文様であるが、これは刺突文なのか粒状等の貼付文が剥落した痕跡なのか、判別がつかなかった。86 ～ 92 は胴部破片で、88 と 89 は同一個体とみられる。86・87 は文様に 3 本以上を 1 単位とする貼付文、88 ～ 90 は 2 本 1 単位の貼付文を含み、91・92 は文様が 1 本単独の貼付文で構成されている。

99・100 は擦文土器。99 は口縁部破片である。口唇面は断面が凹んでおり、4 ヶ 1 単位の刻み目が施されている。口縁部には沈線が浅く施され、内外面ともにハケ目が認められる。100 は胴部とみられる破片で、内外面ともにハケ目が認められる。

101 ～ 105 は続縄文土器。101 ～ 103 は後北 C_2・D 式土器。104 は原体 R の撚糸文を地文とし、IO 突瘤文が施された土器で、元町 2 式とみられる。105 は口唇に縄端の刺突、口縁部にも刺突文のような文様が確認できるが細片のため詳細は不明である。縄文晩期～続縄文初頭の土器であろうか。

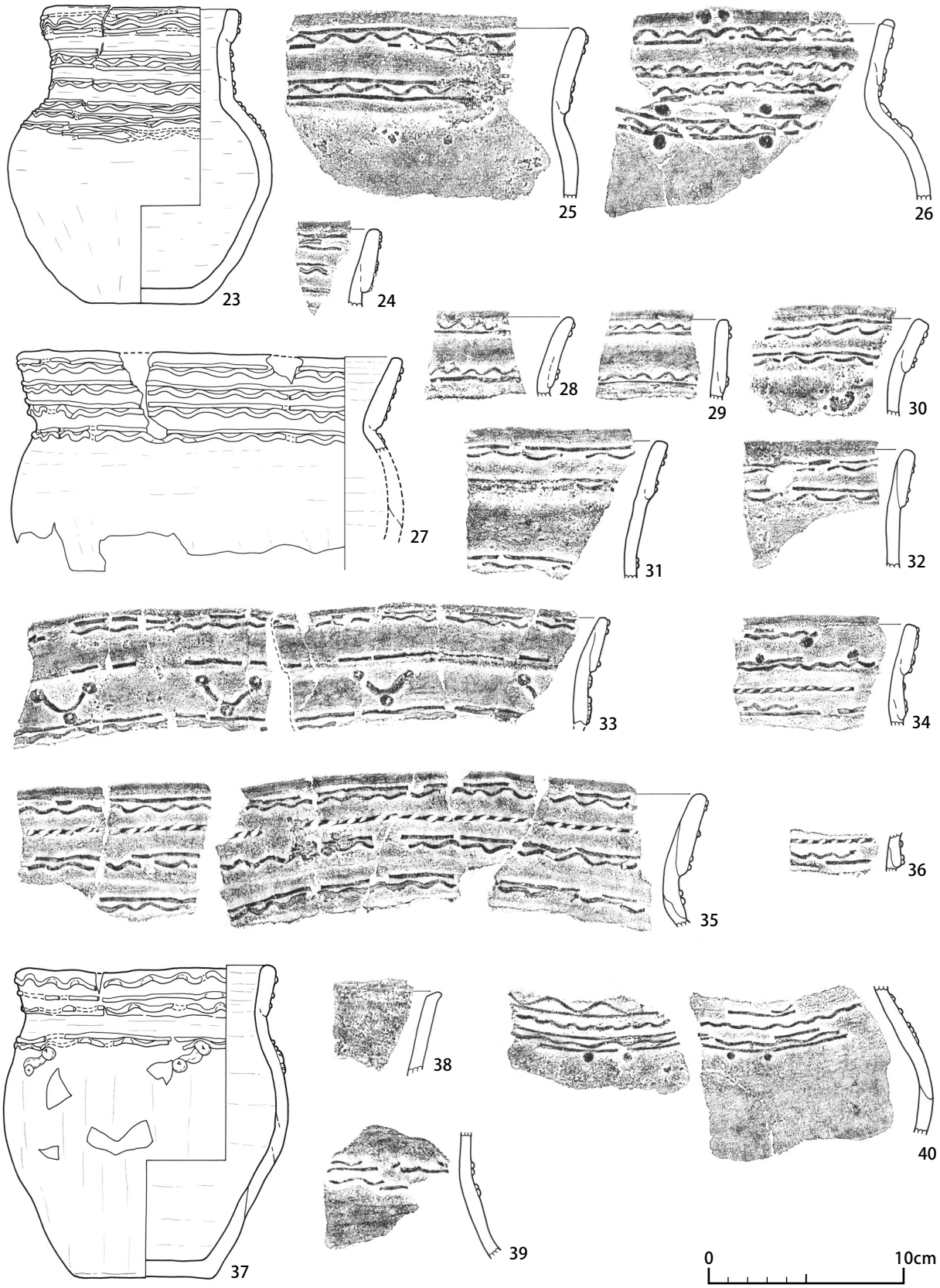


Fig. 150　10b 号竪穴床面出土の土器 1

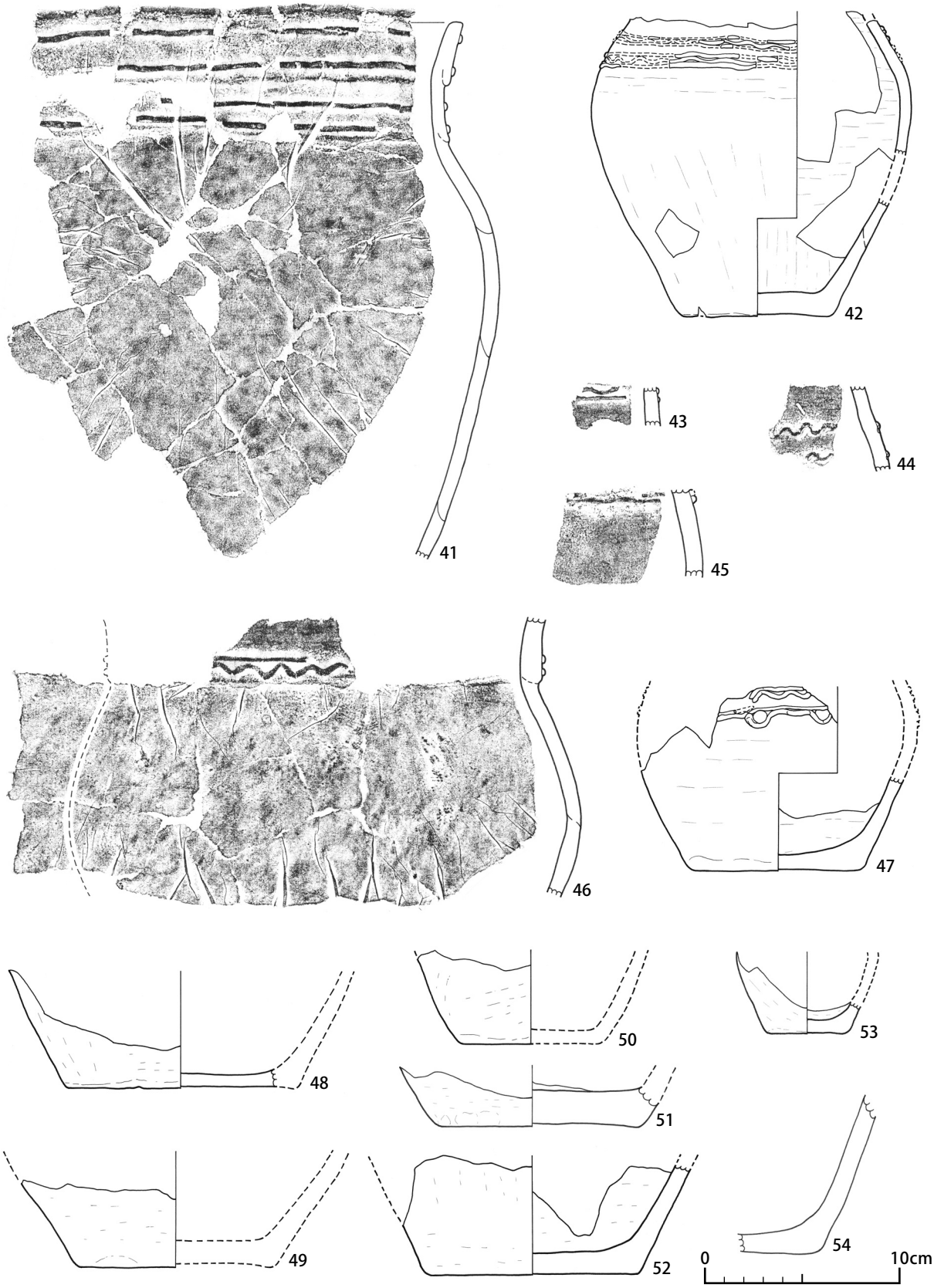


Fig. 151　10b 号竪穴床面出土の土器 2

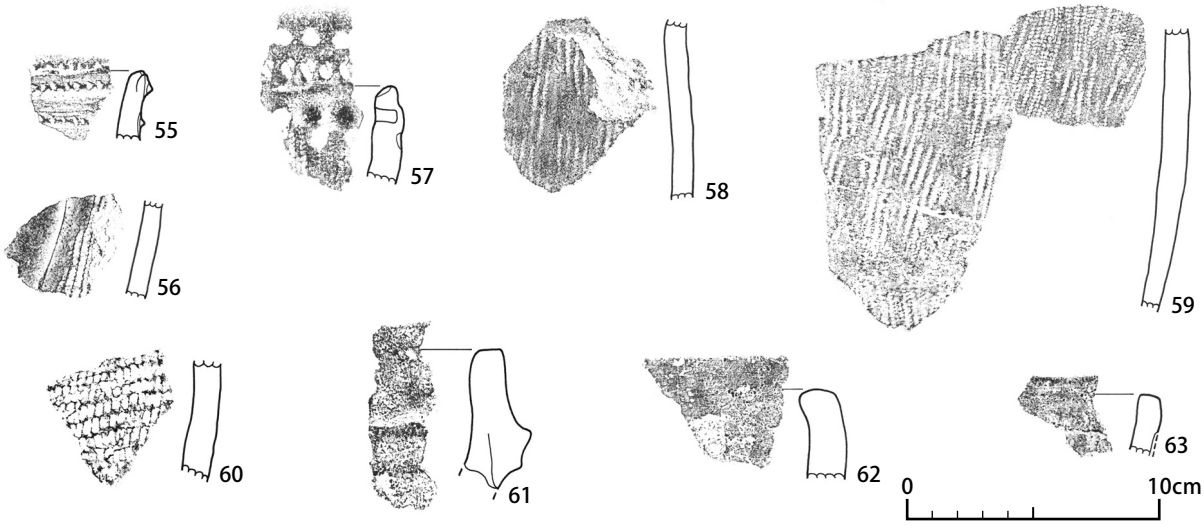


Fig. 152　10b 号竪穴床面出土の土器 3

106 ～ 110 は縄文土器。106 は鮎澗式土器。107 ～ 109 は北筒式土器で、いずれも胎土に繊維を含む。107 は山形突起と押引文、OI 刺突文が施されたトコロ 6 類土器。108 も押し引き文を有する。110 は厚手の底部破片で、胎土にはわずかに繊維が含まれる。確認できた範囲では無文であり、網走式土器である可能性が高い。

⑤ **10c 号骨塚 c 出土**（Fig.156・Fig.157）

111 ～ 141 はオホーツク土器。111 ～ 130、132 ～ 138 は貼付文系の文様を有する。131 は無文の土器。139 ～ 141 は底部破片である。

111・112・114 は文様に 3 本以上を 1 単位とする貼付文を含む完形土器ないし口縁部破片である。113・115 ～ 125 は文様に 2 本 1 単位の貼付文を含む完形土器ないし口縁部破片。113 は胴部下半に熱を受けた痕跡が認められる。116 と 117 は同一個体とみられる。126 ～ 130 は文様が 1 本単独の貼付文で構成されている完形土器ないし口縁部破片。131 は無文の口縁部破片。132 ～ 138 は胴部破片で、全て文様に 2 本 1 単位の貼付文を含む。139 の底部破片には 10c 号床面出土の破片が含まれている。

142 ～ 143 は続縄文土器。142 は地文に原体 LR の縄文が施された胴部破片で、縄文晩期～続縄文前半期の土器とみられる。143 はわずかに上底となる器形で、縄文が施されているようだが文様の詳細は不明である。器形から判断すると縄文晩期末～続縄文前半期の土器とみられる。

144 は縄文土器。胎土に繊維をわずかに含み、口縁部には肥厚帯を有する。肥厚帯上には縦の隆帯が 6 本付されている。地文は原体 LR の縄文で、肥厚帯上には縦の沈線、口縁部には OI の円形刺突文を有する。北筒式トコロ 5 類土器であろう。

（熊木俊朗）

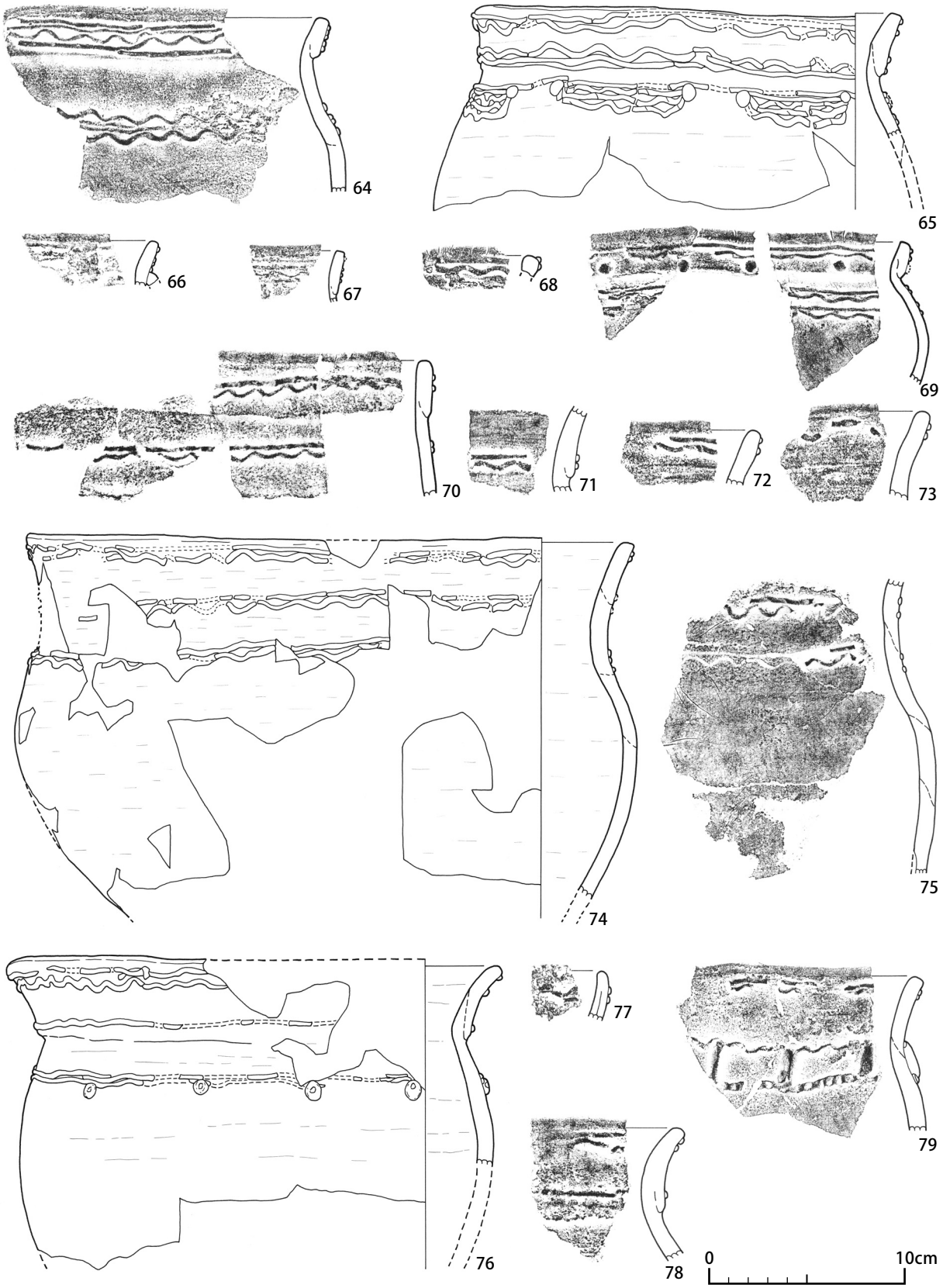


Fig. 153　10c 号竪穴床面出土の土器 1

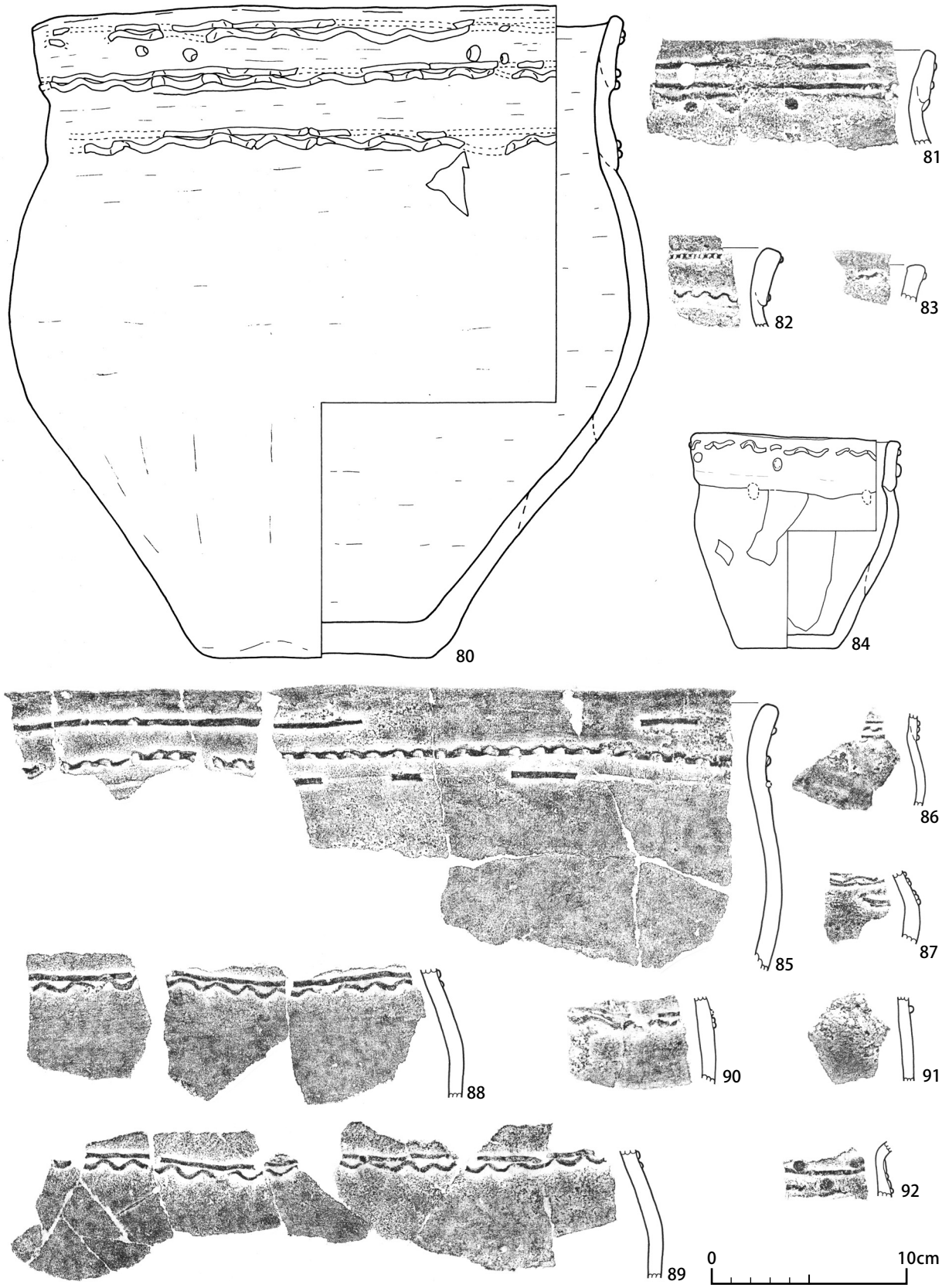


Fig. 154　10c 号竪穴床面出土の土器 2

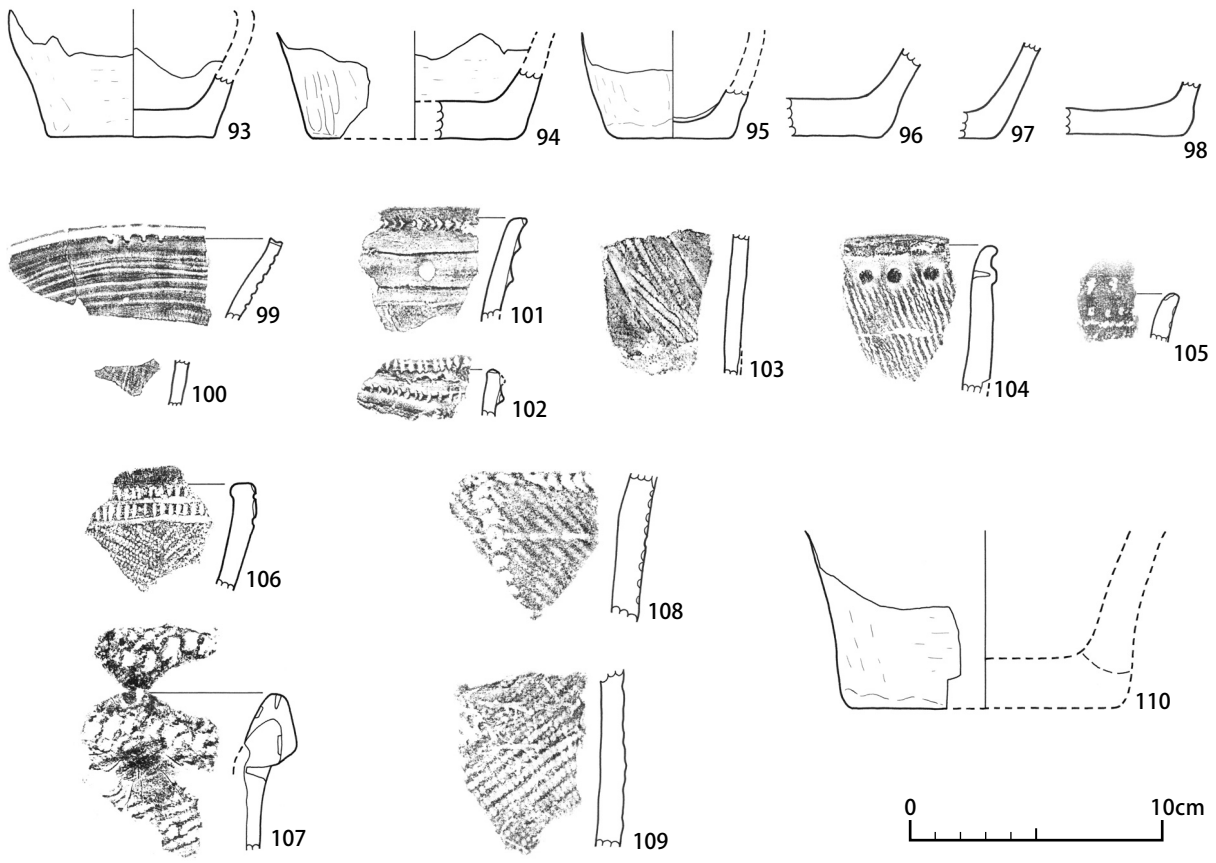


Fig. 155　10c 号竪穴床面出土の土器 3

3−2　石器

① 10a 号床面出土（Fig.158）

出土位置を記録した遺物（点取り遺物）は、石鏃 4 点、両面加工尖頭器 3 点、石製ナイフ・スクレイパー 4 点、石錐 2 点、石核 2 点、石斧 2 点、石錘 1 点、刻み付礫 1 点、剥片 11 点の計 30 点である。

石鏃（Fig.158−1 ～ 3）

いずれも黒曜石製であるが、2 はいわゆる梨肌の石質であり、3 は暗紫色の部分を含む。

1 は胴部が内反する形態、2 は胴部と尖頭部が段差をもって五角形状をなす形態の有茎石鏃である。3 も有茎石鏃の未成品であろう。

石製ナイフ・スクレイパー（Fig.158−4・5）

4 はチャート、5 は黒曜石を用いている。4 は二次加工によって両側縁に 40° ～ 60° の刃角を作り出しており、明瞭なつまみ部は形成されていないものの石匙に近い形態である。5 は二次加工を施された 3 面によって構成される角錐状の石器であるが、稜線の形状が整わず、厚形の削器と思われる。

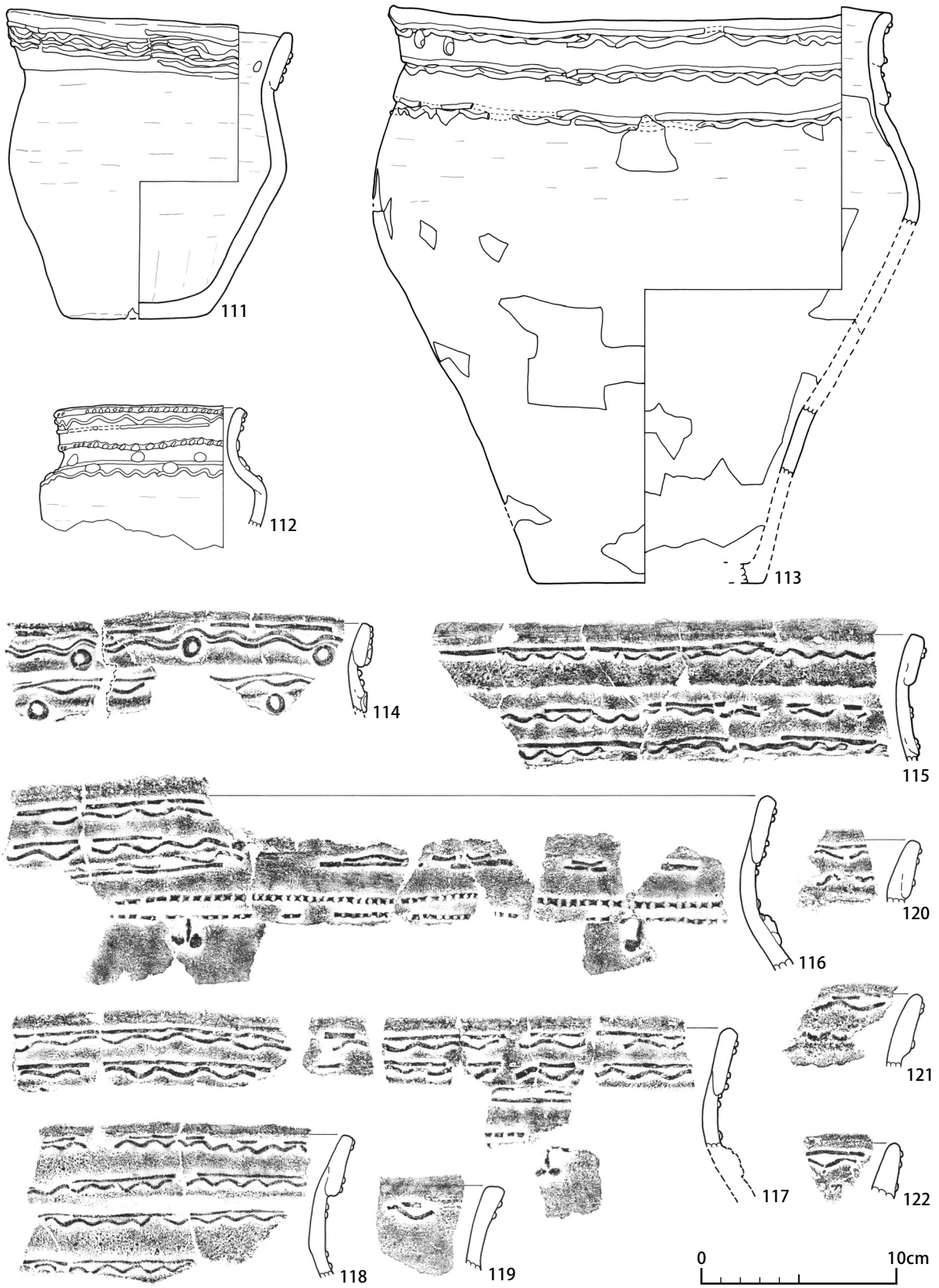


Fig. 156　10c 号竪穴骨塚 c 出土の土器 1

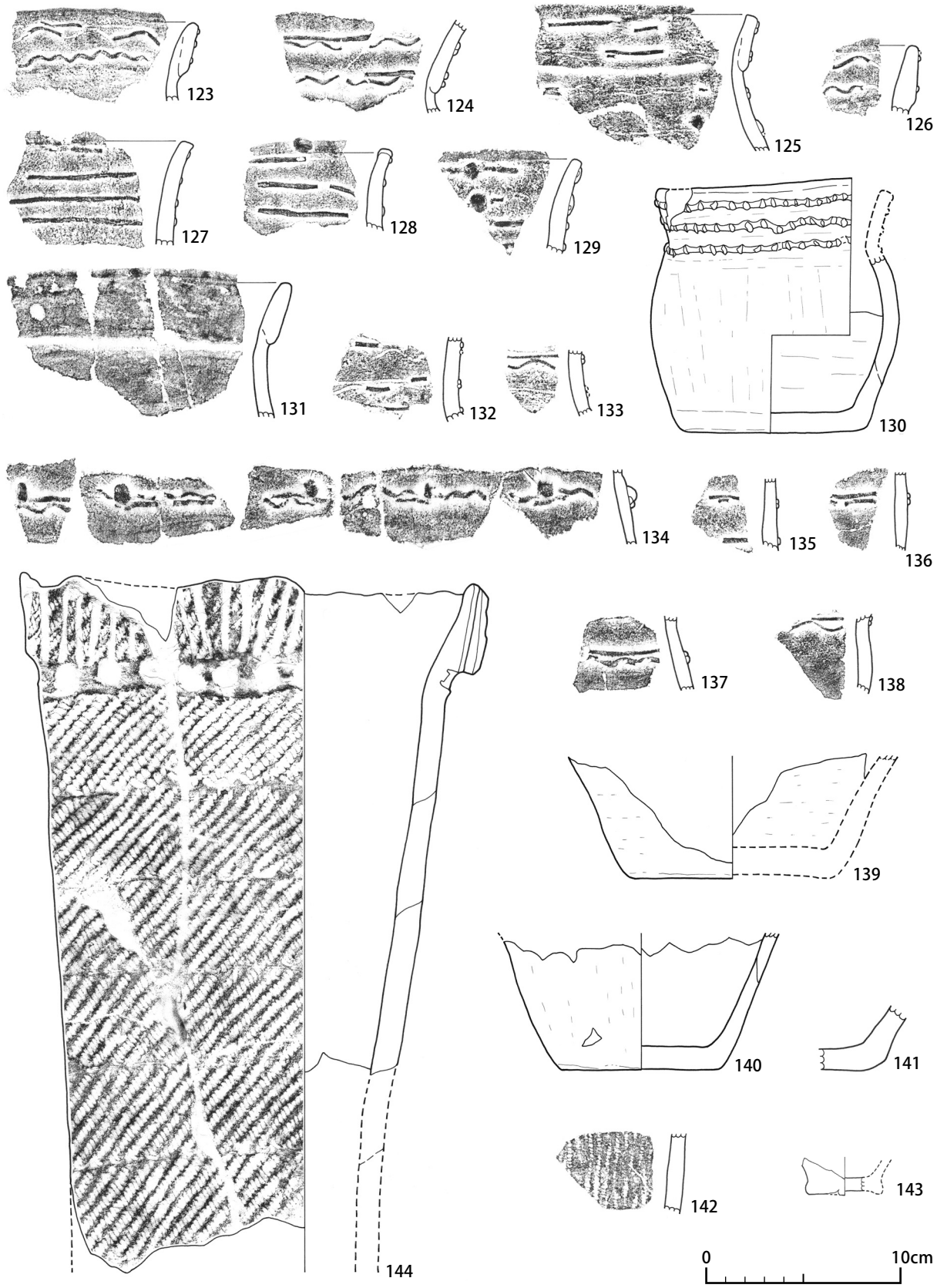


Fig. 157　10c 号竪穴骨塚 c 出土の土器 2

石錐（Fig.158−6・7）

6・7 は、黒曜石製で両側縁への二次加工によって一端に錐部を作り出した石錐である。

6 の錐部付近は両面加工となっており、横断面が菱形をなす。素材腹面には縦方向の擦痕が顕著である。7 は背面・打面・側面が岩屑面で被われた厚身（12mm）の剥片を素材とするが、薄い縁辺を錐部として利用している。

石斧（Fig.158−8・9）

8 は側面の稜線が不明瞭で横断面が楕円形を呈する安山岩製の石斧である。全面的に研磨されているが、部分的に成形時の剥離痕が残り、側面や基端部には敲打痕が観察される。両刃の刃部を半分欠損している。9 は安山岩製で、楕円形の横断面と両刃の刃部を持つ大形の石斧だったと思われる。刃部と基端を大きく破損しているが、その縁辺に細かな剥離や潰れが入るので、破損後も利用されたのかもしれない。

石錘（Fig.158−10）

10 は多孔質安山岩を素材とし、剥離によって扁平な円礫の長軸端部に対向する抉りを作り出した石錘である。抉りの稜線には磨滅がみられる。

刻み付礫（Fig.158−11）

11 はやや扁平な円礫で、泥岩と思われる。表面に無数の刻み様の痕跡が観察され、最も顕著なものは深さ 1mm ～ 2mm の刻みが礫の中央部に連なって十字形を呈する。同様の刻み付礫は、後述するように 10 号竪穴内に幾つか確認されている。個々の「刻み」には爪形に近い形状のものが多く、それがどのように形成されたのかは不明確であるが、おそらく人為的・意図的なものであろう。

② 10a 号骨塚 a 出土（Fig.159）

点取り遺物は、刻み付礫 1 点、剥片 6 点の計 7 点である。この他に石鏃 1 点がフローテーションによって検出されている。

石鏃（Fig.159−12）

12 は黒曜石製で中形（長さ 3.6cm）の有茎石鏃である。右側縁の胴部末端（かえし）が若干突出する。

刻み付礫（Fig.159−13）

13 はやや厚みのある安山岩の亜円礫である。表面に多くの刻み様の痕跡が観察され、最も顕著なものは深さ 1mm ～ 5mm の刻みが連なって H 字形を呈する。

③ 10b 号床面出土（Fig.160・Fig.161）

点取り遺物として、石鏃 5 点、両面加工尖頭器 1 点、石製ナイフ・スクレイパー 6 点、石核 2 点、石斧 2 点、垂飾 1 点、石錘 1 点、敲石 2 点、磨石 1 点、台石 1 点、凹石 1 点、砥石 1 点、剥片 12 点の計 36 点が出土している。

石鏃（Fig.160−14 ～ 16）

全て黒曜石製であるが、14 は梨肌の石質であり、15 は暗赤褐色が網状に入る。いずれも有茎の形態で、14 は胴部と尖頭部が段差をもって五角形状をなす。16 は尖端方向からの衝撃によって破損している。

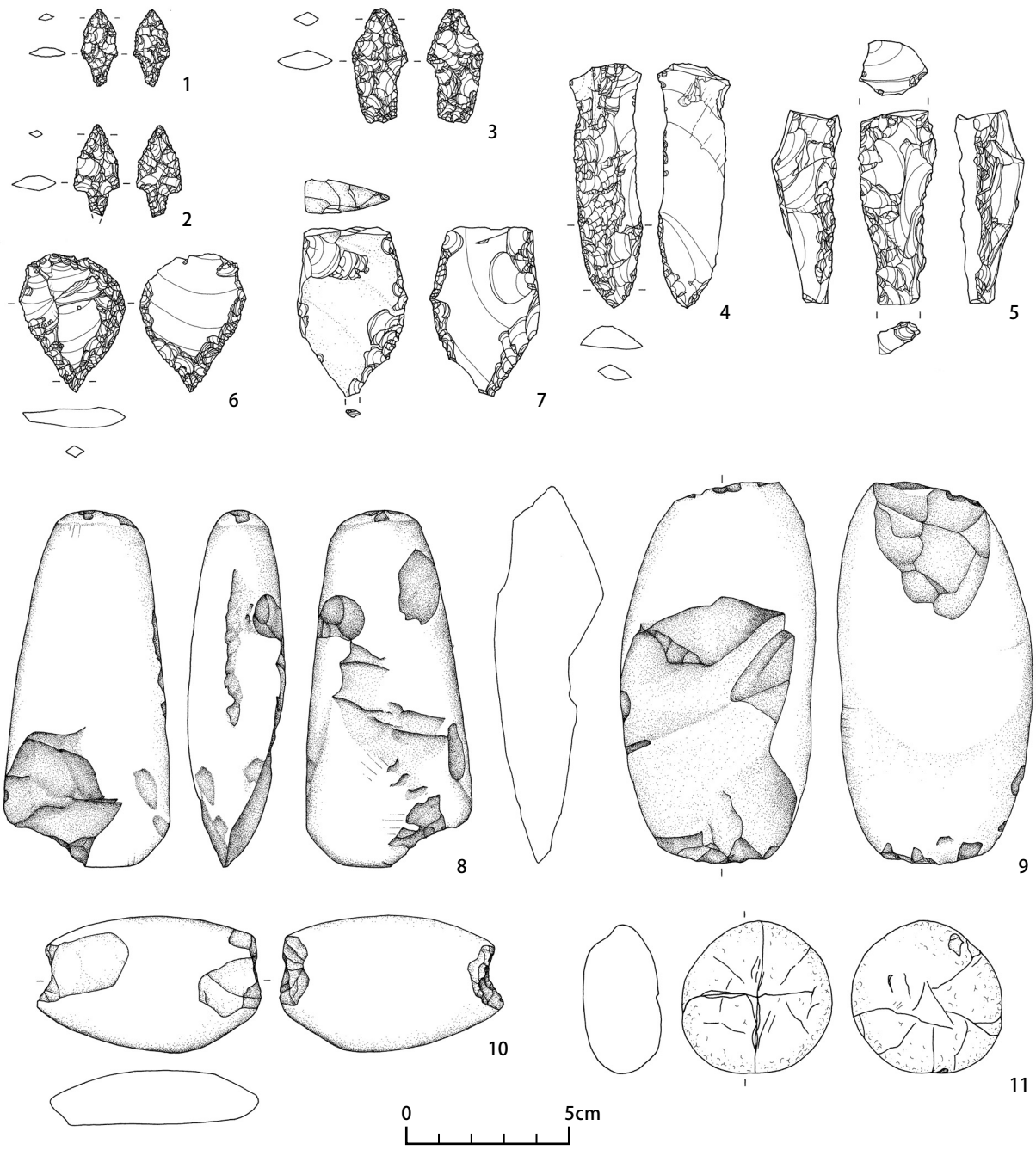


Fig. 158　10a 号竪穴床面出土の石器

両面加工尖頭器（Fig.160−17）

17 は暗赤褐色の部分を含む黒曜石製である。長さ 10.0cm、幅 4.0cm、厚さ 12mm の大形の完形品で基部両側縁に抉りが入る。裏面に素材剥片の腹面が残るが、横断面形は概ね対称的なレンズ状をなす。

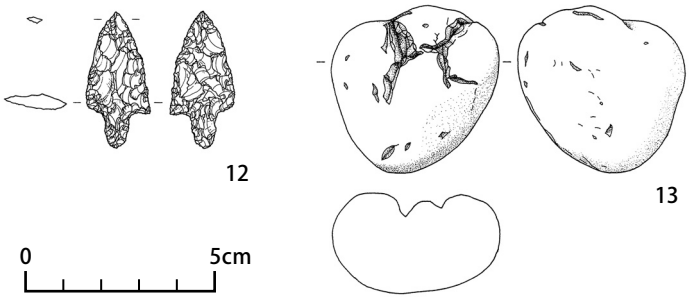


Fig. 159　10a 号竪穴骨塚 a 出土の石器

石製ナイフ・スクレイパー（Fig.160−18・19）

いずれも黒曜石製である。18 は、剥片の背面周縁への二次加工によってつまみ部と 50° ～ 60° 程度の刃角の刃部を作り出した石匙である。19 は端部に 60° を超えるような急角度の弧状の刃部を持つ掻器で、背面のキズや磨耗が著しく、腹面に粗粒の褐色付着物が観察される。

石核（Fig.160−20）

20 は黒曜石の円礫を用いている。主に裏面の円礫面を打点とするバルブの不明瞭な 1 剥離面（分割面）からなり、石核が分割されたものと考えられる。

石斧（Fig.160−21）

21 は長さ 4.5cm 程度の鑿様の小形石斧で、刃部形状は片刃に近い。全面的によく研磨され、明瞭な側面を持つ。緑色岩製である。

石製品（Fig.160−22）

22 は頁岩製の垂飾である。両面に不明瞭ながらも若干の擦痕が観察される。孔は正面で大きく裏面で小さいので、正面側から一方的に穿孔されたと考えられる。

石錘（Fig.160−23）

23 は多孔質安山岩製の有孔石錘で、長さ 22.8cm、幅 14.9cm、厚さ 9.0cm、重さ 3.26kg を測る。正面側にやや湾曲する縦断面形状であり、正面中央には縦方向の弱い稜線が走る。全体的に研磨によると思われる比較的滑らかな表面を呈するが、周縁、特に上下端部で敲打痕が目立つ。

礫塊石器（Fig.161−24 ～ 27）

24・25 は敲石である。24 は多孔質安山岩の円礫を用い、周縁部（特に上下両端）に敲打痕が著しい。全面的に磨耗し正面には多くのヒビが入る。25 は細粒砂岩の円礫を用い、細かな敲打痕や剥落痕が全面にみられる。また、部分的に煤やサビ様の付着がある。

26 は多孔質安山岩による扁平な磨石で、正面はやや丸みを帯び、裏面は平坦である。滑らかな表面を持つが、被熱による変色や煤の付着が著しい。

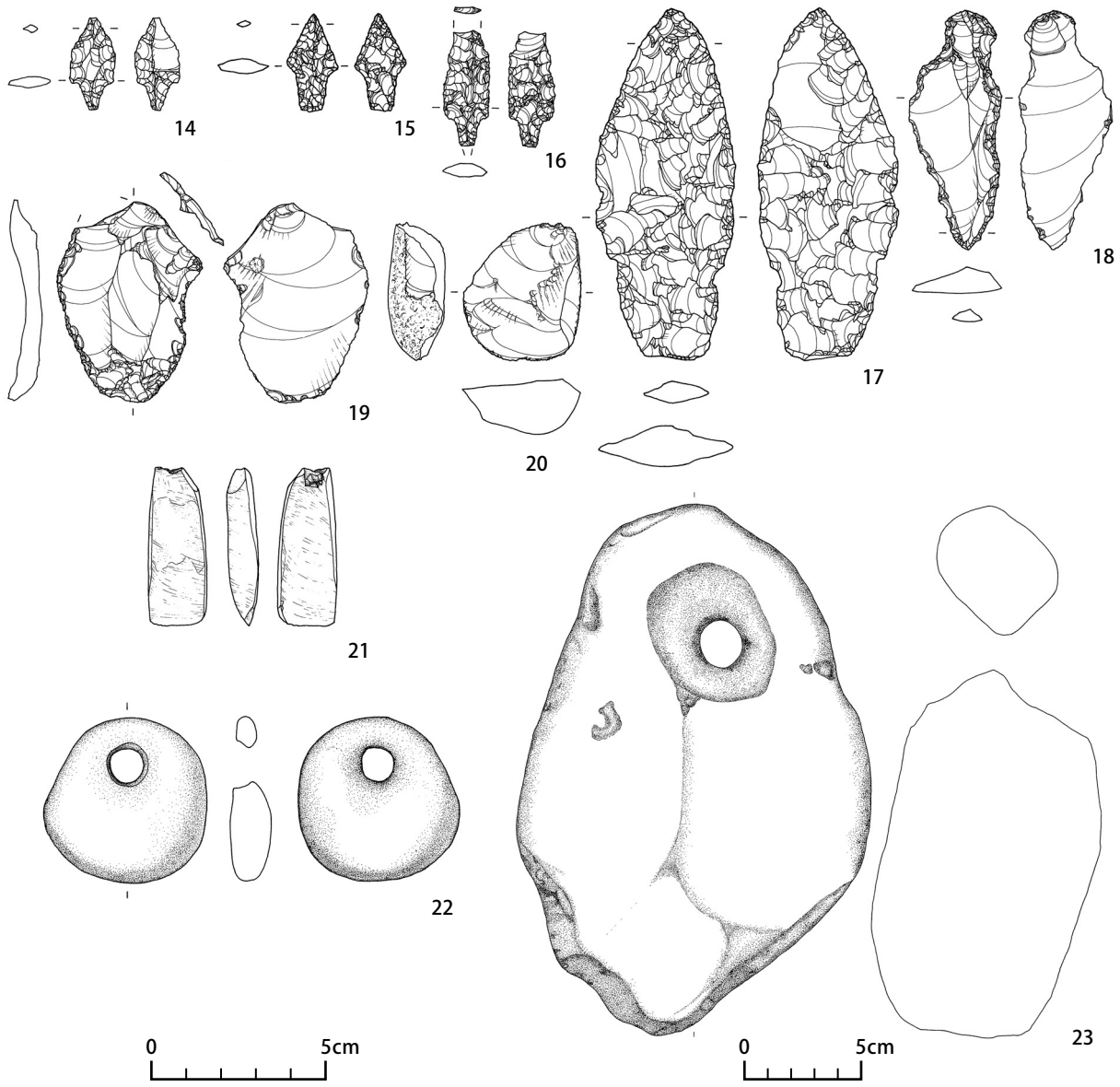


Fig. 160　10b 号竪穴床面出土の石器 1

27 は砂岩製の台石である。上下と左の側面、裏面を欠損しているが、本来は厚さ 30mm 程度で方形を呈するものであったと思われる。正面が作業面と考えられ、一部に滑らかな磨面を残しつつ、敲打痕や剥落痕に被われている。

④ 10c 号床面出土（Fig.162 ～ Fig.164）

点取り遺物として、石鏃 23 点、両面加工尖頭器 5 点、石製ナイフ・スクレイパー 8 点、石核 3 点、石斧 5 点、刻み付礫 1 点、石球 2 点、砥石 1 点、凹石 1 点、剥片 41 点の計 90 点が出土している。両面

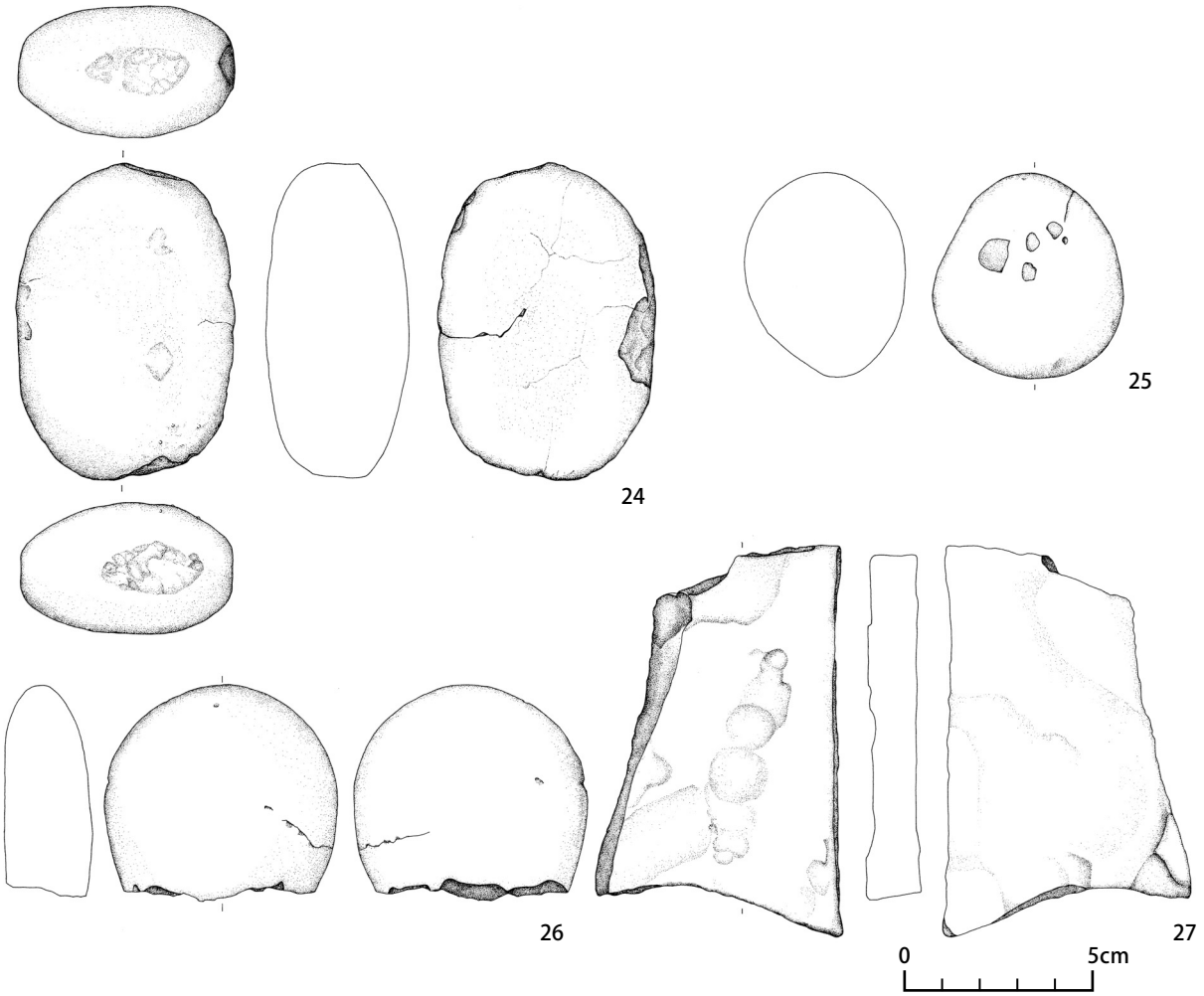


Fig. 161　10b 号竪穴床面出土の石器 2

加工尖頭器はいずれも破片や未成品の類である。

石鏃（Fig.162−28 ～ 47）

頁岩（被熱により表面が変質・剥落）の 37 以外は黒曜石製であるが、45 は被熱による表面変化が著しい。また、28・33・35・36・44・47 は梨肌の石質であり、45 は暗赤褐色の部分を含む黒曜石である。

有茎の形態を基本とし、平行する胴部や段差のある胴部が尖頭部と五角形状をなすもの（36・37・42)、胴部が内反したり凹凸をなすもの（39 ～ 41)、胴部末端（かえし）が突出するもの（34・35)、もしくはこれらに近い形状のものが組み合わさる。全体としては長さ 2cm ～ 5cm、厚さ 3mm ～ 5mm のサイズからなるが、2cm ～ 2.5cm 程度の小形のもの（28 ～ 31）には身部が三角形状となる傾向がある。47 も有茎石鏃の未成品であろう。

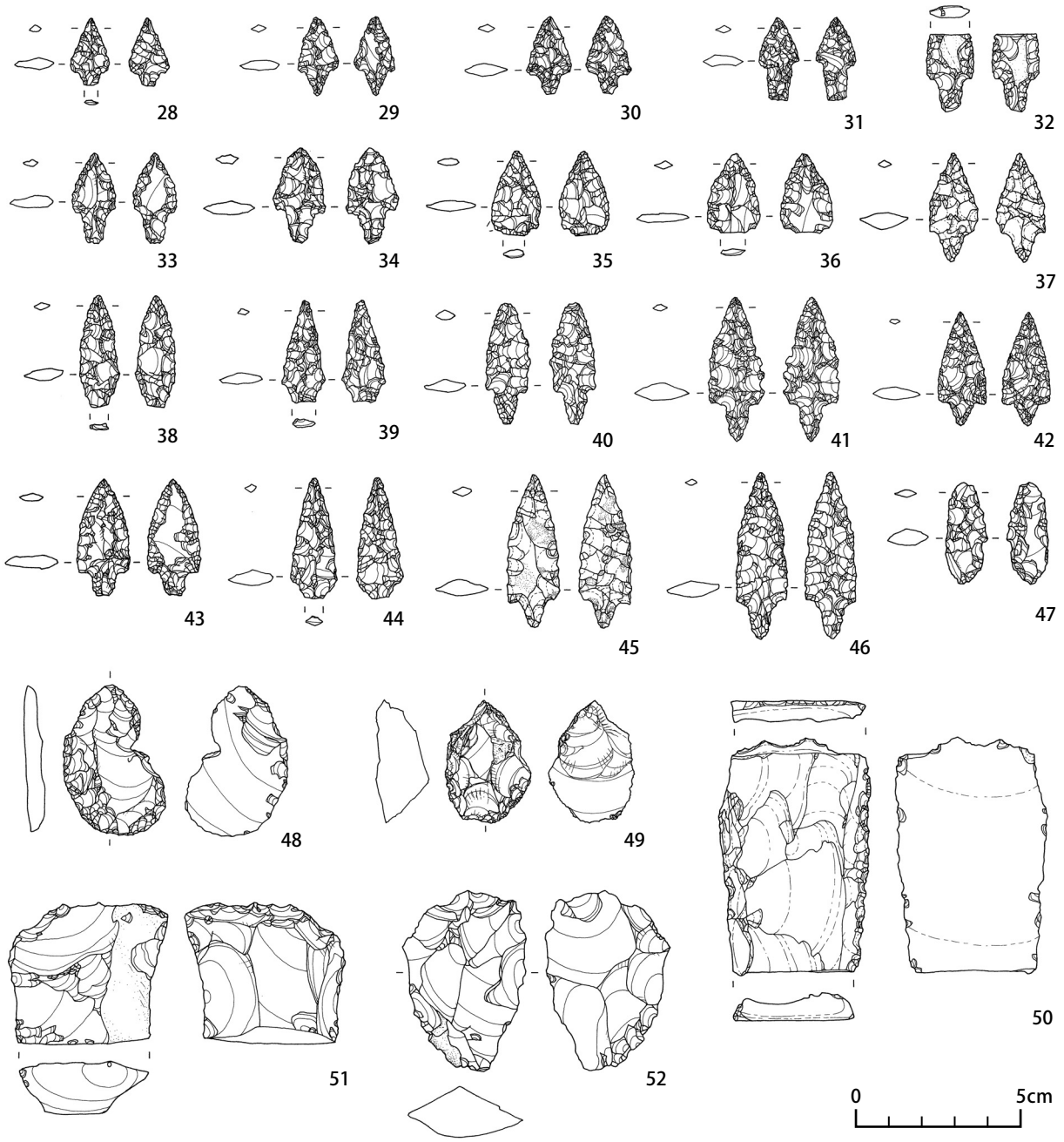


Fig. 162　10c 号竪穴床面出土の石器 1

スクレイパー（Fig.162−48 ～ 50）

いずれも黒曜石製であるが、50 は被熱による表面変化が著しい。

48・49 は、端部もしくは全周に比較的急角度（60° 前後）の弧状の刃部を持つ掻器であり、基本的に剥片の背面周縁に二次加工が施されている。48 の腹面には 19 と同様の褐色付着物が観察される。49 は

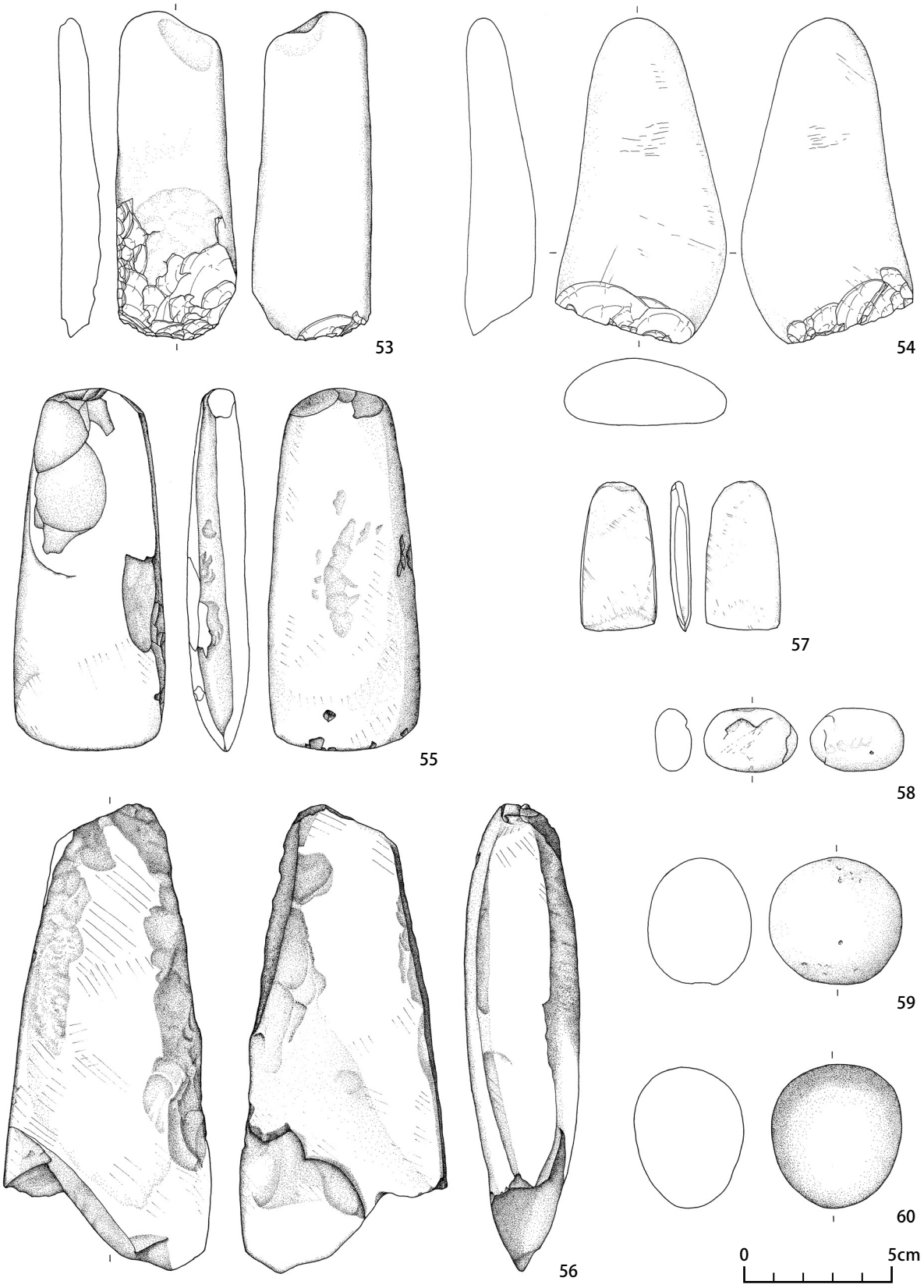


Fig. 163　10c 号竪穴床面出土の石器 2

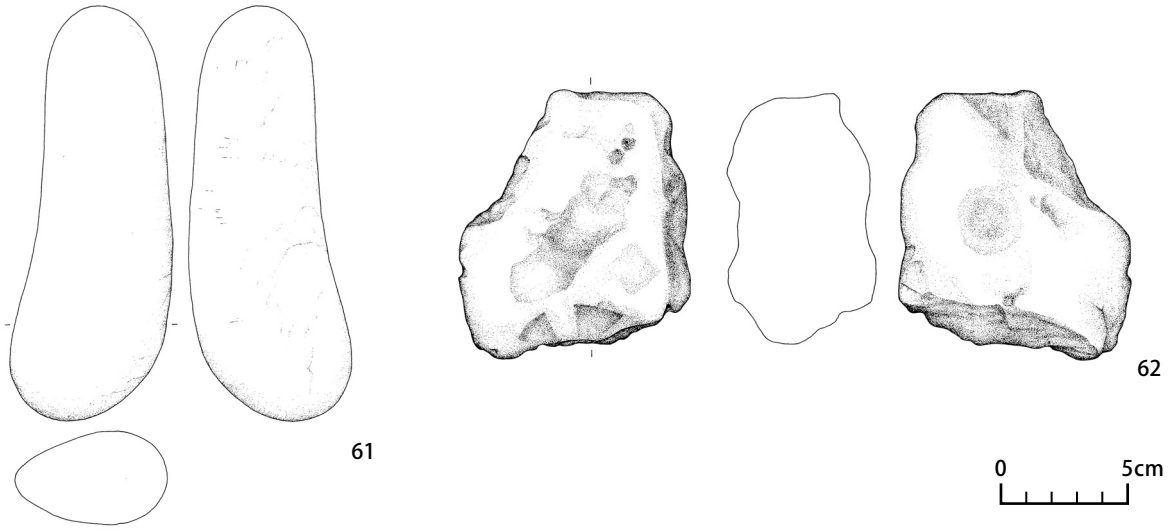


Fig. 164　10c 号竪穴床面出土の石器 3

背面に岩屑面を持つ厚身（16mm）の剥片を素材とし、腹面に顕著なキズが残る。50 は稜付石刃様の大形の素材を用い、主に右側縁への連続的な二次加工によって 50° ～ 60° の縁辺を形成した削器である。

石核（Fig.162−51 ～ 52）

いずれも黒曜石製であり、51 には角礫面、52 には円礫面が残る。52 は梨肌の石質である。51 は大形の剥片を素材とし、主に腹面側で長さ 2cm 以下の横長剥片を剥離している。背面側にも剥離痕が残るが、剥離された剥片は薄く基本的には石器素材とならなかっただろう。52 は厚身の剥片を素材とし、その上部では背面側で、下部では腹面側で長さ 3.5cm 以下の幅広・横長剥片を求心的に剥離している。

石斧（Fig.163−53 ～ 57）

53 は凝灰岩、54 は安山岩を用い、礫の形状をよく活かして製作された礫石斧である。ともに片刃の打製刃部を持ち、礫器様の形態をなす。基部には研磨の痕跡が残り、鉄サビ様の付着物がみられる。55 は凝灰岩製の石斧で、全面的に研磨されているが成形時の剥離痕・敲打痕が所々に残る。側面の稜線は不明瞭で、均整のとれた両刃の刃部を持つ。56 は緑色岩製で、刃部を大きく欠くものの長さ 15.3cm、幅 7.1cm、厚さ 39mm を測る大形の石斧である。全面に研磨がおよび側面が形成された定角形の石斧であるが、稜線付近に剥離痕や敲打痕が目立つ。57 は青色岩製で、小形薄身（長さ 5cm、厚さ 6.5mm）の鑿様の石斧である。全面的によく研磨され明瞭な側面を持つ。

刻み付礫（Fig.163−58）

58 は扁平な円礫で、泥岩と思われる。表面に無数の細かな刻み様の痕跡が観察され、最も顕著なものは深さ 1mm 程度の刻みが連なって N 字形を呈する。

石球（Fig.163−59・60）

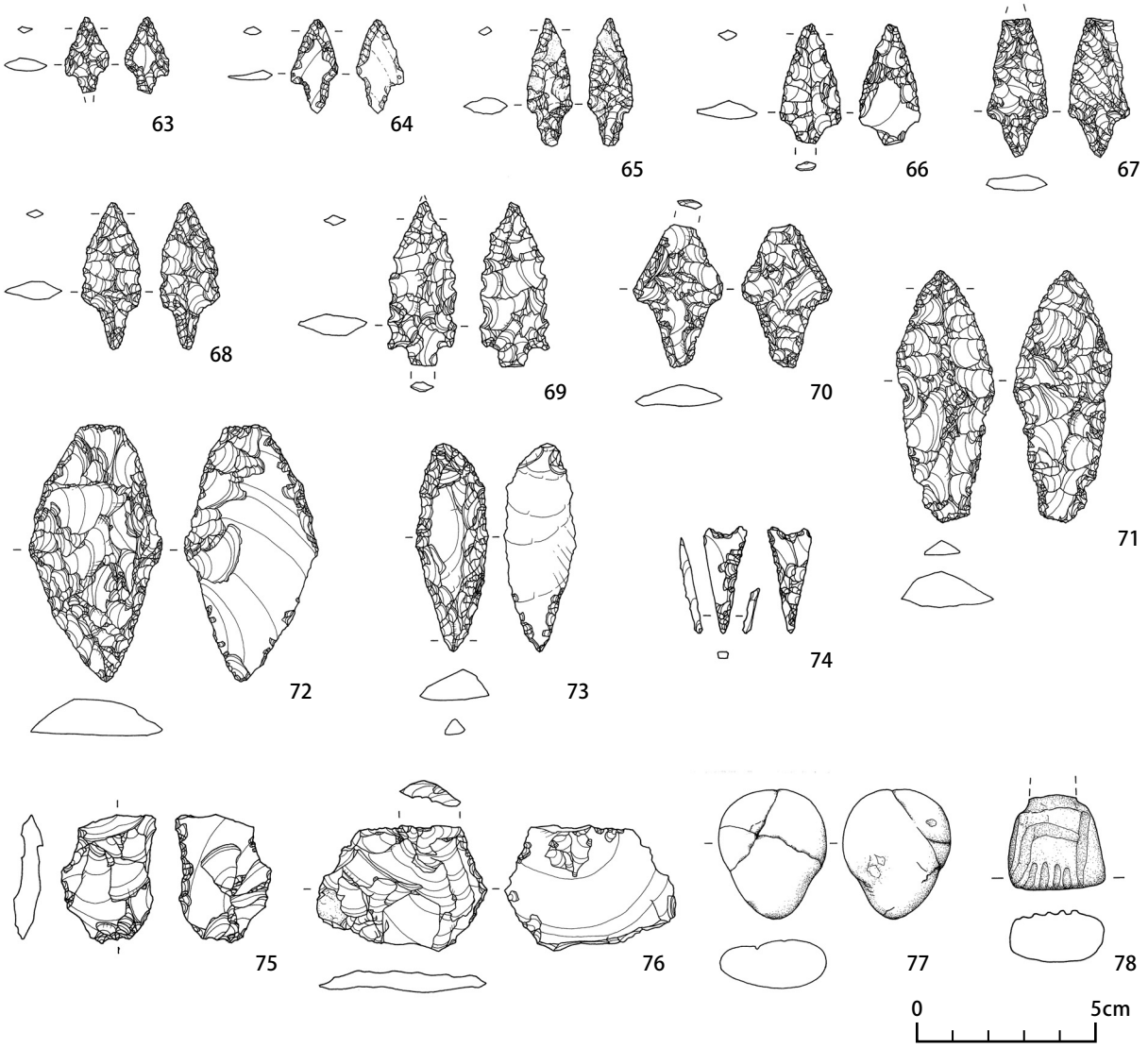


Fig. 165　10c 号竪穴骨塚 c 出土の石器

59 は安山岩製、60 は砂岩製であり、前者は比較的細粒の石質である。径 3.5cm ～ 4.7cm の同様のサイズであるが、59 が均整のとれた球状であるのに対し 60 はややいびつな形状である。

礫塊石器（Fig.164−61・62）

61 は細長い細粒砂岩の円礫を素材とする砥石と思われる。正面がやや内反しており、主にこの面に細かなサビ様の付着物がみられる。62 は破損により全体形状が不明であるが、正面･裏面に凹みがあり、凹石であろう。砂岩が用いられている。

⑤ 10c 号骨塚 c 出土（Fig.165）

点取り遺物は、石鏃 11 点、両面加工尖頭器 3 点、石製ナイフ・スクレイパー 3 点、石錐 2 点、楔形

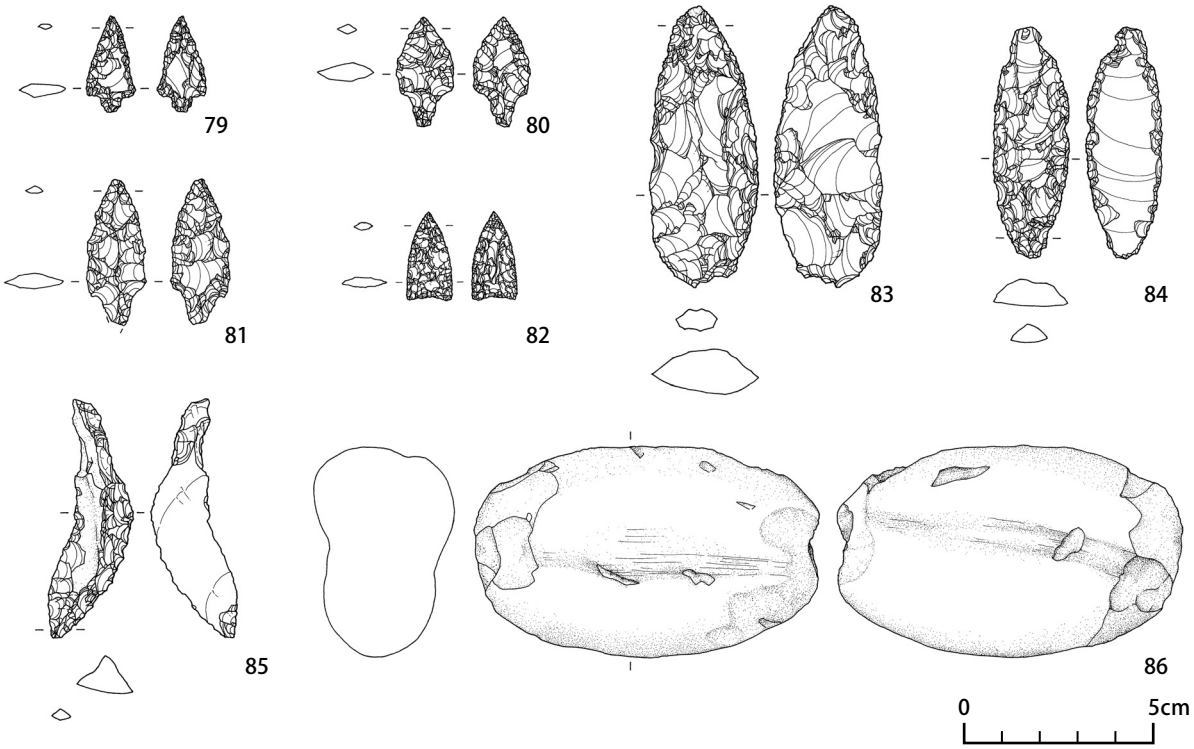


Fig. 166　10 号竪穴埋土出土の石器

石器 1 点、刻み付礫 1 点、礫 1 点、剥片 2 点の計 24 点である。この他にフローテーションによって検出された石鏃 2 点、石製ナイフ・スクレイパー 3 点、ヒレ状石製品 1 点、擦痕付礫 1 点を加えると合計 31 点となる。

石鏃（Fig.165−63 ～ 70）

全て黒曜石製であるが、64 ～ 66 は被熱による表面変化や変形が著しい。また、63・68・69　は梨肌の黒曜石である。

いずれも有茎の石鏃で、段差のある胴部と尖頭部が五角形状をなすもの（63）や胴部が内反したり凹凸をなすもの（68・69）が含まれる。67 は尖端方向からの衝撃によって左側縁に沿って樋状の剥離が生じている。70 は幅広三角形の身部と太い茎部を持ち、いわゆる石銛の形態に近い。

両面加工尖頭器（Fig.165−71）

71 は、基部が区分される形態を持った黒曜石製の石銛である。基部（特に裏面）の稜線付近に顕著なキズが観察される。

スクレイパー（Fig.165−72・73）

72 は黒曜石製、73 は頁岩製である。ともに両側縁にやや急角度（60° 前後）の刃部を作り出した収斂形の削器で、腹面縁辺にも若干の剥離痕が入る。72 は右側縁（特に腹面側）を中心に顕著な擦痕が

みられ、73 は尖端部付近が横方向の線状痕によって磨滅している。

石錐（Fig.165−74）

74 は、薄身（3mm）の剥片の上下を折断したものを横位に用い、細かな剥離で整形された黒曜石製の石錐である。錐部の横断面は両側の折面を側面として四角形となる。

楔形石器（Fig.165−75）

75 は黒曜石製の楔形石器である。上下左右（主に上下）から対向するように薄く不規則な形状の剥離痕が入り、いびつながらも鋭い縁辺を持った断面形をなしている。

剥片（Fig.165−76）

76 は暗赤褐色が網状に入る黒曜石の剥片であり、僅かに転礫面が残る。薄身（6mm）の調整剥片と思われるが、右側縁に微小な剥離痕が連続する。

刻み付礫（Fig.165−77）

77 は扁平な円礫で砂岩と思われるが、赤褐色の渦のような模様を持ち、異彩を放っている。表面に多くの細かな刻み様の痕跡が観察され、最も顕著なものは深さ 1mm ～ 2mm の刻みが連なって十字形を呈する。

石製品（Fig.165−78）

78 は、フローテーションによって検出された砂岩製のヒレ状石製品である。上部を欠損するため全体形状は定かではないが、台形状で欠損部の近くがくびれている。下端には、幅 2mm、深さ 1mm、長さ 7mm 前後の刻線が 4 本並び、その外側を区画するようなやや幅広（幅 3mm、深さ 1mm 程度）の刻線が囲む。側面と裏面にはわずかな剥落痕が残るものの刻線はない。

⑥ 10 号竪穴埋土出土（Fig.166）

竪穴埋土の比較的床面近くから出土し位置を記録した点取り遺物は、石鏃 6 点、両面加工尖頭器 2 点、石製ナイフ・スクレイパー 7 点、石錘 1 点、剥片 4 点の計 20 点である。

石鏃（Fig.166−79 ～ 82）

すべて黒曜石製で、80・81 は梨肌の石質である。79 ～ 81 は有茎の形態で、79 は三角形の身部、80 は五角形状をなす胴部と尖頭部、81 は内反する胴部を持つ。82 は無茎鏃で、緩やかな凹基をなす。細かな二次加工によって整形され、他の石鏃よりも滑らかな形状の縁辺となっている。

両面加工尖頭器（Fig.166−83）

83 は暗赤褐色の部分を含む黒曜石製であり、加工が粗く先端に転礫面を残す未成品である。

石製ナイフ（Fig.166−84・85）

84・85 はつまみ部が形成された石匙である。84 は黒曜石製で、背面全体と腹面の縁辺に二次加工が施されている。85 は頁岩製で、主に背面縁辺への二次加工によって弧状の刃部が作り出されている。

石錘（Fig.166−86）

86 は、やや厚みのある粗粒凝灰岩円礫の長軸端部に抉りを作り出した石錘と思われるが、有溝砥石の可能性もある。両端部を結ぶような溝が形成され、溝の周辺にはそれに沿う方向の擦痕が顕著である。

（山田　哲）

3−3　骨角器

① 10c 号床面出土（Fig.167−1・2）

1 は鯨骨製の掘具である。焼けて損傷が著しいが、本来は側縁に突起をもつタイプだったと思われる。

2 は海獣骨を細長く切り出した棒状製品Ⅱ類の破片である。

② 10 号竪穴埋土出土（Fig.167−3）

3 は動物意匠の彫刻破片である。鹿角製でクジラの尾部と波状の線を浮彫で表現している。

（高橋　健）

3−4　木製品（Fig.168）

Fig.168−1 は、両側縁側に面取りがみられる棒状木製品の一部である。Ⅳ層出土であるが、当竪穴に伴うものと考えてよいであろう。

（宇田川洋）

3−5　金属器

① 10b 号床面出土（Fig.169−1）

1 は壁際の周溝から出土した刀子の刃部破片である。刃部は細身で、先端はやや上へ反るようである。断面を見ると片刃ぎみにすこし彎曲している。

② 10c 号床面・骨塚 c 出土（Fig.169−2・3）

2 は骨塚 c から出土した小型の片区刀子である。刃部には使用による減りが目立つ。茎の端部が若干抉れるように欠損している。3 は裏込め土から出土した鉄針である。上部を欠損しているものの、下端は残存している。断面は隅丸の方形である。

③ 10 号竪穴外出土（Fig.169−4）

4 はＸＸⅣ −44 区のⅢ層から出土した完形の曲手刀子である。鋒に近い部分は使用による減りによって細くなっており、区に近い刃部とは対照的である。おそらく柄が刃部を呑み込むよう装着されたからであろう。

（笹田朋孝）

4　小括

10 号竪穴では 3 軒（10a 号・10b 号・10c 号）の竪穴が検出された。住居の建て替えに関しては、面積を縮小してゆく点では 7 号・9 号の竪穴と共通していたが、位置が長軸の方向に前後移動するという特異な点も認められた。また 10a 号と 10b 号の各段階では、それぞれ一度構築した貼床に溝を切り直し

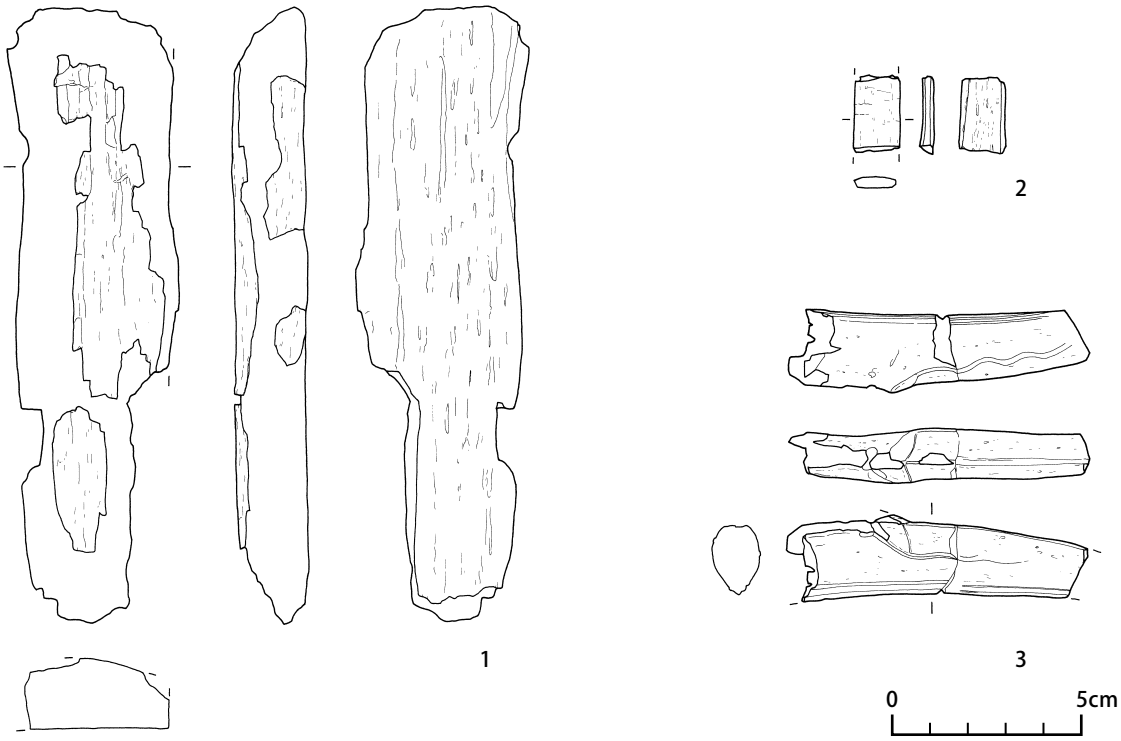


Fig. 167　10 号竪穴出土の骨角器（1～2：10c 号床面、3：10 号埋土）

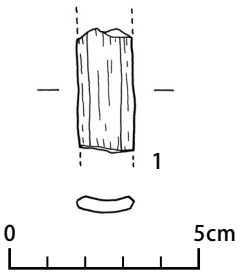


Fig. 168　10 号竪穴出土の木製品

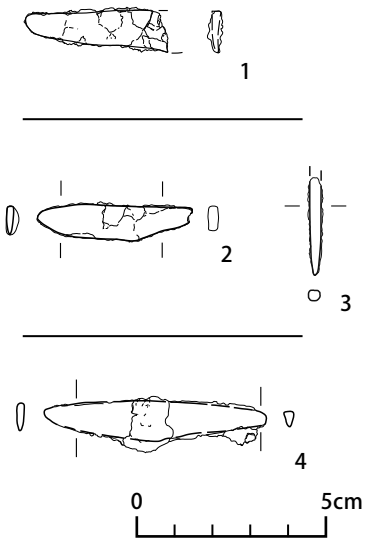


Fig. 169　10 号竪穴出土の金属器
（1：10b 号床面、2：10c 号骨塚 c、
3：10c 号床面、4：10 号竪穴外）

て整形し直す（縮小する）という行為が認められたが、これらの整形に伴うような壁の改築は認められなかったので、「建て替え」に相当する大幅な更改の回数は 2 回と判断した。なお 10a 号・10b 号・10c 号はいずれも廃絶時に火を受けた焼失住居であった。

10 号竪穴については、貼床に関してもやや特異な様相が認められている。1 つは貼床の形状で、オホーツク文化で一般的な「コ」の字状の形はやや不明瞭ながら 10b 号と 10c 号で確認されたが、その形は通常とは異なり、壁際まで延びるという特異な形状をしていた。2 つめは貼床の周囲の周溝と木枠に関する点である。10c 号では貼床外周の周溝内に骨塚 c の一部が落ち込んでいたが、この点からすると、住居廃棄時において、さらにはおそらく生活時においても、この貼床外周の周溝には木枠は収められず、「溝」のまま蓋等がなされずに使用されていた可能性が高いと考えられた。

10a 号・10b 号・10c 号竪穴ともに出土遺物は多数にのぼるが、特に骨角器と木製品については 7 号～ 9 号の各竪穴と比較すると出土量は少なかった。土器はオホーツク文化貼付文期が主となる。土器の出土位置及び接合関係をみると、かなり離れた地点のもの同士が接合している例が目立つ（Fig.135）。10 号竪穴が現代の耕作地に近い地点に位置することとあわせて考えると、埋土の資料のみならず床面出土と判断した資料についても後世の攪乱によって原位置から動いている可能性も考えられる。もっとも、後世の攪乱が住居の床面を掘り抜いているような状況は確認できなかった。

他に遺物で注目されるのは、骨塚 c から出土した縄文土器（北筒式トコロ 5 類土器）である。同様の例は 7a 号竪穴の骨塚 a、9a 号竪穴の骨塚 a でも確認されているが、この骨塚 c の例も出土状況からみて偶然の混入ではなく、居住者によって意図的に置かれたものと考えられる。

（熊木俊朗）

註

1）10 号竪穴のセクション図については、本文以外にもＸＸＶラインの北側 50cm のラインで作図しているが、ここでは図示していない。

2）第一章第二節の 2005 年度調査概要にも述べたが、発掘調査の段階では本文の 10a 号竪穴を「10b 号」、本文の 10b 号竪穴を「10a 号」として調査記録を作成している。

3）ちなみにこの開口部側の貼床 a の周溝が確認された面の標高は、10b 号の床面より下面であった。すなわち、この周溝は 10a 号の廃絶後、10b 号の時期には床面下に埋められていたようである。

第五節　出土土器・骨角器属性表

1　オホーツク土器（口縁部・胴部）文様等属性表

Table 1 は本書で報告したオホーツク土器のうち、文様を有する個体の属性を記した表である。Table 1 の註 1）～ 3）の内容は以下のとおりである。

1)「出土層位」に記した層位・遺構以外の位置から出土した破片が接合している場合、その破片の出土した位置を記した。このように複数の層位・遺構の資料が接合している場合、①異なる遺構から出土した資料が接合した場合は最も新しい段階の遺構に含める、②床面と埋土の破片が接合した場合は床面に含める、という原則に基づいて「出土層位」の判断をおこなったが、一部には例外もあり、個々の資料の出土状況に応じて帰属を判断している。

2）口縁部肥厚帯の分類は、以下の 4 種を基本とする。

1 段：肥厚帯を 1 段有する例。断面形は長方形のほか、ほとんど肥厚せず口縁部の下縁に痕跡的な段（接合痕に近い痕跡）を有する例などがあり、厚さや幅に多少の変異がある。幅が狭く厚手となるものは　下記の「突帯」の方に分類する。

2 段：肥厚帯を 2 段有する例。

突帯:肥厚帯の幅が狭く、かつやや厚手となる例。断面形は丸くなるものと方形に近いものがある。

無：肥厚帯がない例

以上の 4 種が基本となるが、今回報告する資料の中には「突帯＋ 1 段」という「一段の肥厚帯の上に突帯が重ねて付加されている」例も存在する。また「1 段以上」としたのは、欠損のため 1 段かそれ以上か不明の資料である。

3）貼付文の文様要素については以下のように分類して記載している。

①紐状の貼付文

紐状の貼付文については以下の二つの属性を組み合わせて分類をおこなっている。

単位：何本の貼付文が意匠として 1 つのまとまりと判断できるか、という分類である。今回報告する例では 1 本単独～ 6 本 1 単位まで確認された。1 本単独には直線状や大小の波線などがある。2 本 1 単位では直線＋波線の組み合わせが代表的であり、3 本 1 単位ではその下部にさらに直線を加えて直線＋波線＋直線となるものが代表的である。4 本 1 単位以上の例は少ないが、意匠には様々なバリエーションがある。

施文：貼付文上の施文に関する分類である。4 種があり、C、K、H、P の略号で示す。C は貼付文上に刺突を施して鎖状（Chain）にする施文である。K は刻み（Kizami）を施す施文で、いわゆる「擬縄貼付文」である。H は貼付文に指でひねり（Hineri）を加える施文で、小さな波状を呈し、器面に爪の跡が残る場合がある。P は施文を行わない（Plain）例である。

これら二つの属性を組み合わせ､｢単位＋施文」の記号で表記する。例えば「貼付文（2P)」は､｢2本1単位で（2本とも）施文なし」の貼付文である。異なる施文どうしで1単位をなしている場合は、「貼付文（1P ＋ 1H）のように＋の記号を用いて記載する（この場合は、施文なしの貼付文とひねりを加えられた貼付文が各1本ずつで2本1単位となっている)。

②粒状の貼付文

径1cm前後の円形の貼付文を指す。

③ボタン状の貼付文

粒状の貼付文の上面に刺突が施されたものを指す。

④その他の貼付文

動物意匠、縦長の瘤状の貼付文、太さ1cmを超えるような太い粘土帯などについては個々に記載している。

（熊木俊朗）

2　骨角器属性表

Table 2は本書で報告した骨角器の属性表である。

（高橋　健）

Table 1　オホーツク土器（口縁部・胴部）文様等属性表

Fig.	住居	出土層位	他の層位との接合[1)]	口縁部肥厚帯[2)]	口縁部文様[3)]	頚部～胴部文様[3)]	備考
22-1	7a	床面		無	貼付文(3P(ボタン状を付加))	貼付文(5P(ボタン状を付加))	
22-2	7a	床面		無	貼付文(1H(粒状を付加)・3P・1H・1H)		
22-3	7a	床面		突帯	貼付文(3P)		
22-4	7a	床面		1段	貼付文(3P・1C)		
22-5	7a	床面		2段	貼付文(3P・3P)	貼付文(3P・1C)	
22-6	7a	床面		2段	貼付文(2P・2P・2P・2P)		
22-7	7a	床面		無	貼付文(2P)	貼付文(2P(2ヶ1組の粒状を付加))	
22-8	7a	床面		1段	貼付文(1P・1P)		
22-9	7a	床面		1段	貼付文(1P・1P)	貼付文(1P・1P)	
22-10	7a	床面		無	貼付文(1H)		
22-11	7a	床面		突帯	無文	貼付文(1K・1K)	
22-12	7a	床面	Ⅳ層	無	沈線文(2条の間に波線)、貼付文(2ヶ1組のボタン状)		
22-13	7a	床面		1段	貼付文(1P)、刻文		
22-14	7a	床面	Ⅳ層	―	―	貼付文(1H・1P(粒状を付加)・1H)	
22-15	7a	床面		―	―	貼付文(1H・1H)	
23-18	7a	骨塚a		突帯	貼付文(3P(粒状を付加))	貼付文(6P(粒状を付加)・7P)	
23-19	7a	骨塚a		1段	貼付文(5P)		
23-20	7a	骨塚a	Ⅳ層, 7a号床面, 7b号床面	1段	貼付文(3P・2P(ボタン状を付加))	貼付文(水鳥とみられる動物意匠(刺突文を付加)・1P(ボタン状を付加)・1P・2P(ボタン状を付加))	21と同一個体
23-21	7a	骨塚a	Ⅳ層, 7a号床面, 7b号床面	1段	貼付文(3P・2P(ボタン状を付加))	貼付文(水鳥とみられる動物意匠(刺突文を付加)・1P(ボタン状を付加)・1P・2P(ボタン状を付加))	20と同一個体
23-22	7a	骨塚a		1段	貼付文(3P・1P・3P)	貼付文(1P・1K)	
23-23	7a	骨塚a		―	貼付文(1P)		
23-24	7a	骨塚a		1段	貼付文(1P・1P)	貼付文(1P・1K)	25と同一個体
23-25	7a	骨塚a		1段	貼付文(1P・1P)	貼付文(1P・1K)	24と同一個体
23-26	7a	骨塚a		1段	貼付文(1P・1P・1K)	貼付文(1K)	
23-27	7a	骨塚a	Ⅲ層, Ⅳ層, 7号床面	1段	貼付文(1H(2ヶ1組の粒状を付加)・1H)		
24-28	7a	骨塚a	Ⅲ層, Ⅳ層, 撹乱層	2段	貼付文(1P・1P・1P)	貼付文(1P、ヒトの鼻を模した貼付文(鼻の穴状に刺突を2ヶ所付加)と粒状を付加)	
24-29	7a	骨塚a		1段	貼付文(1H・1H・1H)	貼付文(短い紐状に粒状を付加)	
24-30	7a	骨塚a		無	沈線文(2条)		
24-31	7a	骨塚a		―	―	貼付文(1P・3P)	
24-32	7a	骨塚a		―	―	貼付文(1P)	
24-33	7a	骨塚a		―	―	貼付文(1P・1P(粒状を付加))	
24-34	7a	骨塚a		―	―	貼付文(1H・1H)	
24-35	7a	骨塚a		―	―	貼付文(1K・1K?(剥落しており詳細不明))	
24-36	7a	骨塚a		―	―	貼付文(1K・1K(ボタン状を付加)・1K)	
24-37	7a	骨塚a		―	―	貼付文(1K・1K)	
25-43	7a	骨塚a	Ⅳ層, 7a号床面	1段	貼付文(1K・1K)	貼付文(1K・1K・1K(2ヶ1組の粒状を付加))	
25-44	7a	骨塚a		無	貼付文(1H・1H・1H)	貼付文(1K・1K)	
26-45	7a	骨塚a	Ⅱ層, Ⅲ層	無	貼付文(1K・1K)	貼付文(1H・1H(3ヶ1組のボタン状を付加))	
27-47	7b	床面		1段	貼付文(5P)	貼付文(5P・2P(粒状を付加)・水鳥の意匠とボタン状)	48と同一個体か
27-48	7b	床面		1段	貼付文(5P)	貼付文(5P・2P・2P)	47と同一個体か
27-49	7b	床面		1段	貼付文(5P)	貼付文(3P・1P＋1K＋1P(上下に粒状を付加))	
27-50	7b	床面		1段	貼付文(3P・2P)	貼付文(3P(2ヶ1組の縦長の粒状を付加))	
27-51	7b	床面	Ⅳ層	1段	貼付文(2P・2P)		
27-52	7b	床面	Ⅲ層	2段	貼付文(2P・2P・2P)		
28-53	7b	床面		2段	貼付文(2P・1P・2P)		
28-54	7b	床面		1段	貼付文(3P？・2P)		
28-55	7b	床面		1段	貼付文(3P・1P)	貼付文(3P・1P)	
28-56	7b	床面	Ⅳ層	1段	貼付文(2P・2P)	貼付文(2P・2P)	57と同一個体
28-57	7b	床面	Ⅳ層	1段	貼付文(2P・2P)	貼付文(2P・2P)	56と同一個体
28-58	7b	床面		2段	貼付文(2P・2P・2P)		
28-59	7b	床面		1段	貼付文(2P・2P)		
28-60	7b	床面		1段	貼付文(2P・1P・2P)		
28-61	7b	床面		1段	貼付文(2P・1P)		
28-62	7b	床面		―	貼付文(2P)		

Fig.	住居	出土層位	他の層位との接合[1]	口縁部肥厚帯[2]	口縁部文様[3]	頚部～胴部文様[3]	備考
28-63	7b	床面		1段	貼付文(2P)		
29-64	7b	床面		1段	貼付文(2P・2P)	貼付文(2P・2P)	
29-65	7b	床面		1段	貼付文(2P・1H)		
29-66	7b	床面		無	貼付文(2K)	貼付文(2P？(縦長粒状を付加))	
29-67	7b	床面		1段	貼付文(1P・1P・1P)		
29-68	7b	床面		1段	貼付文(1P)		
29-69	7b	床面		1段	貼付文(1H・1H)	貼付文(1K・1K)	
29-70	7b	床面		1段	無文？		
29-71	7b	床面		突帯	刻文		
29-72	7b	床面		－	－	貼付文(3P)	
29-73	7b	床面		－	－	貼付文(3P)	
29-74	7b	床面		1段以上	貼付文(3P？)		
29-75	7b	床面	Ⅳ層	－	－	貼付文(2P・1P・3P(3ヶ1組の粒状を付加))	
29-76	7b	床面		－	－	貼付文(紐状のものを3条同心円状に配する)	
29-77	7b	床面		－	－	貼付文(2P)	
29-78	7b	床面		－	－	貼付文(2P(粒状を付加))	
29-79	7b	床面		－	－	貼付文(1H)	
29-80	7b	床面		－	－	貼付文(1K・1K)	
29-81	7b	床面		－	－	貼付文(粒状＋刺突を付加)	
31-94	7b	骨塚b		突帯＋1段	貼付文(3P・1P・1P・1P・2P)	貼付文(5P、両端を押しつぶした縦の貼付文を付加)	
31-95	7b	骨塚b		1段	貼付文(2P)		95～98は同一個体か
31-96	7b	骨塚b		1段	貼付文(2P)		95～98は同一個体か
31-97	7b	骨塚b		1段	貼付文(2P)		95～98は同一個体か
31-98	7b	骨塚b		1段	貼付文(2P)		95～98は同一個体か
31-99	7b	骨塚b	Ⅳ層, 7b号床面	1段	貼付文(2P・1P)	貼付文(3P・1P・1P)	
31-100	7b	骨塚b		1段	貼付文(1P・2P)		
31-101	7b	骨塚b		－	貼付文(1H)		
31-102	7b	骨塚b		－	－	貼付文(3P)	
31-103	7b	骨塚b		－	－	貼付文(5P)	
31-104	7b	骨塚b		－	－	貼付文(2P)	
31-105	7b	骨塚b	7b号床面	1段？	－		
31-106	7b	骨塚b		－	－	貼付文(2P)	
31-107	7b	骨塚b		－	－	貼付文(1K)	
33-110	7	床面		2段	貼付文(4P、粒状を付加)	貼付文(3P)	
33-111	7	床面		無	貼付文(5P)	貼付文(2P・1P)	
33-112	7	床面		1段	貼付文(1P・1P・3P)	貼付文(3P)	
33-113	7	床面		1段	貼付文(3P・3P)		
33-114	7	床面		－	貼付文(3P)		
33-115	7	床面		1段	貼付文(2P)		
33-116	7	床面	Ⅳ層	1段	貼付文(1H・1H＋1P)		
33-117	7	床面		無	貼付文(1P・1P・1P)		
33-118	7	床面		－	貼付文(1P・1P・1P)		
33-119	7	床面		－	貼付文(1P・1P・1P)		
33-120	7	床面		1段	貼付文(1H・1H)		
33-121	7	床面		－	－	貼付文(2P・3P)	
33-122	7	床面		－	－	貼付文(3P・3P)	
33-123	7	床面		－	－	貼付文(1P・3P・3P(ボタン状を付加))	
33-124	7	床面		－	－	貼付文(3P・1P)	
33-125	7	床面		－	－	貼付文(3P)	
33-126	7	床面		－	－	貼付文(3P)	
33-127	7	床面		－	－	貼付文(3P)	
33-128	7	床面		－	－	貼付文(1C・2P・2P・2P、縦につまんだ粒状を付加)	
33-129	7	床面		－	－	貼付文(2P・2P)	
33-130	7	床面		－	－	貼付文(2P・2P)	
33-131	7	床面		－	－	貼付文(2P)	
33-132	7	床面		－	－	貼付文(2P)	
33-133	7	床面		－	－	貼付文(2P)	
33-134	7	床面		－	－	貼付文(2P)	

Fig.	住居	出土層位	他の層位との接合[1]	口縁部肥厚帯[2]	口縁部文様[3]	頚部～胴部文様[3]	備考
33-135	7	床面		－	－	貼付文(1P)	
33-136	7	床面		－	－	貼付文(1C・1P)	
33-137	7	床面		－	－	貼付文(1K・1K・1K・1K(粒状を付加)・1K)	
33-138	7	床面		－	－	貼付文(1K・1K)	
33-139	7	床面		－	－	貼付文(3ヶ1組の粒状(刺突あり))	
35-158	7	竪穴埋土	Ⅲ層, Ⅳ層, 骨塚b	2段	貼付文(1K・1H・1H・1H)	貼付文(1H・1H、水鳥？とみられる動物意匠を付加)	骨塚bに伴った可能性もある
79-1	8	床面		1段	貼付文(5P・1P)		
79-2	8	床面		1段	貼付文(5P)		
79-3	8	床面		1段	貼付文(5P)		
79-4	8	床面		1段	貼付文(4P)	貼付文(1P(ボタン状を付加)・3P(上下にボタン状を付加))	
79-5	8	床面	Ⅱ層	1段	貼付文(4P・2P)		
79-6	8	床面		1段	貼付文(4P)		
79-7	8	床面		－	貼付文(3P)		
79-8	8	床面		1段	貼付文(3P・3P)	貼付文(粒状)	
79-9	8	床面		無	貼付文(3P・縦長貼付文(刺突文を付加))	貼付文(1P＋1H＋1P)	
79-10	8	床面		2段	貼付文(3P・3P・？)		
79-11	8	床面		1段	貼付文(3P・2P・3P)		
79-12	8	床面	Ⅱ層, Ⅲ層	2段	貼付文(2P・1P・1P・縦長の貼付文(両端を押圧)・3P)		
79-13	8	床面		1段	貼付文(2P・3P)		
79-14	8	床面		1段	貼付文(3P・1P)		
79-15	8	床面		1段以上	貼付文(3P)		
79-16	8	床面		無	貼付文(1P・1P)	貼付文(2P(上下に3ヶ1組の粒状を付加))	
79-17	8	床面		無	貼付文(2P)	貼付文(2P)	
79-18	8	床面		1段	貼付文(1P・1P)	貼付文(2P)	
79-19	8	床面		無	貼付文(2P・1P)？(剥落しており詳細不明)		
79-20	8	床面		1段	貼付文(2P・2P)	貼付文(2P)	
79-21	8	床面		1段	貼付文(2P・2P)		
79-22	8	床面		1段	貼付文(2P・2P)		
80-23	8	床面		1段	貼付文(2P・2P)		
80-24	8	床面		1段	貼付文(2P)		
80-25	8	床面		1段	貼付文(2P・1P＋1H)		
80-26	8	床面		1段	貼付文(2P)		
80-27	8	床面		1段	貼付文(2P・2P)	貼付文(2P・2P(粒状を付加))	28と同一個体
80-28	8	床面		－	－	貼付文(2P・2P(粒状を付加))	27と同一個体
80-29	8	床面		1段	貼付文(2P・1K)		
80-30	8	床面		1段	貼付文(2P・刻文)		
80-31	8	床面		無	無文	貼付文(1H(2ヶ1組の粒状を付加)・2P・1H(2ヶ1組の粒状を付加))	
80-32	8	床面		1段	貼付文(1P・1P・1P)		
80-33	8	床面		1段	貼付文(1P・1P・1P・1P)		
80-34	8	床面		1段	貼付文(1P・1P・1P)	貼付文(1P(粒状を付加))	
80-35	8	床面		1段	貼付文(1P・1P(粒状を付加)・1P)		
80-36	8	床面		2段	貼付文(1P・1P)	貼付文(1P)	
80-37	8	床面		1段	貼付文(1P・1P)		
80-38	8	床面		無	貼付文(1P)		
80-39	8	床面		1段	貼付文(1P・ボタン状・1P・1P)	貼付文(ボタン状・1P・1P・1P・ボタン状・1C)	
80-40	8	床面	Ⅲ層	1段	貼付文(1K・1P(粒状を付加)・1K)		
81-41	8	床面		1段	貼付文(1H・1H・1H)		
81-42	8	床面		1段	貼付文(1H・1H)		
81-43	8	床面		1段	貼付文(1H・1H・1H)		
81-44	8	床面		1段	貼付文(1H・1H)		
81-45	8	床面		無	貼付文(1H・1H)	貼付文(1H・1H)	
81-46	8	床面		1段	貼付文(1K)、沈線文(1条、ただし貼付文が剥落した痕跡の可能性もあり)		
81-47	8	床面		無	口唇外縁に刻文、貼付文(2ヶ1組のボタン状・1K？)		
81-48	8	床面		無？	刺突文(円形で浅い)		
81-49	8	床面		1段	無文		
81-50	8	床面		1段	無文		
81-51	8	床面		－	無文		把手状　オホーツク土器とみられるが同定困難

Fig.	住居	出土層位	他の層位との接合[1]	口縁部肥厚帯[2]	口縁部文様[3]	頚部～胴部文様[3]	備考
81-52	8	床面	Ⅱ層	2段	貼付文(3P)		
81-53	8	床面	Ⅱ層	－	－	貼付文(3P・1C(2ヶ1組のボタン状を付加))	
81-54	8	床面		－	－	貼付文(2P・3P)	
81-55	8	床面	Ⅲ層	－	－	貼付文(3P)	
81-56	8	床面		－	－	貼付文(3P)	
81-57	8	床面		－		貼付文(3P・3P・3P)	
81-58	8	床面	Ⅱ層, Ⅲ層	－	－	貼付文(2P(2ヶ1組の縦長の粒状を付加))	
81-59	8	床面		－	－	貼付文(2P・鰭状の意匠(5本指))	
81-60	8	床面		－	－	貼付文(2P)	
82-61	8	床面		－	－	貼付文(2P・2P)	
82-62	8	床面		－	－	貼付文(2P・2P)	
82-63	8	床面		－	－	貼付文(2P)	
82-64	8	床面		－	－	貼付文(2P)	
82-65	8	床面		－	－	貼付文(2P)	
82-66	8	床面		－	－	貼付文(2P(2ヶ1組の粒状を付加))	
82-67	8	床面		－	－	貼付文(2P)	
82-68	8	床面		－	－	貼付文(1P・2P)	
82-69	8	床面		－	－	貼付文(2P(縦の貼付文＋2ヶ1組の粒状を付加))	
82-70	8	床面		－	－	貼付文(2P(L字形の貼付文を付加))	
82-71	8	床面		－	－	貼付文(2P)	
82-72	8	床面		－	－	貼付文(2P・2P)	古段階の竪穴に伴うものか
82-73	8	床面		－	－	貼付文(斜めの貼付文(2P)＋粒状)	
82-74	8	床面		－	－	貼付文(1P)	
82-75	8	床面		－	－	貼付文(1P)	
82-76	8	床面		－	－	貼付文(1P・1P)	
82-77	8	床面		－	－	貼付文(1P)	
82-78	8	床面		－	－	貼付文(1P)	
82-79	8	床面		－	－	貼付文(1H)	
82-80	8	床面		－	－	貼付文(1H)	
82-81	8	床面		－	－	貼付文(1K)	
82-82	8	床面		－	－	沈線文(2条)	
82-83	8	床面	Ⅲ層	－	－	無文	
85-128	8	骨塚	8号床面	1段	貼付文(2P)	貼付文(3P(2ヶ1組の粒状を付加)・1P)	
85-129	8	骨塚		1段	貼付文(1P・2P)		
85-130	8	骨塚		無	－	貼付文(2P・2P)	
86-132	8	古段階		1段	貼付文(1P・1P・1P)		
86-133	8	古段階		1段	貼付文(1H・1K・1P)		
87-136	8 竪穴外			無	貼付文(2P・3P)	貼付文(3P(粒状を付加))	
110-1	9a	床面		1段	貼付文(1P・1P・1P)		
110-2	9a	床面		1段	貼付文(1H・1H)		
110-3	9a	床面		1段	貼付文(1H・1H)		
110-4	9a	床面		1段	貼付文(1H・1H、縦長の貼付文と粒状を付加)		
110-5	9a	床面	Ⅳ層	突帯	刻文	貼付文(1K・1K)	
110-6	9a	床面		－	－	貼付文(2P・2P)	
110-7	9a	床面		－	－	貼付文(2H)	
110-8	9a	床面		－	－	貼付文(1P・1P)	
110-9	9a	床面		－	－	貼付文(ボタン状・1K)	
110-10	9a	床面		－	－	貼付文(1K)	
111-22	9a	骨塚a		－	－	貼付文(2K)	
112-24	9a・9b	床面	Ⅰ層, Ⅲ層, Ⅳ層	2段	貼付文(3P・2P)	貼付文(2P・3P)	
112-25	9a・9b	床面		無	貼付文(3P)		
112-26	9a・9b	床面		1段	貼付文(1P＋1H)		
112-27	9a・9b	床面		1段	貼付文(1K・2P)		
112-28	9a・9b	床面	Ⅰ層, Ⅱ層, Ⅳ層	2段	貼付文(1H・1P・1H)	貼付文(1P・1H)	29と同一個体
112-29	9a・9b	床面	Ⅲ層, Ⅳ層	2段	貼付文(1H・1P・1H)	貼付文(1P・1H)	28と同一個体
112-30	9a・9b	床面	Ⅲ層	1段	刻文		
112-31	9a・9b	床面		－	－	貼付文(1K・1P)	
112-32	9a・9b	床面		－	－	貼付文(1P？・1P(縦長の貼付文を付加))	

Fig.	住居	出土層位	他の層位との接合[1]	口縁部肥厚帯[2]	口縁部文様[3]	頚部～胴部文様[3]	備考
113-36	9b	床面		2段	貼付文(3P・1P・3P(粒状を付加))		
113-37	9b	床面		1段	貼付文(1P)		
113-38	9b	床面		1段	貼付文(1H・1H)		
113-39	9b	床面		1段	貼付文(1K・1H・1H・1K)	貼付文(粒状)	
113-40	9b	床面		無	貼付文(1K)	貼付文(1K・1K)	
113-41	9b	床面		2段	貼付文(1K・1K・2P(2ヶ1組の粒状を付加))		
113-42	9b	床面	Ⅳ層	1段	無文	貼付文(2P・1P(2ヶ1組の粒状を付加))	
113-43	9b	床面		1段	無文	貼付文(粒状)	
113-44	9b	床面	Ⅲ層	1段	無文	貼付文(3P(縦長の貼付文を付加))	
113-45	9b	床面		－	無文		
113-46	9b	床面		－	－	貼付文(1P＋1K＋1P)	
113-47	9b	床面		－	－	貼付文(2P・2P)	
113-48	9b	床面		－	－	貼付文(2P・2P)	
113-49	9b	床面		－	－	貼付文(1P)	
113-50	9b	床面		－	－	貼付文(ボタン状・1H・1H)	
113-51	9b	床面		－	－	貼付文(太い紐状(刻みを付加))	
113-52	9b	床面		－	－	沈線文(2条)	
114-72	9c	床面	Ⅳ層	無	貼付文(6P)		
114-73	9c	床面	Ⅰ層, Ⅱ層	2段	貼付文(3P・3P)	貼付文(4P)	口唇上に2Pと粒状を組み合わせた貼付文
114-74	9c	床面		1段	貼付文(3H)	貼付文(1H)	
114-75	9c	床面		1段	貼付文(2P・2P)		
114-76	9c	床面		1段	貼付文(2P・2P)		
114-77	9c	床面		－	貼付文(2P)		
114-78	9c	床面		1段	貼付文(1P)	貼付文(2P)	
114-79	9c	床面		1段	貼付文(2P・1P)	貼付文(2P)	
114-80	9c	床面		1段	貼付文(2P・2P)	貼付文(2P・2P・2P)	
114-81	9c	床面		2段	貼付文(2P・1P(粒状を付加)・1K＋1P)	貼付文(1C＋1P＋2C)	
114-82	9c	床面	Ⅲ層	2段	貼付文(1K＋4P(横長の貼付文を付加)・3P・2P(横長の貼付文を付加))	貼付文(3P・2P)	
114-83	9c	床面		3段	貼付文(2P・1K・2P・1K)	貼付文(2P)	
115-84	9c	床面		無	貼付文(2P・2P)		
115-85	9c	床面		1段	貼付文(1P・1P)		
115-86	9c	床面		1段	貼付文(1P・1P(粒状を付加)・1P)		
115-87	9c	床面		1段	貼付文(1P)		
115-88	9c	床面		1段	貼付文(1P)		
115-89	9c	床面		1段	貼付文(1P・1P・1H)		
115-90	9c	床面	Ⅲ層	1段	貼付文(1P・1P)	貼付文(1P・1P)	91と同一
115-91	9c	床面	Ⅰ層, Ⅲ層, Ⅳ層	1段	貼付文(1P・1P)	貼付文(1P・1P(2ヶ1組の縦長の貼付文を付加)	90と同一
115-92	9c	床面		突帯	無文	貼付文(1K・1K)	口唇上に貼付文(1K)
115-93	9c	床面		2段	貼付文(1C・1P・1C)		
115-94	9c	床面		1段	貼付文(1H・1H)		
115-95	9c	床面		無	無文	貼付文(1K・1K、間に2本の貼付文(Hに粒状を付加したもの)を付加)	
115-96	9c	床面		1段	貼付文(1K・1K)	貼付文(粒状)	
115-97	9c	床面		無	無文		
115-98	9c	床面		1段	(剥落のため不明)		
115-99	9c	床面		突帯	無文		
115-100	9c	床面		－	－	貼付文(1P(太い貼付文の上に重ねて施されている)・2P(粒状を付加)・3P)	
115-101	9c	床面		－	－	貼付文(2P・2P(縦長の貼付文を付加))	
115-102	9c	床面		－	－	貼付文(2P＋粒状を付加)	
115-103	9c	床面		－	－	貼付文(1H・1H)	
115-104	9c	床面		－	－	貼付文(1P・1K)	
117-133	9c	骨塚c		1段	貼付文(3P)	貼付文(3P・3P、6Pからなる2単位の文様を付加)	
117-134	9c	骨塚c		突帯＋1段	貼付文(2P・3P)	貼付文(2P・3P)	
117-135	9c	骨塚c		1段	貼付文(3P・1P)		
117-136	9c	骨塚c	Ⅳ層	1段	貼付文(3P(交点に粒状を付加))	貼付文(3P・3P・3P)	
117-137	9c	骨塚c		1段	貼付文(2P？(剥落のため詳細不明))		
117-138	9c	骨塚c		2段	貼付文(2P・1K・1P＋1H(両端を押しつぶした貼付文を付加)		139と同一

Fig.	住居	出土層位	他の層位との接合[1]	口縁部肥厚帯[2]	口縁部文様[3]	頚部～胴部文様[3]	備考
117-139	9c	骨塚c	9c号床面	2段	貼付文(2P・1K・1P＋1H(両端を押しつぶした貼付文を付加)		138と同一
117-140	9c	骨塚c		－	貼付文(2P・1P)		
117-141	9c	骨塚c		1段	貼付文(1P)		
117-142	9c	骨塚c		－	貼付文(1H・1H)		
117-143	9c	骨塚c		－	貼付文(1K)		
117-144	9c	骨塚c		－	貼付文(1K)		
117-145	9c	骨塚c		突帯＋1段	無文		
117-146	9c	骨塚c		－	－	貼付文(2P・4P)	
117-147	9c	骨塚c		－	－	貼付文(3P)	
117-148	9c	骨塚c		－	－	貼付文(3P)	
117-149	9c	骨塚c		－	－	貼付文(2P・2P)	
117-150	9c	骨塚c		－	－	貼付文(2P・1C)	
117-151	9c	骨塚c		－	－	貼付文(1P)	
117-152	9c	骨塚c		－	－	貼付文(1K・1K)	
117-153	9c	骨塚c		－	－	貼付文(1K・1K(粒状を付加))	
118-154	9c	骨塚c	9c号床面	2段	貼付文(2P・2P・2P)	貼付文(2P(2ヶ1組の粒状を付加)・3P(縦長の貼付文に刻みを入れたものを付加))	154～163は同一個体
118-155	9c	骨塚c		1段	貼付文(2P・2P)		154～163は同一個体
118-156	9c	骨塚c		1段	貼付文(2P・2P)		154～163は同一個体
118-157	9c	骨塚c		1段	貼付文(2P・2P)		154～163は同一個体
118-158	9c	骨塚c		－	－	貼付文(2P)	154～163は同一個体
118-159	9c	骨塚c		－	－	貼付文(3P(縦長の貼付文に刻みを入れたものを付加))	154～163は同一個体
118-160	9c	骨塚c		1段	貼付文(2P・2P)		154～163は同一個体
118-161	9c	骨塚c		2段	貼付文(2P・2P・2P)		154～163は同一個体
118-162	9c	骨塚c	Ⅳ層	2段	貼付文(2P・2P・2P)		154～163は同一個体
118-163	9c	骨塚c		－	貼付文(2P)		154～163は同一個体
119-169	9	床面		1段	貼付文(5P？(剥落しており詳細不明))		
119-170	9	床面		1段	貼付文(3P)		
119-171	9	床面		1段	貼付文(3P)		
119-172	9	床面		1段	貼付文(3P)	貼付文(2P)	
119-173	9	床面		－	貼付文(2P・2P・2K)		
119-174	9	床面		1段	貼付文(2P・1P)		
119-175	9	床面		1段	貼付文(2P・2P)		
119-176	9	床面		1段	貼付文(1K＋1P)、刻文		
119-177	9	床面		1段	貼付文(1K・1K・2K(ボタン状を付加))		
119-178	9	床面		1段	(1P？・1H？(剥落しており詳細不明))		
119-179	9	床面		－	貼付文(1K・1K)		
119-180	9	床面	Ⅳ層	無	無文	貼付文(1C)	口唇上に貼付文(1K)
119-181	9	床面	Ⅱ層	無	無文	貼付文(太い紐状(刻みを入れる)・馬蹄形(一部に刻みを入れる))	
119-182	9	床面		－	－	貼付文(3P(太い貼付文の上に重ねて施されている)・1P)	
119-183	9	床面		－	－	貼付文(3P・2P)	
119-184	9	床面		－	－	貼付文(2P・2P)	
119-185	9	床面		－	－	貼付文(2P)	
119-186	9	床面		－	－	貼付文(2K＋1P(一部がクランク状を呈する)	
119-187	9	床面		－	－	貼付文(1P)	
119-188	9	床面		－	－	貼付文(1K・1K(2ヶ1組の貼付文を付加))	
119-189	9	床面		－	－	貼付文(1K・1K)	
119-190	9	床面		－	－	貼付文(1C)	
120-202	9 竪穴外			1段	貼付文(1P＋1K＋1P)	貼付文(1K＋粒状＋1K(一部を除き剥落))	
147-1	10a	床面		1段	貼付文(3P・3P)	貼付文(3P・3P・1P)	1～4は同一個体
147-3	10a	床面		1段	貼付文(3P・3P)	貼付文(3P・3P・1P)	1～4は同一個体
147-4	10a	床面	Ⅳ層	1段	貼付文(3P・3P)	貼付文(3P・3P・1P)	1～4は同一個体
148-5	10a	床面		1段	貼付文(1P・3P・2P)		口唇上に1P(ボタン状を付加)

Fig.	住居	出土層位	他の層位との接合[1]	口縁部肥厚帯[2]	口縁部文様[3]	頚部～胴部文様[3]	備考
148-6	10a	床面		1段	貼付文(1P・1H・1P)	貼付文(1H・2P)	
148-7	10a	床面		1段	貼付文(1P・1P・1P)		
148-8	10a	床面		1段	指による押圧文		
148-9	10a	床面		1段	貼付文(粒状＋貼付文・太い貼付文の上に1P＋1H)	貼付文(2P・2K)	
148-12	10a	床面		－	－	貼付文(4P？)	
149-19	10a	骨塚a	Ⅳ層, 10a号床面	2段	貼付文(3P・1K)	貼付文(3P)	
150-23	10b	床面		1段	貼付文(4P)	貼付文(4P・2P・2P・5P)	
150-24	10b	床面		1段	貼付文(4P・3P・2P)		
150-25	10b	床面		1段	貼付文(3P・3P)		
150-26	10b	床面		1段	貼付文(1H＋1P・1H＋1P)	貼付文(1H＋1P・3P(上下に粒状を付加))	口唇上に2ヶ1組の粒状を付加
150-27	10b	床面		1段	貼付文(2P・2P・2P)	貼付文(2P)	
150-28	10b	床面		1段	貼付文(2P・2P)		
150-29	10b	床面		1段	貼付文(2P・2P)		
150-30	10b	床面		1段	貼付文(2P・2P)		
150-31	10b	床面		1段	貼付文(2P・2P)	貼付文(2P)	
150-32	10b	床面		1段	貼付文(2P・2P)		
150-33	10b	床面		1段	貼付文(2P・1P)	貼付文(2P(3ヶ1組のボタン状＋紐状を付加))	
150-34	10b	床面		2段	貼付文(2P(粒状を付加)・2P(粒状を付加))	貼付文(1K・2P)	
150-35	10b	床面	Ⅳ層	1段	貼付文(2P・1K・2P)	貼付文(2P)	
150-36	10b	床面		1段	貼付文(1K・2P)		
150-37	10b	床面		1段	貼付文(1H・1P・1H)	貼付文(1P＋1H(2ヶ1組のボタン状＋紐状を付加)	
150-38	10b	床面		無	無文		オホーツク土器ではない可能性も
150-39	10b	床面		－	－	貼付文(4P)	
150-40	10b	床面	Ⅲ層	－	－	貼付文(2P・1P・3P(粒状を付加))	
151-41	10b	床面		2段	貼付文(1P・1P・1P・1P)		
151-42	10b	床面		－	－	貼付文(3P・3P)	
151-43	10b	床面		－	－	貼付文(2P)	
151-44	10b	床面		－	－	貼付文(1H・1H)	
151-45	10b	床面		－	－	貼付文(2P)	
151-46	10b	床面	Ⅳ層	1段	貼付文(2P)		
151-47	10b	床面		－	－	貼付文(1P・2P(粒状を間に挟む))	
153-64	10c	床面		1段	貼付文(4P)	貼付文(3P)	
153-65	10c	床面		1段	貼付文(2P・2P)	貼付文(1P(2ヶの粒状と4本の紐状貼付文からなる単位文様を付加))	
153-66	10c	床面		－	貼付文(4P)		口縁部に吊耳？のような貼付文を付加した痕跡あり
153-67	10c	床面		1段	貼付文(1P・3P)		
153-68	10c	床面		突帯	貼付文(3P)		
153-69	10c	床面	Ⅲ層, 10b号床面	1段	貼付文(2P、粒状を付加)	貼付文(2P・2P)	
153-70	10c	床面	Ⅳ層	1段	貼付文(2P)	貼付文(2P)	
153-71	10c	床面		1段	貼付文(2P)		
153-72	10c	床面		無	貼付文(2P)		
153-73	10c	床面		無	貼付文(2P)		
153-74	10c	床面		無	貼付文(2P・2P)	貼付文(2P(一部は3P))	75と同一個体？
153-75	10c	床面		－	－	貼付文(2P・2P)	74と同一個体？
153-76	10c	床面	Ⅰ層	1段	貼付文(2P・1P)	貼付文(2P(ボタン状を付加))	
153-77	10c	床面		-	貼付文(2P)		
153-78	10c	床面		1段	貼付文(2P・1P)		
153-79	10c	床面		無	貼付文(2P)	貼付文(1H・1K、縦の貼付文を付加)	
154-80	10c	床面	Ⅱ層, Ⅳ層	2段	貼付文(2P・2P・2P)		
154-81	10c	床面		1段	貼付文(1P・1P)	貼付文(粒状)	
154-82	10c	床面		1段	貼付文(1K・1H)		
154-83	10c	床面		－	貼付文(1K)		
154-84	10c	床面		1段	貼付文(1H・粒状)		肥厚帯下縁に文様があるが、刺突文か貼付文が剥落したものか不明
154-85	10c	床面	Ⅳ層, 10b号床面	無	貼付文(1P・1K)	貼付文(1P)	
154-86	10c	床面		－	－	貼付文(1P＋1H＋1P)	

Fig.	住居	出土層位	他の層位との接合[1]	口縁部肥厚帯[2]	口縁部文様[3]	頚部～胴部文様[3]	備考
154-87	10c	床面		－	－	貼付文（3P・3P）	
154-88	10c	床面	10b号床面	－	－	貼付文（2P）	89と同一個体
154-89	10c	床面	Ⅳ層	－	－	貼付文（2P）	88と同一個体
154-90	10c	床面		－	－	貼付文（2P）	
154-91	10c	床面		－	－	貼付文（1H）	
154-92	10c	床面		－	－	貼付文（1P（粒状を付加）・1H（粒状を付加））	
156-111	10c	骨塚c		1段	貼付文（4P）		
156-112	10c	骨塚c		2段	貼付文（1K＋2P・1K）	貼付文（1P（粒状を付加）・1H（粒状を付加））	
156-113	10c	骨塚c		2段	貼付文（2P・2P・2P）		
156-114	10c	骨塚c	Ⅳ層	2段	貼付文（3P（ボタン状を付加）・2P（ボタン状を付加））		
156-115	10c	骨塚c	Ⅲ層, 10c号床面	2段	貼付文（2P・2P・2P）		
156-116	10c	骨塚c	Ⅰ層, Ⅱ層, Ⅲ層, Ⅳ層, 10c号床面	1段	貼付文（2P・2P）	貼付文（2P・1K・1K（縦長の貼付文1ヶと粒状2ヶを一単位とする貼付文を付加））	117と同一個体
156-117	10c	骨塚c	Ⅱ層, Ⅲ層, Ⅳ層	1段	貼付文（2P・2P）	貼付文（2P・1K・1K（縦長の貼付文1ヶと粒状2ヶを一単位とする貼付文を付加））	116と同一個体
156-118	10c	骨塚c		1段	貼付文（2P・2P）	貼付文（2P・2P）	
156-119	10c	骨塚c		無	貼付文（2P）		
156-120	10c	骨塚c		1段	貼付文（2P・1P）		
156-121	10c	骨塚c		1段	貼付文（2P・1P）		
156-122	10c	骨塚c		－	貼付文（2P・1H？）		
157-123	10c	骨塚c		1段	貼付文（2P・1H）		
157-124	10c	骨塚c		1段	貼付文（2P・2P）		
157-125	10c	骨塚c		1段	貼付文（2P・2P）	貼付文（2P・1P？（粒状を付加））	
157-126	10c	骨塚c		1段	貼付文（1P・1P）		
157-127	10c	骨塚c		無	貼付文（1P・1P・1P・1P）		
157-128	10c	骨塚c		無	貼付文（1P・1P・1P）		口唇に粒状の貼付文を付加
157-129	10c	骨塚c		無	貼付文（1P（粒状を付加）・1P（粒状を付加）・1P・1P）		
157-130	10c	骨塚c	Ⅲ層	無	貼付文（1K・1K・1K）		
157-131	10c	骨塚c		1段	無文		
157-132	10c	骨塚c		－	－	貼付文（2P・2P・2P）	
157-133	10c	骨塚c		－	－	貼付文（2P・2P）	
157-134	10c	骨塚c	10c号床面	－	－	貼付文（2P＋粒状を付加）	
157-135	10c	骨塚c		－	－	貼付文（2P・1P）	
157-136	10c	骨塚c		－	－	貼付文（2P）	
157-137	10c	骨塚c		－	－	貼付文（1P＋1H）	
157-138	10c	骨塚c		－	－	貼付文（2P）	

Table 2　骨角器属性表

Fig.	住居	出土層位	器種1	器種2	素材	被熱	重さ(g)	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	備考
43-1	7a	床面	銛頭	雌形Ⅰ類	海獣四肢骨		6.3	79	11	8	上半部破片　先端やや欠
43-2	7a	床面	銛頭	雌形Ⅰ類	海獣肋骨	○	7.5	79	16	7	未成品　尾部欠
43-3	7a	床面	銛頭？	雌形Ⅰ類	海獣肋骨	○	2.8	45	10	6	未成品　半欠
43-4	7a	床面	骨鏃	Ⅰ類	陸獣骨？	○	1.2	48	8	3	尾部やや欠
43-5	7a	床面	刺突具		陸獣骨	○	1.8	56	13	5	先端部破片
43-6	7a	床面	彫刻	クジラ浮彫	鹿角	○	7.7	57	18	22	尾部破片
43-7	7a	床面	垂飾	ビン状	海獣犬歯？	○	5.3	48	19	14	ほぼ完形　有孔
43-8	7b	床面	釣針軸	Ⅰ類　接合法	鯨骨	○	9.3	86	32	9	結合部破片
43-9	7b	床面	骨鏃？	Ⅰ類	陸獣骨？	○	0.8	39	7	3	先端部破片
43-10	7b	床面	棒状製品		海獣骨	○	8.6	75	13	12	断面円形
43-11	7	床面	銛頭	雌形Ⅰ類	海獣四肢骨	○	3.7	100	9	7	ほぼ完形
43-12	7	床面	銛頭	雌形Ⅰ類	海獣骨	○	1.3	53	10	6	上半部破片
43-13	7	床面	骨鏃	Ⅰ類	陸獣骨？	○	0.5	26	8	2	両端欠
43-14	7	床面	釣針軸	Ⅰ類　接合法	鯨骨		26.1	130	32	9	未成品？　結合部破片
44-15a	7	床面	不詳品	有孔鉤状製品	鹿角	○	23	75	77	16	2片接合せず
	7							18	13	9	
44-15b	7	床面	不詳品	有孔棒状製品	鹿角	○	8.5	105	17	15	折損
44-16	7	床面	彫刻	浮線	トナカイ角？	○	33.8	61	87	15	破片　他1片あり
44-17	7	床面	彫刻	浮線	鹿角	○	5.4	35	12	15	破片
44-18	7	床面	彫刻	海獣	鹿角	○	8.1	46	20	16	頭部破片
45-19	7b	床面	掘具		鯨骨	○	544.3	346	97	20	側縁部欠損
45-20	7b	床面	掘具		鯨骨	○	129.9	212	76	21	欠損部多い　刃部欠
45-21	7b	床面	掘具		鯨骨	○	374.6	377	73	18	欠損部多いがほぼ全長を残す
46-22	7a	床面	不詳品	まな板状製品	鯨肩甲骨	○	-	578	914	22	一部欠損
47-23	7a	骨塚a	銛頭	雌形Ⅰ類	海獣四肢骨	○	2.8	72	13	7	完形
47-24	7a	骨塚a	銛頭	雌形Ⅰ類	海獣四肢骨	○	1.4	49	11	7	下半部破片
47-25	7a	骨塚a	銛頭	雌形Ⅰ類	海獣骨	○	2.1	60	10	6	上半部破片
47-26	7a	骨塚a	骨鏃	Ⅲ類	鳥管骨	○	0.5	28	7	5	完形
47-27	7a	骨塚a	骨鏃	Ⅲ類	鳥管骨	○	0.5	28	6	4	先端やや欠
47-28	7a	骨塚a	骨鏃	Ⅲ類	鳥管骨	○	0.5	28	5	4	完形
47-29	7a	骨塚a	骨鏃	Ⅲ類	鳥管骨	○	1	28	5	4	ほぼ完形
47-30	7a	骨塚a	骨鏃	Ⅲ類	鳥管骨	○	1.2	28	6	6	基部やや欠
47-31	7a	骨塚a	骨鏃	Ⅲ類	鳥管骨		1.2	28	7	6	ほぼ完形
47-32	7a	骨塚a	骨鏃	Ⅲ類	鳥管骨	○	1.6	28	8	7	完形
47-33	7a	骨塚a	骨鏃	Ⅲ類	鳥管骨	○	1.2	28	9	7	基部やや欠
47-34	7a	骨塚a	骨鏃	Ⅲ類	鳥管骨	○	2.1	28	9	8	基部欠
47-35	7a	骨塚a	釣針軸	Ⅰb類　接合法	海獣肋骨	○	30.8	28	34	13	完形
47-36	7a	骨塚a	釣針軸	Ⅰa類　交差法	海獣肋骨	○	25.8	28	59	13	完形
48-37a	7a	骨塚a	釣針軸	Ⅰb類　接合法	鯨骨	○	62.2	28	25	18	ほぼ完形　37bと結合状態で出土
48-37b	7a	骨塚a	釣針軸	Ⅰa類　接合法	鯨骨	○	62.2	28	57	17	ほぼ完形　37aと結合状態で出土
48-38	7a	骨塚a	骨鏃	Ⅱ類		○	1.2	28	6	7	基部破片
48-39	7a	骨塚a	棒状製品	Ⅲ類	海獣骨？	○	0.4	28	9	3	有孔
48-40	7a	骨塚a	垂飾	有孔玉状		○	0.3	28	12	5	
48-41	7a	骨塚a	棒状製品	Ⅱ類	海獣骨		2.5	28	16	7	破片
48-42	7a	骨塚a	残片		鯨骨		47.7	28	40	16	釣針軸Ⅱ類の残片
49-43	7b	骨塚b	銛頭	雌形Ⅱ類	海獣骨	○	5.7	28	14	7	先端やや欠
49-44	7b	骨塚b	銛頭	雌形Ⅰ類	海獣骨		1.4	28	11	6	上半部破片　先端やや欠
49-45	7b	骨塚b	骨鏃	Ⅲ類	鳥管骨	○	1.3	28	6	6	先端やや欠
49-46	7b	骨塚b	骨鏃	Ⅲ類	鳥管骨	○	0.8	28	6	5	先端やや欠
49-47	7b	骨塚b	骨鏃	Ⅲ類	鳥管骨	○	0.4	28	8	4	頭部破片

Fig.	住居	出土層位	器種1	器種2	素材	被熱	重さ(g)	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	備考
49-48	7b	骨塚b	不詳品		鹿角	○	2.3	28	25	6	浮彫、穿孔あり
49-49	7b	骨塚b	掘具		海獣骨	○	10.1	28	41	14	刃部破片
49-50	7b	骨塚b	棒状製品	Ⅱ類	海獣肋骨	○	27.2	28	15	6	ほぼ完形
50-51	7	Ⅲ層	彫刻	クマ	鹿角	○	14	28	28	35	頭部破片
50-52	7	撹乱	彫刻	海獣	鹿角	○	2.1	28	9	10	頭部・尾部端欠
50-53	7	Ⅳ層	彫刻	魚？浮彫	鹿角	○	9.6	28	25	19	破片
50-54	7	Ⅲ層	彫刻	海獣浮彫	鹿角	○	10.4	28	31	14	鰭部破片
50-55	7	Ⅲ層	彫刻	クジラ	鹿角	○	9.3	28	24	16	頭部破片
50-56	7	Ⅲ層	彫刻	クジラ	鹿角	○	4.1	28	14	21	口吻部破片
50-57	7	Ⅳ層	彫刻	ラッコ	鹿角	○	4	28	13	14	頭部破片
50-58	7	Ⅳ層	垂飾	有孔円盤	鹿角	○	9	28	64	5	
50-59	7	Ⅳ層	垂飾	有孔円盤	鹿角	○	4.9	28	41	5	
50-60	7	Ⅳ層	垂飾	有孔円盤	鹿角	○	5.3	28	20	6	接合しないがおそらく同一
50-61	7	Ⅳ層	銛頭	雌形Ⅱ類	海獣骨	○	1.3	28	13	6	頭部破片
50-62	7a	Ⅳ層	銛頭	雌形Ⅱ類	海獣四肢骨	○	1.7	28	11	9	索溝部破片
50-63	7	Ⅲ層	彫刻		鹿角	○	26.5	28	54	24	線刻7本　他7片
92-1	8	床面	銛頭	雌形Ⅰ類	海獣四肢骨	○	4	88	12	8	ほぼ完形
92-2	8	床面	銛頭	雌形Ⅰ類	海獣骨	○	2.2	60	10	6	尾部やや欠
92-3	8	床面	銛頭	雌形Ⅰ類	海獣肋骨	○	1.6	30	10	5	下半・先端欠
92-4	8	床面	銛頭	雌形Ⅰ類	海獣骨	○	0.8	30	9	4	尾部破片
92-5	8	床面	骨鏃？	Ⅲ類	鳥管骨	○	0.7	24	6	5	先端欠
92-6	8	床面	刺突具		エイ尾棘	○	0.4	32	6	3	頭部破片
92-7	8	床面	棒状製品	Ⅰ類	海獣骨	○	1.3	31	9	6	破片　線刻あり
92-8	8	床面	垂飾	有孔円盤	鹿角	○	7.9	48	47	6	
92-9	8	床面	釣針軸	Ⅱ類	海獣骨	○	26.4	55	53	12	湾曲部破片
92-10	8	床面	釣針軸	Ⅱ類	海獣骨	○	48.1	158	56	15	両端欠
92-11	8	床面	釣針軸	Ⅱ類	海獣骨	○	22.7	63	49	16	湾曲部破片　再加工品？
92-12	8	床面	釣針軸	Ⅱ類	海獣骨	○	4.8	35	23	9	湾曲部破片
92-13	8	床面	棒状製品	Ⅲ類	海獣骨	○	0.7	29	9	3	同一個体？　有孔
	8	床面				○	4.4	122	10	2	
93-14	8	骨塚	棒状製品	Ⅱ類	海獣骨	○	9.4	116	11	6	完形　先端山形
93-15	8	骨塚	骨鏃？	Ⅲ類	鳥管骨	○	0.5	25	6	5	頭部欠
93-16	8	骨塚	骨鏃？	Ⅲ類	鳥管骨	○	0.3	16	5	5	頭部欠
93-17	8	小骨塚	掘具		鯨骨	○	46.5	96	77	16	破片　突起部残す
93-18	8	Ⅲ層	垂飾	有孔円盤	鹿角	○	15.2	40	38	7	ほぼ完形
93-19	8	Ⅱ層	垂飾	有孔円盤	鹿角	○	15.5	41	38	9	ほぼ完形
93-20	8	Ⅲ層	彫刻	クマ浮彫	鹿角	○	26	65	35	18	破片
93-21	8	撹乱	彫刻	浮彫	鹿角	○	27.7	113	20	18	破片
93-22	8	Ⅲ層	彫刻	クマ	鹿角	○	4.4	22	11	16	上半部破片　首輪・縄の表現？
126-1	9c	骨片を含む焼土	銛頭	雄形	鹿角		4.3	84	19	5	ほぼ完形
126-2	9a	床面	銛頭	雌形Ⅰ類	海獣骨		2.1	42	12	8	上半欠
126-3	9a	床面	銛頭	雌形Ⅰ類	海獣骨	○	1.1	27	10	6	胴部破片
126-4	9a	床面	釣針軸	Ⅰ類・接合法	海獣骨		29.2	140	55	14	基部破片　未成品？
126-5	9a・9b	床面	銛頭	雌形Ⅰ類	海獣四肢骨		2.5	66	11	6	尾部端欠
126-6	9c	床面	棒状製品	Ⅱ類	海獣骨	○	18.7	192	15	6	完形　歪み著しい
126-7	9c	床面	掘具		鯨骨	○	10.2	47	21	11	基部片側
126-8	9c	床面	掘具		鯨骨	○	42.1	170	29	11	ほぼ完形
167-1	10c	床面	掘具		鯨骨	○	69.3	162	45	19	
167-2	10c	床面	棒状製品	Ⅱ類	海獣骨	○	1.2	20	12	3	
167-3	10	Ⅲ層	彫刻	クジラ浮彫	鹿角	○	18.7	80	19	14	尾部破片